

VOCALOID×包丁さんの
うわさ　～路頭の花と
歌姫達～

kasyopa

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VOCALOIDが現実中存在する、そんなお話。

優しき青年と、二人のVOCALOIDに訪れるハチャメチャで優しき日々。

そんな中現れた、一人の歌姫。彼らはそんな日常から何を見い出すのか。

優しき一人の少女と、人に作られ人に真意を曲げられた少女達。

それを少女は変えることができるのか——？

Yoshokiさん執筆、『ミクノポップ!!』でコラボさせて頂きました！

『ミクノポップ!!』の26話、27話もよろしくお願いします！

興味のある方、面白そうだなと思った方は、ゆっくり見て行ってね！

4／27『VOCALOID ～家族と共にある日々～』×『包丁さんのうわさ』 開幕。

『VOCALOID ～家族と共にある日々～』 主人公：遥 優希

『包丁さんのうわさ ～路頭に彷徨いし花～』 主人公：水生 夏奈子

にて随時展開予定。

5／10 包丁さんの真名を伏せ。呼び方を多少変更・サブタイトルの話数表記を半

角二桁に統一

5／16 メインタイトル変更

目次

第01話 事の発端 | 1

第02話 Wonder Cafe

17

第03話 コスプレ大会? | 34

第04話 朽ちたサイハテ | 49

第05話 歌姫の告白 | 63

第06話 デート or DATE (前編) | 79

第07話 デート or DATE (後編) | 94

第08話 温泉の帰り道 | 105

第09話 噂を信じた者 (前編) ※前書 | 266

必読 | 118

第10話 噂を信じる者 (中編) | 133

133

第11話 噂を信じる者 (後編) | 149

149

第12話 一段落 | 162

第13話 命令は絶対? | 175

第14話 新しい居場所 | 190

第15話 断てぬ縁 前編 | 204

第16話 断てぬ縁 中編 | 220

第17話 断てぬ縁 後編 | 236

第18話 子供は風の子 | 251

第19話 平たき和み | 266

第20話 似て非なる『物』—— 280

第20話 外伝 ある春の出来事

295

第21話 包丁さんの受難—— 311

第22話 包丁さんの平凡—— 332

第23話 包丁さんの思い—— 346

第01話 事の発端

S i d e 遥 優希

もう年末の朝。

「マスターマスター！ 学校遅れるよ！」

「むう……今何時？」

「6時半！ 早く起きて〜！」

なるほど、ならもうちよつと寝てられるかな。

一人の少年が俺の体を揺らしながら必死に起こそうと努力しているが、俺は起きない。
い。

もう少し寝たいのですよ。布団の中って温かいしね。

「レンそんなんじゃないや駄目！ マスターはこうやって起こさない」と

そんな事を言った少女は次の瞬間。

「ダイビングプレスー！！！」

「ぐはあっ!？」

走る衝撃、痛感する重み。加速を付けた43kgの体が俺の腹部に直撃した。

「下手すれば死にます。本当にありがとうございます」

「そんな事言つてないで早く起きて」

二人に手を引かれて寢床から起き出し、俺は朝食にありつく。

着替えは朝食で服が汚れる可能性がある為後回し。

二人の少女と少年は隣同士に座り、俺はその間に向かい合う形で席に着いた。

少女の名前は鏡音リン。少年の名前は鏡音レン。クリプトン社製で実質4番目に発売された。

二人は双子やら姉弟やらネットでは囁かれているが、正確には「鏡に映つたような存在」なのだ。

すなわちもう一人の自分のような存在であり、それ故の仲が二次創作物では色々な形で描かれる。

「いただきます」

今日の料理当番はレン。ベーコンエッグにグリーンサラダ、紅茶にパン。

簡単な物しかないが、朝食らしくて俺は構わないと思つている。

この二人に料理を教えるはいても、まだ晩ご飯並みの物は作れるほどまでは教えてい

ない。

二人の方は俺に早く楽をしてもらえよう、率先して手伝いに励んで学ぼうとしている。

どんな親孝行だと言いついそうになるが、それが二人の思いやりなのだから俺もそれに答えなくては。

「どうですかねマスター？」

「ん、上手く出来てるよ。俺よりも味にうるさいリンに聞いたらどうだ？」

「私も問題ないと思うよー？ もうすぐしたらアレンジ加えていいかなあ」

「マスター、アレンジは人前に出せる物が作れるようになってからって言ってたしね」

理由は言わずもがな、不味い物を更に不味くしかねないからである。

よく人がやりたがる事だが、その料理を食べる者の事も考えてもらいたい物だ。

昔は……嫌と言うほど経験した。その俺の想いを分かつ者など要らない。正直俺だけで十分だ。

いや、確かリンがハマした料理をレンに食べさせて悶絶していたな。

その後何とか水を飲ませて、口直しのバナナを食べさせる事で返らせる事に成功した。

「あの時は死ぬかと思った」

「あはは、ごめんねレン」

二人はその話題で盛り上がっていたようで。

「いっちそうさま」

俺はさつさと制服に着替えて鞆を持ち、家を後にする。

「いってきます」

「いってらっしゃい！」

二人の見送りを笑顔で返して通学路に着いた。

俺の親は忙しい人で家に返ってくる事もほとんどない。

だから声も顔もあまり覚えていない。祖父と祖母に育てられたがもうその二人もこ

の世を去った。

一人少し寂しい思いをしていたが、ある日起きた事態で急変する。

日本中のVOCALOIDの実体化。突然すぎる振りだが、これは世界中も驚いた

事。

当時はマスコミや2thやニコ動が騒いでいて、全VOCALOIDの生産及び販売

が中止された。

回収にも立ちあがったが、マスターだけでなくオタや厨達の力で政府が人権を発動す

るまでに至った。

別名「現代版・嘉吉の土一揆」とか言われている。嘉吉は年号だが、これもマスコミを賑わせた。

それから一年が経ったが未だに原因は解明されていない。正直動物の突然変異より難しいと思う。

「おはよう遙」

「おはよう夏奈子。名字で呼ぶな」

「まあまあ。それよりさ、二人はどう?」

「相変わらずの仲のいい姉弟だな。そっちは?」

「こっちも相変わらず。ま、そこがいいんだけど」

完全無欠というか、完璧超人というか。そんな感じかなー。

そう付け加える彼女。彼女が持っているVOCALOIDは巡音ルカ。

クリプトン社製、実質5番目に発売された。クリプトン社製だけで見ればだが。

今までは和製英語しかなかったのだが、彼女は普通の英語で歌ったり喋ったりできる。

「作曲はしてる?」

「いんや全くしてない」

「だよねー。でも家族みたい居てくれるのは凄くうれしいよね」

大いに頷ける事を言った夏奈子。確かに一人暮らしの俺達にとつては彼女らの存在はありがたい。

夏奈子も一人暮らしだ。

家が貧乏で高校入学と同時に独り立ちしたのだが、この場所を離れたくないという理由で近くのマンションに引っ越した。

学生でマンションかよと聞いてみたが、彼女は節約すれば大丈夫！　と言っていた。現に一年間普通に生活している。将来専業主婦にでもなれば結構有名になると思う。

「それにしてももうすぐクリスマスだね〜」

「もうクリスマスか……リンとレンのプレゼント考えてやらないとな」

それも、誕生日プレゼントとはまた別に。

永遠の中学生だからずっと買ってやらないといけない。特にリンが渋りそうだ。

「全国のリンレンマスターは大変そうだ」

「その内の一人が優希なんだよね。幼馴染の私も大変だ」

何故大変なのか突っ込みを入れたかったが、そんな事を話しているうちに学校に着いた。





気だるい授業も、教え方のいい先生によって完全にブレイカーされる。

そんなもんです。少なくとも俺はそう思っている。

で、昼休みなのだが。

「お弁当忘れた〜!!」

机に突っ伏し嘘泣きを演出しながら、隣のクラスにまで聞こえそうな声量で叫ぶ夏奈子。

「うう、ひもじいよお、ひもじいよお……」

「俺の弁当やるから落ちつけ。というか落ち着かないと逆にやらん」

「ええ?! くれるの!?!」

「解ったから落ちつけ」

ガバツ、と音を立てながら俺の顔を見る彼女を落ち着けさせて、飛びつくのを阻止する。

テンションが上がると何するか解らんからな。その上、幼馴染スキルを使って周りの反応を全て受け流すし。

「それにあのルカの事だから、届けてくれてるかもしれないじゃないか」

「おお！ その手があった！」

そう言うと夏奈子は職員室まで駆けていった。

この学校からマンションまではあまり遠くないし、彼女のルカは車を運転できる。もし届いてなくても電話すれば、すぐにでも届けてくれるだろう。

結論。女が抱く食べ物の執念は凄い。

暫くして上機嫌で戻ってきた夏奈子。その手には風呂敷で包まれた弁当箱が。

「いや、持つべきものは家族だね。これに尽きるよ」

「良かったな。流石はルカと言うべきか」

彼女が先生に聞いた話によれば、一時間目が始まる前に届けられていたらしい。

授業まで時間が無かった為ここまでは来なかったそう。

こうして俺も彼女も、何一つ気にすることなく昼食を食すのであった。

S i d e 鏡音リン

そんな頃、私とレンは昼食を終えて冷蔵庫に何も無い事に気付き、買い出しに行くのだった。

ここはどっちかといえば田舎だからVENが流通していないとも思われがち、だけ

ど。

お財布ケータイ感覚で使えるカードと、読み取り機が開発されVOCALOIDでも簡単にお店での買い物を楽しめるようになった。

開発元はやっぱりV.A.W.C。私達でも出来るお仕事もあつたりする。

売子とか、道路補正とか、レジとか、清掃活動とか、ボランティアとか。

「レン、カード持った?」

「持ったよ。家の鍵も一緒に」

「書き置きはしておいたし、リストも持ったし、行くつか」

「うん、そうだね」

コートを着て、マフラーをして防寒対策はばっちり。

家を出て鍵を閉めて、近くのスーパーまで歩く。

田舎だからって不便な事はない。あると言ったらVOCALOIDが少ない事かな。

ミクお姉ちゃんとかめーちゃんとか、他の私達とか居たらいいのに。

そんな事を思いながら歩いていると。

「あら、もしかして遙さんのリンとレン?」

「えっ、あ!」

マフラーと明るい赤のコートを着たルカさんが車で通り掛かった。

ナンバーからしてもしかして。

「水生さんの所のルカさんですか?!」

「ええ。二人ともどこに行くの?」

「ちよつとそこまで買物に」

「偶然ね、私もなのよ。デパートまでだけど、よかつたら一緒に行かない?」

「はい!」

こうして三人で少し遠出する事になった。



こちら辺では一番大きいデパートに着く。因みに二階建て。

ここにはルカさんに連れて行ってもらっただけで、マスターが連れて行ってくれた事はない。

「ルカさんありがとう」「ルカさんありがとうございます」

「こちらこそ。実は誘ってでも行こうかと思つてた所だったから」

ルカさんは良い人。そう言えば最初に知り合つて唯一のVOCALOIDだ。

「もつといろんなVOCALOIDに会いたいなあ」

「そればっかりはどうともいかないよ」

「そうよ。今は兎に角買い物しましょう」

私は少しがっかりしながら二人の後を追うのだった。

S i d e 鏡音レン

ルカさんに連れてきてくれたデパート。

ここにはとにかく色んな物がある。

一階の食料品はいろんな種類があり、普段見ない物まで置いてある。

二階の雑貨や服もかなり揃えが良い。大抵の日用品は此処で揃うほど。

あ、そうだ。詰め替え用のシャンプーとリンスも買つとこう。

リストに書き込んでいるとルカさんがそれを覗きこんできた。

「レンはそう言う所しつかりしてるわね」

「はい。忘れると大変だし、此処に来れる事もあんまりないんで、予備のも一応」

「レンはしつかりし過ぎなんだって」

リンが頬を膨らませて不機嫌さをアピール。その顔がおもしろくて二人で笑う。

カートに籠を乗せて僕が押し、リンがテキパキと必要な物を入れていった。

ルカさんは一人で全部やってるからゆっくりだけど、野菜などの鮮度をしっかりと見て見ている。

リンはそこら辺気にしているんだろうか？

「葉っぱの野菜はみずみずしくて切り口が綺麗な物が新鮮なの」

「へえ、そうなんですか」

「マスターから教えてもらった事だけれど、参考に選んだほうがいいと思うわ」

「は、はい」

それからルカさんには、魚の鮮度の見分け方等を教えてもらいながら一緒に買い物をした。

そのこと全部ルカさんのマスター、夏奈子さんから教えてもらった事だそう。

僕もリンも、夏奈子さんって結構物知りなんだ、と驚いていた。

S i d e 遥 優希

家に帰ると鍵が閉めてあったので、二人とも外出しているのだろうと思いつきながら鍵を開ける。

「ただいまー」

リビングの机に置かれていた置手紙。字からしてリンの字だ。

「買い出しに行つてきます。」

何時頃から出ていったのかは解らないが、今時計は4時ごろを差している。

もうそろそろ帰つてくるだろうと思つてみると、見なれた車が家の前で停車した。

確かあれは夏奈子のルカの車だ。ナンバーからしてそうである。

車から二人が出てきて彼女にお辞儀をすると、すぐに行つてしまった。

ガチャリ。ガタガタ。

「あれ?!」

「鍵閉まつちやつた!」

戸惑つた声が外から漏れて俺の耳に届いた。

誰しもが起こす間違い。鍵を掛けたと思つて鍵を開けると、実は開いていて閉めてしまふ。

焦りながら二人が再び鍵を開けて入り、リビングの戸を開けると元気な声が家の中に

響いた。

「「ただいまー!」」

「おかえり二人とも」

「「マスターもお帰り!」」

「ただいま」

二人の持つている袋の絵を見て、なるほどと頷く。あのデパートに行っていたのか。

「マスター、ルカさんにケーキ奢ってもらったんだ!」

「そうか、よかつたな」

「自分で払いますって言ったんだけど、いいわって言われて……」

「まあまあ、そんな気に病むな。相手が言ってる事だしな」

あのルカだ。年下の面倒見がいいのも夏奈子に似たんだろう。

また今度お礼でも考えないといけないな。夏奈子ではなくルカに。

「結構買って来たんだな」

「予備のトイレットペーパーとかも買って来たからね」

「食料品もいっぱい買って来たよ」

「VENの残高だけには気を付けるよ?」

「はーい」

この二人はかなり貯めてから使う性格だから、そこまで余裕が無くなったら使うのも止める。

そして再び貯め始める。二人一緒に同じ仕事をする事もあれば、別々の時も。

レン専用の仕事もあるが、それは本人が嫌がっているのでやらない。やらせもしな

い。

恐ろしいのは若干裏の仕事も入っている事だ。主にネタとして扱われている方面の物。

真の意味で、仕事を選べない〇〇である。時給は高いんだがな。



晩ご飯を終え、入浴も済ませ、寝床に就く。

二人はすっかりしてるから、最初から最後まで見てやらなくても出来る。

明日は早くもクリスマススイブだ。さて、夏奈子でも誘ってみるか。

お金はまだ余裕があるし、父さんと母さんからの仕送りももうすぐ来る頃だろう。

そんな事を考えながら俺の意識は夢の世界に落ちていった。

Outside

優希が眠りに就いた後、リンとレンの二人はある意味壮絶な戦いを繰り広げていた。

「持ち弾は2、防御も可！ それじゃあ……」

「スタート！」

バスッ！ ボスッ！

「まだまだあー！」

「無駄無駄無駄あー！」

何がどうなればこんな台詞が飛び交うのか全くの謎だが、楽しければそれでいい。

14歳の二人はやはりまだまだ無駄垢な子供であり、暫く枕投げを繰り返していた。

この後二人は疲れ果てて寝るのだが、その勝敗はその二人でさえも知らないのだった。

第02話 Wonder Cafe

S i d e 遙 優希

今日は自力で起きだし、リビングの暖房をつけて朝食を作り始める。

昨日リンとレンが買い出しに行ってくれていたお蔭で、今日は御馳走を作ってもなんら問題なさそうだ。

ケーキを作る材料はなさそうだし、買ってくるとするか。

と、不意にドアの開く音が耳に届く。

「おはようございます……マスター」

「レンおはよう。まずは顔洗って着替えてきたらどうだ？」

眠い目を擦りながら着替えずに俺の隣に移動し、おもむろに手伝おうとするレンに制止を掛ける。

彼はそれを聞いてゆっくりと頷くと退室していった。

レンは結構しっかりしているが、しっかりし過ぎているのが玉に瑕だ。

さつきもそう。俺の事を思って行動してくれるんだが、自分の事もうちよつと気に

掛けて欲しいと俺は思う。

目に見えてない所でも俺の事を気にして行動してそうだ。

不可が掛かり過ぎてぶっ倒れたら本末転倒なんだが。

気難しい年頃なんだろうか、彼自身。

「マスターおはよー」

「リンおはよう。顔あらって着替えてきたら？」

「はい……？」

まだ若干寝ぼけているリンはふらふらと洗面所に向かう。

彼女は姉としては首を傾げざるを得ないが、個人として見れば普通の活発な女の子である。

彼女は彼女なりに俺の事を思っているのだろう。感情表現は各自によって違うし。

子どもっぽい部分もあるが、それによって家の中が明るくなったり騒がしくなったりする。

静まった家庭より騒がしい家庭の方が賑やかでずつといいと俺は思っている。

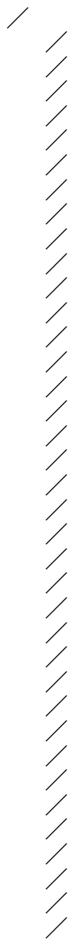
時計を確認すると、いつも二人が起きだす時間より今日の方が遅い事に気付く。

まあそこまで気にすることもないか。

「マスターすみませんいつもいつも！」

「主として当然だと思いがな、俺は」

レンが駆けこんできたと同時に、少し横に移動して彼のスペースを作ってやるのだった。



朝食も片付けも済まして三人リビングでゆったりする。

俺はソファに座ってのんびりテレビを眺め、二人は取っ組み合いでじゃれ合っていた。た。

酷い事になる前にリンが技を止めているが、いつもぎりぎりなのでひやひやする。

♪

携帯が鳴ったので見れば夏奈子からだった。

「はいはいもしもし」

『今日そつち行ってもいい？ もちろんルカとだけど』

「ちよつと待ってくれ」

携帯のマイクを押さえながら二人に確認を取る。

二人は既に相手が誰か解っていたようで、ジェスチャーでOKを出した。
「構わんそうだ」

『りようかい♪ じゃあお昼過ぎに』

「あ、そうだ。お前今から時間開いてるか？」

『え？ うん、開いてるけど……ああ、なるほどねー』

「察しのとおり。悪いが付き合ってもらってもいいか？」

『幼馴染のお願いとあらば、たとえ火の中水の中だよ！』

「ありがとう」

『じゃあその公園で』

電話を切り俺はジャンパーを羽織る。

「ん？ マスターどうしたの？」

「いや、ちよつと夏奈子と出かけてくる。昼までには戻ってくるから」

「はーい、いつてらっしゃーい！」

「気を付けていつてらっしゃーい！」

いつもの笑顔で二人の見送りを返して自転車に跨り公園に向かう。

息が白くなっている。これは手袋しておいた方が良かっただろうか。

兎に角誘った本人が遅れたら面目ない。

因みにその公園というのは、マンション近くの小さな公園の事である。

昔は俺もよく遊んだ。夏奈子は家が遠かったから小学までは遊んだ事無いのだが。今では遊ぶ事はしないものの、待ち合わせ場所に良く使われている。

公園に着き辺りを見渡すが人っ子一人すら居ない。

どうやら俺の方が早かったようで、公園の入り口で待ちぼうけ。

「わっ!」

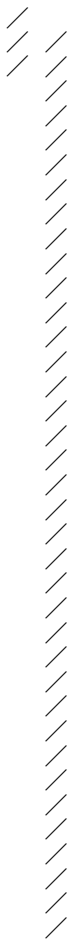
「うわっ!」

背後から夏奈子が突然現れ、大声を上げる。

「そういうの好きだなお前」

「そういう性格なの」

ふざけたようにそういつて彼女は先を行くのだった。



二人で街を練り歩く。

夏奈子に付き合ってもらったのは他でもない、二人のクリスマスプレゼントと誕生日

プレゼントを選ぶのを手伝ってもらうためだ。

「前は何上げたの？」

「マイクとWALKMAN」

「んー、じゃあ今回はちよつと主旨を変えてみたらう？」

本人曰く、VOCALOIDにプレゼントを上げるのではなく、リン・レンの二人に上げる物として見たらとの事。

即ち、一人の女の子、男の子が貰って喜ぶ様な物がいいと言う事らしい。

だからと言って服は駄目だそうだ。俺も大体予想していたが。

「本人のフィギュア貰っても嬉しいとは思わないしなあ」

「そこはあえてねんどろいどにして見るとか？」

「なるほど」

ここらの店舗でねんどろいどを入手するのは不可能。

ならば通販で二人の誕生日に届くように日付指定しておいて。

携帯で素早く注文をしてみず一つは決まった。

後はクリスマスか……クリスマスモジュールはあるが流石に二人のVENは使えないしなあ。

Appendは買えなくてもないがそれはVOCALOIDに対して買ってるも同じ

だし。

ぬいぐるみをリンに買ってもしねんどろいどと被りそうだし、リンにゲームを買ってもレンはあんまりゲームをやらないしなあ。

ふと洒落た店を見つけて足を止める。

ここら辺にこんな店あったかと思って見ていると夏奈子が話しかけてきた。

「ああ、こんなところにお店あったんだ」

「お前でも知らないなんて事あるんだな」

「それはあるよー。でも見たとこ新しい感じだね」

木製の建物。少しばかりメルヘンチックな雰囲気醸し出していた。

クリスマスだというのにその手の飾りをしてないのも、ある意味目を引いた。

カーテンがしてあり、店内の様子は入って見ないと解らない仕様になっている。

店名は……Wonder Cafeか。

「入ってみるか」

「そうだね」

カランカランと音を立てて開く扉。木の匂いが香る店内。

カウンター席が最初に目に入る。見たとこ喫茶店のようだ。

「いらっしやいませー」

一人の女性店員が俺達を出迎えてくれた。

「すみません、ここってどういいうお店なんですか？」

夏奈子は辺りを見渡しながら訊ねる。

「見たところ喫茶店だな」

「はい。テーブル席はありませんが、その代りケーキや小物やオルゴールも売ってるんですよ」

「へえー」

「それでお客様は……」

「ああいえ、ここら辺じゃ見ない店だったんでどんな店かなって思つて」

「そう言う事でしたか。ならこちらへどうぞ」

店員は一人だけなのか、この女性以外は居ない。

もしかして個人で経営してるのかこの店。

案内された先に置いてあるのは女性向けの小物や、棚に置いてある数々のオルゴール。

オルゴールか。二人のクリスマスプレゼントには良いかな。

「すみません、オルゴールって聴けますか？」

「はい。曲名は棚に書いてありますので、ご自由にお聞きください」

お言葉に甘えて棚を眺める。

置いてある全てのオルゴールは普通のオルゴールと違い、結構大きい。横幅50cmはあるか。

と、違和感をまた覚える。

「初音ミク、鏡音リン、鏡音レン、巡音ルカ、MEIKO、KAITO」

「神威がくぼ、GUMI……」

「気付きました?」

全部有名なVOCALOIDだ。凄いといしか言いようが無い。

そもそもオルゴール風の音源は聞いた事があるが、実物は存在しない物と思っていた。

「これ一体どうしたんですか?!」

「オルゴールは全部自家製なんですよ。だから此処にしか売ってません」

自家製オルゴール。でも何故VOCALOIDにする必要があるのだろうか。

「じゃあなんで……」

「私自身がVOCALOID大好きなんです。それに——私の家族ですし」

店の奥から足音を立てて出てきたのは。

「えっ?!」

茶髪の女性と蒼い髪の男性。モジュールはAlice in MusicklandのEmpressとStrange Singer。

言わずと知れた年長組、MEIKOとKAITOである。

というか、この店の雰囲気と彼女らの格好は妙にマッチしていた。

「このモジュールつてもしかして」

「いや、これはまだ配信予定にすら入ってないから」

「これも自作。私の家族はMEIKOとKAITOだけだけど、全員分の衣装は作ってありますよ」

うわー、凄いと云うか何と云うか、圧巻の一言に付きる。

「それにしても本物は始めて見た」

「私も」

「これはマスターからのクリスマスマスプレゼントも兼ねてるのよ」

「マスター、結構意気込み凄かったよね。クリスマスには完成させるんだー！　って」

「それに私達には見せてくれないんだもの。流石に気になったけど」

「この二人もマスターとは仲良くやってるみたいだ。」

「因みにお二人はVOCALOIDお持ちですか？」

「俺は鏡音リン・レンを持っています」

「私は巡音ルカを」

「そうだったんですか！ では、また今度一緒にいらしてください。Alice in
Musicklandの衣装を差し上げましょう」

「ええっ?!」

「その代りと言ってはなんですが、その時に写真を撮らせてくれませんか？」

「あ、はい。いいですよ」

そんな事でいいのかと俺は困惑しながらも返事を返した。

「後、お名前を……」

メモ帳を取りだして俺と夏奈子の顔を見る女性。

「俺は遙 優希です」

「私は水生 夏奈子です」

お互いに漢字の説明をし終える。

「遙さんに水生さんですね。私は町谷 友江といいます」

名刺を渡される。俺は普通に受け取り、夏奈子は戸惑いながらも受け取った。

その後俺達は50000円のVOCALOIDオルゴールを購入し、店を後にした。

「「ありがとう」ございましたー」」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
 昼なので一旦夏奈子と別れ、帰宅。

「ただいまー」

「おかえりなさいマスター」

出迎えたのはレン。リンの姿は無く奥からチャーハンの匂いが漂って来た。

「おかえりマスター!!」

台所の方からリンの声が木霊した。

ちよつと考えていた時間より遅くなった。しかしそれ以上の収穫があつたから良し
 としよう。

・
 ・
 ・
 昼飯を終えて、暫くすると夏奈子とルカが訪ねてきた。

リンとレンがルカを手厚く歓迎したのに対し、俺が夏奈子に対しての対応がそつけな
 かつたので本人から猛抗議を受けた。

それも受け流してクリスマスパーティーの準備をする。

因みに俺達は飾り付け担当、夏奈子とルカは料理担当だ。

俺が折り紙で鎖を作り、二人は仲良くクリスマスツリーの飾り付けをしている。

一番上の星を誰が飾るか揉めていたが、俺が飾るのは最後だろと言ったら落ち着いた。

「綿付けて〜♪ リース付けて〜♪」

「サンタさん付けてっ、ボール付けてっ」

お互い言葉のリズムは違うが、ぴったり体は息が合っており交互に飾り付けていく。

「マスター、ライトが一番上の星ってどっちが先？」

「ライトだな」

まあ家庭によつての文化だからこれが正しいっていうのは無いしな。

「相変わらず仲いいよね、あの二人」

「そうだな」「そうですね」

また今度「廃都アトリエスタにて」でも歌わせようか。

「だーめ！ 一番上の星は私が飾るの！」

「僕だって飾りたいんだ！ 飾らせろよ！」

ライトも巻き終わり、再び揉め始めた。

レンは感情が高まっているのか俺口調になっている。

「私お姉ちゃんだから優先なの！」

「そんな設定公式にもないだろ！ それは二次創作だし！」

【悪ノ召使】でもレンそう歌ってるじゃん！」

「それが創作なんだって！」

「じゃあ間を取って私が「駄目!!」うう……」

夏奈子がどさくさまぎれに入ろうとしたが跳ね返された。

冗談で言ったのかと思っただけ彼女を見てみれば、割と本気だったみたいで凹んでいた。

ルカが少しフオローして少しはましになっているが、まだ落ち込んでいる。

「む~~~~~!!!」

しばらくはくらくらめつことが続いていたが、とうとう二人は声を上げて笑った。

「じゃあ二人で飾ろっか？」

「そうだね」

やっぱり二人は仲良しでなければ。

兄妹でも、双子でもなくとも、仲のいい事に越したことはないのだから。

「かんせい!!」

ほらな。

「こっちの料理も出来たよ〜」

「こっちも大体出来たし食べるか」

「は〜い！」

皆で料理を食卓に運び、席に付く。

「じゃあ、メリークリスマスマス！」

「「「メリークリスマスマス!!」」」

いただきますの変わりの挨拶を交わして、乾杯するのだった。



夏奈子とルカが帰っていった後。

俺はWonder Cafeで購入したオルゴールを、リビングでゆったりしている

二人に渡す。

「リン、レン、メリークリスマスマス」

「えっ? あ、オルゴールだ!」

「マスターありがとうございます!」

因みにリンには「おひめさまになりたいのっ!」のオルゴール、レンには「存在のア

ンサー」のオルゴールだ。

早速二人はゼンマイを回して聞いている。

「綺麗な音……」

「あの曲がこんなに着く曲になるんだ……」

二人寝つ転がりながら、肘を着いて聴き惚れていた。

その光景を見て自然と笑みが零れる。

喜んでもらえて本当に良かった。

「レン、マスターにプレゼント渡さなきゃ」

「そうだね」

二人一緒に部屋を出ていき、すぐに戻ってきた。

「いつもありがとう、マスター」

綺麗にクリスマス用にラッピングされた小さな箱。

少々驚きながら包装紙を解いて箱を開ける。

入っていたのは腕時計。結構高そうなやつだ。

「凄いな、高かったんじゃないか？」

「えへへ、それでも無かったよ？」

「二人のVENを出し合ったからあんまり」

二人が期待してるような視線を向けてきたので、俺はそれに答えるように付けてみる。

「かっこいいー！」

やっぱり、贈り物は物より気持ちなのかもしれない。

こんないい物でも、適当に渡されたら価値が下がったように思えてしまう。

大切なのは気持ち。そう思った今年のクリスマスだった。

第03話 コスプレ大会？

Side 鏡音レン

クリスマスの翌日。

久々のマスターとのお出掛け。

此処最近では寒いから、マスター自身も僕達も率先して外に出ようとはしなかった。

そんな毎日だったから、今日の突然のお出掛けは流石にリンと戸惑った。

多分よっぽどの事があつたと思うけど、理由を聞いてものりくらりとかわすような返事だけ。

それくらいのも事ですねたりはしないけど、リンはずっと聞きっぱなしで回りから目立っていた。

「ねえマスター何処行くの〜?」

「付いてきたら解る」

商店街の近くをゆっくり歩くマスター。

心成しか少し浮かれているみたいに見えた。

マスターがここまで喜ぶ事もそれほどなかった。

それも自分の好きなPさんの新曲が上がった時とは違う気がする。

因みにマスターが好きなのは民族調や和曲。悲しかったり、儚かったりする感じの曲も好き。

人気のPさんのVOCALOID達はどんな生活を送っているかは僕達も解らない。

ただ、時たま上がるトークロイドの動画で彼女達の性格が出る時もある。

そこから憶測すれば、VOCALOIDに対するマスターの対応が解るんだけど。

一緒にその環境で生活すれば自然とそれが解け込んで来るから。

「着いたぞ」

「え？ あ、はい！」

S i d e 遥 優希

レンは一人考え事をしてた所為か、俺が足を止めても止まる事は無かった。

彼はすぐに掛け寄ってリンの隣に移動する。

「もうレンってば、何考えてたの？」

「あー、思考に浸ってたって言うか」

「それは置いておいて、入るぞ」

店の外見をしつかり見せる事も無く、俺は靴裏に付いた雪を掃って店の中へ足を進める。

OPENと書かれた板が掛けてある扉を開けると、カランカランとベルの音と共に、木の香りに混じった甘い匂いが鼻を撫でた。

「わあ……」

始めて見る店の雰囲気とその言葉しかでないリンとレン。

ここばかりは先に進まず、ゆっくりと眺めさせる事にする。

「いらつしやいま……と思ったら昨日も来たお客さんじゃない」

Empressのモジュールを纏ったMEIKOが出迎えてくれた。

客に対しての態度は一体どうかと思うが、彼女だから仕方ない。

「こんにちはMEIKO。この店ではずっとその格好なのか？」

「ええ。と言つてもクリスマス期間だけだけど。それよりも、ほんとに連れてきたのね」

MEIKOは俺の隣に立っているリンとレンを見て、驚いたように見詰めた。

その視線に気づいたかのように二人は彼女の方を向き、そして凍りつく。

ある意味衝撃的な出会いだっただろう。

「め、めーちゃん」

「ええ。その呼び方が一番典型的ね」

「どうして……?」

「どうしてって、この家を買われたからに決まってるじゃない」

「まったくもってごもつともな答えである。」

購入されてからのどの家に行くかは、VOCALOID達の思考に反する部分もあるだろう。

それは実体化していなかった過去にでも言える事だ。

「まさかマスターが言わなかった理由って」

「サプライズ?」

「まあそんな所だ。誕生日までずらした方が良かったか?」

「そんなことない!」

力強く首を横に振る二人。

俺にはよっぽどMEIKOに会えたのが嬉しかったように見えた。

「いらつしやいませー」

遅れて出てきたKAITOを見ての反応も、驚きを隠せていなかった。

「優希さん、早速連れてきてたんだ」

「こんにちはKAITO。やっぱりその格好なんだな」

「クリスマス期間だけなんだけどね。一人でも多くの人に見てもらいたいから」

K A I T O と挨拶を交わしていると、奥から町谷さんが出てきた。

リンとレンに気付くと一目散に近付いて、目の前でかがんで視線の高さを合わせた。「いらつしやいませ」

「ハ、こんにちはー!」

「よく来てくれたね。さきつ、こちらへどうぞ」

そのまま奥の部屋に誘導する彼女を見て二人は戸惑いを隠せていない。

そんな二人に M E I K O と K A I T O が助け舟を出した。

「大丈夫よ。その人は私達のマスターだから」

「変な事はしないよ」

「少し着替えるだけだ」

「着替えるって何に?!」

俺の発言が地雷だったのか安心しかけた二人は動揺し始めた。

……そんな事を言っておきながら M E I K O と K A I T O のモジュール互いに見てるじゃないか。

「リンちゃんは M a d H a t t e r の衣装、レン君には W h i t e R a b b i t の衣装を、ね」

その言葉と共に三人は奥の部屋に消えていった。

「マスター、ノリノリだったね」

「まあ、発売日当日に私やあんたを買ってくれた様な人だったし」

「そこからどっぷりはまっつていったし」

「……ねえ」

町谷さんの裏がちよつと解つたような気がした。

暫く俺達はリンレンの着替えが終わるのを待つのだった。

それから所要時間10分。

奥の部屋からご機嫌のリンと顔を赤くしたレンが出てきた。

リンの被っている帽子の口が後もう少し大きかったらすっぽり顔まではまっつてしま
うだろう。

レンのうさ耳のカチューシャ部分は完全に髪の色と一体化しており、本当に生えてい
るのかと思うほど。

実際に着させてもらって解つた事だが、本当によく作つた物だなあと感心の域に値す
る。

夏奈子もよく自分で自作した服をルカに着させているが、此処まで凝った物を作った事は無かったと思う。

「やっぱり二人ともかわいいですね〜」

一番うつとりしてるのは着せたご本人である町谷さん。

口調がそれでも敬語なのはそれが普通なのだろう。

「ではお約束通り写真取らせてください」

「あ、はいどうぞ」

二人仲良く並んで記念撮影。

リンは誰が見ても解るほどの満面の笑み。レンはまだ顔を赤く染めた緊張状態。

その姿は彼女のアルバムに写真という形でずっと残されるであつた。

「おいしー♪」「おいしー！」

普段着に着替え終わって一服。

二人が今食べているのはK A I T O特製のオレンジアイスとバナナアイス。

オレンジは普通シャーベットだろうし、バナナもチョコバナナとしてあるのかと思つ

たら材料単品で作られたアイスがあるとは。

流石はアイスべきバカイトというタグが付けられるだけあると思った。

「僕はそんなにアイスに対して必死になったりしないけどね」

「限定物とかには目が無いくせによく言うわ」

「それはそれだよ」

まあ、このKAITOなら常時アイスアイス言ってる訳でもないだろうに。

「優希さんはどうします?」

「俺はバナラでお願いするよ」

「もつといろんなのがありますけど……」

「Simple is Best」

「わかりました」

冬にアイスなんて外道という輩が居るが、俺はあまりそう思わない。

食べたい時に食べたい物を食べるのも、時には大切なことと思うから。

KAITOが出してくれたアイスを一口。うん、この値段でこれは凄いな。

バナラビーンズも少々混じっており香りが増している。

濃厚かと思えば意外にも軽い味わいと口どけ。

アイスの口どけは、素を空気と混ぜる過程で何処まで空気を含めるかが勝負となってくる。

昔レシピにそう載っていた気がする。

うん、と頷いて彼の方を向く。作った者が食べてもらう者の反応を気にするのは当たり前だ。

それは一人前でも素人でも同じ。

「さて、こちらの用事は全て終わったので、あの衣装はお約束通り差し上げます」

「ええっ?! いいんですか!」

いきなり声を張り上げたのはリン。レンは声さえ上げていないが驚いていた。

「はい。優希さんから聞いてませんでしたか?」

「えっと……」

「マスターサププライズって言って教えてくれなかったんです」

「そうだったんですか」

町谷さん俺の方をちらりとみて俺の様子をうかがう。

多分俺が言い忘れていたとかで焦っていないかとも思っているんだろう。

「素敵なマスターですね」

「はい!!」

返事をした二人は満面の笑顔で答えた。

それから少し遅れてドアのベルが鳴った。

「おつ邪魔っしまーす!」

声を張り上げて入って来たのはやはりというか夏奈子だった。

その後ろにはルカもいる。靴に結構雪が付いてるのを見ると、歩いてきたようだ。

「いらっしやいませ。夏奈子さん」

「町谷さん、お約束通り連れてきました!」

相変わらずテンションの高い奴だ。

あんな雰囲気ならルカも察しているだろうに。

「こんにちは、あなたが夏奈子さんの所のルカさんですね」

「はい。話はマスターから大体の事は」

「なら話が早いですね。こちらの部屋にどうぞ」

リンレンの時よりもスムーズに奥の部屋に消えていった二人。

やはり少しぐらいい言っただけの方がよかつただろうか。

でも年齢的な物もあるしなあ。サプライズで喜ぶという感じで。

「ここら辺にミクはいないみたいだね」

「V A W Cじゃ嫌というほど見るんだけど」

「ああ、それはいえるんだけど」

MEIKO、リン、レンの話によれば、V A W Cでは圧倒的にミクの数が多いそうだ。

といつても有名Pのミク……VOCALOID達は見ないらしい。

彼女達は彼女達でアイドルとしての仕事があるだろうからな。

「年が明ければミクの日感謝祭で騒がしくなるからね」

「観客席が緑色に染まるんじゃないか？」

「そうだねえ、大合唱とか始まってもおかしくないね」

「そこは流石に自重すると思うよ。口ずさむぐらいじゃないかな？」

俺のリンレンも舞台やニコニコで作った曲がヒットすることを望んでいるのだろうか。

VOCALOIDが現実に現れた事により、彼女達と意思疎通が出来るようになった。

それは幸せなのか不幸せなのかは解らない。

ただ、歌うことに強いられて、歌うことに楽しみを見出せなくなったら、彼女達はど
うなってしまうのだろう。

VOCALOID。歌う為に作られたアンドロイド。

その彼女達が歌うことをもしも拒んだら。本能で歌うことを否定したなら。

それも、意志なのだろう。

しばらくしてルカが出てきた。

言わずもがな、Invisible Catである。

ピンク色の耳と尻尾。作り物とは思えないほどの質感だということは目で見てすぐわかった。

「うわ〜ふかふか〜」

夏奈子を見るだけでなく、実際にその耳や尻尾に触っている。

その耳と尻尾は当然作り物なので、触覚が働いているわけでもない。

ルカもやれやれといった表情で夏奈子を見ていた。

「じゃあ俺達はお暇させてもらおうよ」

リンとレンが自分のアイスを食べたのを見計らって席を立つ。

「衣装大切にしますね!」

「ふふふ、ありがとうリンちゃん、レン君」

「また来ますね。二人が勝手に来ることもありますが、その時はよろしくお願いします」

「へえ……」

町谷さんは不思議なものを見るように二人を見た。

その視線の意味が解らずに、当の本人は首をかしげている。

彼女がレジに立ってから俺もレジの前に移動する。

「ああ、二人にはやりたいこととか、全部任せてるんです。珍しくもないと思いますが」

「そうなんですか。いえ、マスターと言っても様々な方がいらつしやいますからね。たとえばマスターの権限が絶対つて子もいらつしやいますし」

「……まあ、マスターだつて一人じゃありませんから、それぞれですよ」

「彼方は二人を幸せにできる方ですよ。自信持つてください。彼方はそのままがいいんです」

お代を払っているときに、そつと耳打ちされた。

俺はそれに動ずることなく、また二人に何を話していたのか悟られないように振る舞った。

「今日は何かとありがとうございます」

「いえいえ。またいらしてくださいね」

「めーちゃんとK A I T O 兄さんのマスターありがとうございますー！」

「ありがとうー、めーちゃん。K A I T O 兄さん！」

「ええ、またね」「うん、それじゃあ」

扉が閉まる音に加えて、それについているベルが心地よい音を立てたのだった。

ギイ……

商店街を歩いていると、変な音が耳に入ってきた。

その変な音に気を取られて足を止める。

「ん? どうしたのマスター?」

「いや、変な音が聞こえてな」

レンが真つ先に俺の異変に気づき、振り返る。

リンもレンも二人で手をつないで、俺の前を歩いていたのだが何故レンは気付いたのだろうか。

歩みを止めたレンに引つ張られるように止まったリンも違和感を感じて振り返る。

「どうしたのレン? マスター?」

「いやマスターが急に」

「……路地裏か?」

横に視線を移すと、暗く細い道があった。

大の大人でも通れないわけではないが、パイプ等が張っていてすんなりとは通れないだろう。

そして、その奥に緑色の何かが蠢いていた。

それをしかととらえたとき、俺はその存在とその状況を理解しなくなかった。

「リン、レン。すまんが見えるか?」

「え？ 何？ 路地裏に何か……っ?!」

「え、マスター？ 何か見つけ……っ?!」

リンは口に手を当てて嘔吐寸前、レンは顔を蒼く染め上げ俺の背後に逃げ隠れた。少なくともVOCALOIDである彼女らならその気になれば遠くも見れるので、二人に頼ったが逆にショッキングな物を見せてしまったことを後悔する。

「すまん、二人とも。ちよつと先に帰っていいぞ」

「う、ううん大丈夫。でも、『あれ』が本当に『あれ』だったら……私達も手伝うから」
「僕達も、手伝わないと……流石に、無理だろうからさ」

俺は『それ』に近寄る。

二人は小声で大丈夫、大丈夫と言いながら、俺の後についてくる。
やはり、というかなんというか、『それ』は汚れた歌姫であった。

第04話 朽ちたサイハテ

Sude 遥 優希

リンとレンからコートを借りて、彼女の汚れた服を隠しながら一直線に家に駆け込む。

「ねえレン。どう思う?」

「どう思うって、…正直何も考えたくないよ」

「だよね…ごめん」

あの路地裏で見つけたのは、電子の歌姫。

そう。もつとも有名な歌姫『初音ミク』だ。

だが、その姿はある種残酷でひどい物だった。

一言でまとめるなら…彼女は犯されていた。見つけた時には既にその相手はいなかったものの、彼女に掛かっていた白い粘着性のある液体や臭いからしてすぐにわかった。

解りたくないし、理解したくない。なぜこんな目に歌姫が会わなければならないの

か。

「マスター。気持ちは解るよ、だって、そういう人だっているんだし……」

「……ああ」

俺はとりあえずリンに彼女の着ていたいつもの彼女の服を脱がさせて、手洗いを。

リンはそのまま彼女を風呂場に連れていき、レンは空き部屋の準備をしてくれている。

ある程度その液体を取ってから洗濯機に入れ、二人の様子をうかがう。

「リン、大丈夫かー?」

「ちよつとこれは……でも大丈夫ー!」

「そうか、解った。念入りに洗っておいてやってくれ!」

「はーい!」

「マスター! ベッドの次何したらいいー?」

「ある程度埃被ってるから掃除を頼む!」

「はーい!」

一応、リンのパジャマと替えの俺のパジャマを風呂場に置いて退散する。

リビングでソファに座ると、どつと疲労と眠気が襲ってきた。

寝るわけにはいかない、と体に言い聞かせるも、それを聞いてくれない。

そこまで今日は動いていないし、運動不足でもない。

と、ミクを見つけてからの一部始終を思い出す。

彼女を発見して精神面でかなり疲労し、彼女を大急ぎで運び肉体面で疲労した。

「俺自身、一番衝撃的だった。ってことか……」

それを最後に俺の意識は自然と闇の中に落ちていった。

「っ?!」

目を覚まし、腕時計を確認する。

7時。少し……いや、普通に寝過ぎたようだ。

気が付けば掛け布団をかけている。

誰かかけてくれたのだろうか。

「あ、マスター。起きた?」

「ん……リン。すまん、先にちよつとダウンしてた」

「いいのいいの。マスター何かと疲れてた顔してたし。何ならもつと寝る?」

「いやいい。今日の晩飯当番は俺だったな」

「大丈夫だよー。私が代わりに作ってるから、とりあえずマスターはレンとお姉ちゃん

のところに行つてあげて。二階にいるから」

「お姉ちゃん……？ ミクか？」

「うん。一度起動……気が付いたんだけど、PTSDみたいな起こしちゃつて……さ」

「今は」

「私とレンで何とか落ち着けて、今は寝てる。とにかくマスター、行つてあげて」

「ああ」

一二階の空き部屋。そこから明かりが漏れている。

数回ノックしてレンの承諾を待つ。

「誰？ リン？」

「ああいや、俺だ。今起きた」

「マスター。まって、今開けるね」

カチャリと鍵の開く音。もともとこの空き部屋は母さんの部屋だ。

関係ないが、母さんの部屋と父さんの部屋、それに加え書斎には鍵がついている。

PTSDのようなものを発症しているのなら、ある意味鍵付きの部屋は正解なのだろう。

う。

「様子はどうだ」

「さつきリンから聞いてたみたいだけど、今落ち着いたところ。一応マスターのお母さ

んの物はマスターのお父さんの部屋に移動させたから、大丈夫なだけど……」

辺りを見渡すと、所々引つかかれたような跡があった。

もつとわかりやすいのは、ミクの寝ているベッド。

母は洋式の物が好きなので、自分の部屋は洋式の造りをしている。

故にといえばおかしいが、この部屋にだけベッドがあるのだ。

そのシーツがビリビリに裂かれていた。

「大分暴れたみたいだな」

「うん……引つかかれたりもしたけど……でも大丈夫」

俺は彼女の顔を覗き込む。眠れる森の美女、という表現と言ったほうがいいだろうか。だが、その顔は見るからにやつれていて、少し青かった。

その彼女の表情と、この暴れた様子。それだけで彼女がいままでどんな目にあつてきたのかわかる。

「レン、俺が寝てる間に苦労かけたな」

「ううん。マスター、一番必死で、一番疲れてたもん。仕方ないよ」

「仕方ない、か。その言葉でどこまで誤魔化せるか」

「……ごめん。じゃあ僕、ちよつと休んでくるね」

「ああ、後は何があっても任せろ」

「……マスター」

部屋から出る前。扉を開けたレンが振り返る。

「どうした？」

「気を付けてね。お姉ちゃん、なんだか男の人に対して敏感だから」

「わかった」

扉の閉まる音。俺は万が一を考えて鍵を閉める。外からも鍵で開けられるのだが、その鍵の在処はこの家の元々の住人しか知らない。

父さんと母さんは海外に旅行に出かけている。毎年恒例の親婚旅行とかなんだとか。結婚記念日と俺の誕生日後に必ず行く謎の旅行である。

因みに、VOCALOIDが実体化した件については既に説明しており、二人とも了解を得ている。

「……ミクのこと説明しないとなあ」

立ったまま、彼女を見下ろしてつぶやいた時、ミクの目が開いた。

起き上がることはせず、辺りを見回し俺と視線が合う。

「……………」

声は掛けない。レンの言葉を俺は心に止めておいたからだ。

だから逆に声は掛けない。もし、声をかけて怯えさせてしまったら、と。

「……………あの」

「……………」

「さつきは……………リンちゃんとレン君に……………」

「……………」

「……………ごめんなさい……………」

「気にするな」

「っ?!」

いきなり飛び上がった壁を背にして俺から出来るだけ距離を取る。

声をかけて、俺という存在をしつかりと認識したのだろう。

……………ここまでとは。逆に襲ってきたらどうしようかと思つたが、逆に敵対したら相手も拒絶する。

こちらが受け入れて、初めて相手も認めるのだ。

「あああ、ああああの、わわわわたし、男の…人は、あ、あああああああ!!!」

「っ?!」

「いやあ! いやあ! 怖い! コワイコワイコワイ! いやああああ!!」

「ミク! おい! 気をしっかり持て!」

「いや！ だめえ！ こないで！ コナイデエ!!」

奇声を上げながら両腕を振り回し、虚無の存在を払おうとする。

発狂。俺が男だからということなのだろうか。

解らないが、彼女は俺を、いや。男を拒絶している。

分が悪すぎる。だが、ここで俺が退散しても彼女がこれから男を拒むのは変わらないだろう。

何とかしないと。何とかしなければ。彼女にとつて。

声と俺を認識しただけで怯えるのだから、近付くなどもつてのほかだろう。

現に俺は現在位置から一步も動いていない。抱きしめるなんて論外。

今の状況を再確認する。俺がミクを見下ろしている。

そしてちょうど俺が照明の光を遮って、ミクは俺の影の中にいる。

もしかして、俺が大きく見えるのが怖いのだろうか。

実験がてら、肘を曲げ左手を上げてみる。

「ヒッ……」

やつれていた顔を引きつらせ、目に溜まっていた涙があふれ出る。

その顔の前に腕と手を出し壁にして守る。

大きく見せた……いや違う。これは手を上げたのだ。

つまりこの行動に対するこの怯え方は、暴行を受けていたと考えるのが妥当だろう。上げた手をゆっくりと下げる間、彼女はずっとその手を見て怯えていた。

しかし完全に降ろした後、自分の顔を守っていた腕を少し緩め、疑問があるような表情でその手を見ていた。

俺はため息をついて彼女の顔から視線を外し、その場に座る。

その奇行にミク自身も不思議に思ったのか、自然と腕を下において俺の顔を見ていた。

…試しにやってみるか。

「あのっ！」

「っ?!」

「本当にごめん！ よくわからないけど、ごめん！ とりあえず、ごめん！」

「……………」

「俺の顔が怖かったらごめん！ バカでごめん！ あと、生まれて来て、ごめ……いやおかしいなこれ」

「……………あの、何を謝ってらっしやるんですか？」

「いや、某野球ゲームを語る彼女攻略ゲームから引用したんだが…さすがに解らないか」

「……………」

「…パワー〇ケ〇〇ですか？」

「え……」

「インターネット機能、ついてるんです。一応これは壊されずに済みました。…彼方には、モ〇イルレディといったほうが解りやすいですか？」

「…いや、普通にそういうたとえをしなくても解る（壊されずに、か）」

「そうですか…ふふふ、なんだか、じわじわ来ちゃいました」

笑う歌姫。こんなにも早く溶解してくれた。

さつきまで、やつれた顔でいた歌姫が。最高ともいえないだろうが、笑っている。

その笑顔だけで、何か報われたような達成感というか、切り詰まった空気が一気に解れたというか。

それに対して安堵のため息をつき、天井を仰ぐ。

「よかった、何とか、なったかな」

「あ…」

「あの、ごめんなさい！ 私！」

「大丈夫」

「……ええ？」

「大丈夫、そう言ってみたらいい」

「大、丈夫？」

『大丈夫です。私は大丈夫です』って」

「……大丈夫です。私は……」

「私は？」

「私は、大、丈夫、です」

震える声。自分で自分に対して大丈夫と言えるのか。

これは今のミクにとつて結構難しいことだと思う。

だが、それが言えるのであれば、彼女は大丈夫。

自らで自らを一旦認めないと。心を落ち着けてやらないと。

「もっとしつかり言ってみて」

「私は、大丈夫です！」

「よし。それで落ち着いただろう」

「え？ あ、ほんとだ……大丈夫……」

「自分で自分に言い聞かせる。これを実感して初めて、その言葉が言える。心に何かしらの問題があれば、その言葉すらいえなくなってしまうからな」

「深いですね、あの……」

「ん？」

「私は、何故こんな所にいるんでしようか……それに彼方は」

「とりあえず、落ち着いたから一緒に下に降りよう。リンとレンが待ってるぞ」

「リンちゃんとレン君が？」

「ああ。……それに、温かいすべてがな」

「……！」

その言葉に反応した彼女の顔の表情が輝く。

……やはり、ロクな生活させてもらっていないのか……このミクは。

「あー！ お姉ちゃんー！」

リビングに入った途端、俺の横を通り過ぎてリンがミクに飛びつく。

因みにリンはパジャマ、ミクは俺の替えのパジャマだ。

「お姉ちゃん、もう大丈夫になったんだね！」

「え……」

「お姉ちゃん、大丈夫。マスターはすごく優しい人だから！ ね！ マスター！」

ほっぺたをパジャマ姿のミクの体にこすりつけながら、たつぷりの愛情表現をするリンは太陽のような子であった。

俺は同意を求めてきた彼女に、苦笑いで答え彼女の頭をなでる。

「マスター！ あ、お姉ちゃんも！」

「あ……」

レンが顔面から俺の方に一目散に飛んできて、腹部に直撃。すぐ顔を上げてミクを確認すると、次はミクの背中から抱き着く。

彼はほっぺたをこすりつけたりしてはいないが、ミクの温かさを感じているのだろう。

「あ……ああ……」

ポロポロと涙を零すミク。

それは悲しみではないのが一目で解った。なぜなら、彼女の今の表情を見れば解るから。

笑っている。笑いながら、目を細めながら涙を零していた。

体を横に向けて、リンとレンを正面から抱きしめ返す。

「私……私がお姉ちゃん……リンちゃんとレン君の、お姉ちゃん！」

「うん！」

「よかったな、ミク」

「！」

俺は自然と手が出ていた。だが上げた手はそのままミクの頭の上に置かれる。そのまま、優しく認めるように撫でる。

「怖かったか？ でも俺はお前に変なこととはしない。二人と同じようにな」

「……ありがとうございます。新しい、マスターさん」

涙を零しながら、俺の方を笑顔で返してくれた電子の歌姫。

まだ、彼女の傷は深いだろう。まだ、完全には癒せていないだろう。

でも、これでひとまずは。

こうして、新しいVOCALOIDが俺達の『家族』として受け入れられた。

第05話 歌姫の告白

S i d e 遥 優希

温かい料理を囲んで、4人の食事が始まる。

メニューはとろふわオムライスに、ポテトサラダ、コーンポタージュ。

とろふわオムライスとは、半熟のオムレツを盛ったチキンライスの上に乗せて割き広げた、凝ったオムライスだ。

というか、こんな凝った料理は教えた覚えはないのだが……。

ハイスペックリンと言われても何もおかしくない。

「デミグラスソースとケチャップがあるけど、どっちがいい？」

「俺はデミグラスソースで頼む」

「僕はケチャップ」

「私は……ケチャップでいいかな」

「はい。マスター先にお皿貸して」

キッチンから持ってきた小さな鍋からお玉で周りに流し入れる。

チキンライスの臭いがデミグラスソースの独特の臭いにかき消され、少し新鮮な気分になった。

「レン、何か書いてあげよつか?」

「あ、うんいいよそこまでしなくても」

「えー。じゃあお姉ちゃんは?」

「私も、いいかな。ごめんね?」

「ぶー。つまらないー」

暫く考えていると、リンは何か思いついたように顔を上げて、レンとミクのお皿を預かる。

「〜♪」

鼻歌混じり、たぶん曲は『メランコリック』だろう。

上機嫌に、オムライスの上に何か書いていく。

「はい! お待たせ」

レンのオムライスの上には『レン』の文字、ミクのオムライスの上には『ミク』の文字が堂々と入っていた。

やっぱり何かと盛り上げたい彼女なりの思いやりなのだろう。

えっへんと胸を張っていた。

「じゃあ、いただきますーす！」

「ん、いただきます」

「いただきますー！」

「い、いただきます」

リンの声に続いて皆匙を動かし始める。

二人はおいしいおいしいと言って食べている、が。

唯一ミクの匙だけは動いていなかった。

「…どうしたミク。調子でも悪いか？」

「いえ、調子は…あまりよくありませんが…食べられないほどではないです。でも」

「でも？」

「私、今という実感がありません。さつきはお姉ちゃんって言われて本当に嬉しかった

んです。でも、なんだか」

「あつという間だったもんね。お姉ちゃんが来てまだ半日も経ってないし」

「マスターの説得のお蔭だね」

「俺はほとんど関係ないだろう。どう変わるか決めるのは自分自身。人の意見なんざそ

れを判断する材料に過ぎない」

「でも、リンちゃんとレン君のマスターさんは私を止めてくれました」

「ほら、お姉ちゃんも言ってるから間違いないよ」

「まあとにかく食べよう。いただきます、って言ったのに食べなけりや食べ物に対して失礼だろう?」

「……ですね。改めて、いただきます」

ケチャップで書かれた字を塗り払げることなく、一口。

その光景に俺達は自然と緊張して自分の動きが止まっていた。

「おいしいです。リンちゃん、これ、とってもおいしいです」

「よかったー! お代わりいっぱいあるからたくさん食べてね!」

「お代わり!」

「レンには言っていないの!」

「なんで僕の分はないの?!」

「あはは、冗談だって。はい、お皿貸して」

温かな食卓。こんな生活を過ごせるのは当たり前じゃない。

当たり前で居られる、そんな幸せはすぐそばにあつて、一番解らない幸せなんだろう。

失われて初めて実感する、というがそれは間違いだ。気が付けば感じられる。

そんなことを思いながら、団欒(だんらん)の食事を楽しむのであった。

食事を終え食器を水に浸けて、デザートが出てきた。

プレンスコーンとココアだ。

「ジャムが欲しかったら遠慮なく言ってみてね」

そう言いつつリンはたっぷりのマーマレードと掛けていた。

「なあリン、今日はこんなにも豪華したのは」

「うん！ どんな形であれ、お姉ちゃんがやってきたんだもん。記念すべき日だよ！」

直接的にも、遠回しにも歓迎する気持ちを表現しているリン。

考えるより行動、当たって砕けるのタイプである彼女だからこそ、出来るのだろう。

俺やレンでは到底出来そうにない。俺もレンも共に慎重派だからだ。

「えっと、リンちゃん。こんなにも私のこと思わなくても……」

「いーのいーの！ 私がやりたくてやってるんだから」

「もう、気持ちだけで十分……」

「気持ちだけで伝わるものは少ないぞ？ だからリンはここまでしてるんだ」

「そうだよー。この後一緒にお風呂に入って、一緒のお布団に入って」

「……とは言ってみたが、そこまでする必要はあるのか、リン」

「リンだから仕方ないよ。お姉ちゃん、ごめんね？　リンがこんなで」「こんなって何よー！」

「（リンは夏奈子に似てきたなあ、本格的に）」

焼き立てのスコーンを食べながら、言い合っているリンとレン、そして苦笑いをして
いるミクを見る。

「これが家の日常なんだ。ミクも自然と慣れると思うけどな」

「慣れる、かな。私、こんな幸せな人達と一緒に居ていいのかな」

「自信を持って、ミク。一緒に居ることに意味があるんだ。……といっても、今日来たばかりだから難しいか」

「……はい。今も、少し不安です。こんな幸せな場所だからこそ、これが夢なんじゃないかって」

「なら、頬を抓ってやろうか？」

「！」

見るからに怯える彼女。体罰的な物にはやはり敏感だ。

「嘘嘘。さて、ごちそうさま。俺とレンは先にお風呂に行つて来るよ」

「先に？」

「ん、さっきの風呂に入ったのはノーカウントじゃないのか？」

「うんそうだよ？ お姉ちゃん、後で私と入ろう？」

「あ、うん……」

「あ、マスター待って！」

レンが一気にスコーンを頬張ってパジャマを持ってついてきた。

「ねえマスター。どうしてお姉ちゃん、あんな所に居たんだろう」

俺が体を洗っていると、浴槽の縁に両腕をおいてその上に顎を乗せたレンが訪ねてきた。

「居た、というより捨てられた、と言ったほうが妥当だな。それも、最後の最後であそこまでされて」

「前のマスター、何をしてたんだろう。何を思って買ったんだろうね」

「……………」

「あそこまで荒れてるんじゃない、ロクな扱いは」

「それ以上考えても仕方ない。彼女のみぞ知ることだ」

こうやって彼女に首を突っ込んだ以上、彼女の負い目となっている『それ』を取り除くためにも、聞かなければならない事実ではあるのだが。

「それにしても、一つ気になることがある」

「え？」

いやな話だが、いらなくなったのであればアンインストールして捨てればいい物なのだ。

そうすればこういった実体は再びソフトとなつて、形成されなくなる。

なのに、何故。

「何故ミクが、実体を形成したまま捨てられていたのか。それが気になるんだ」

「……ああ、それは言えてるね。アンインストールすれば、僕達は終わっちゃう存在だから」

「もしかしたら、お前達とはまた別の存在なのかもしれないな」

「本当の、VOCAL ANDROID？」

「ああ。言うならば機械の、な」

風呂から上がり、それからリンとミクもお風呂に行き、上がってきて全員リビングで集まる。

問題を棚上げにして明日を迎えるのもよかったかもしれないが、やはりそれに負い目

を感じている彼女をそのままの状態まで夜を迎えさせるわけにはいかない。

心の弱さが出てくるのは、深夜。午前一時や二時。

日が落ち周りが静かになって、自らが一人と感じやすくなる。

だからこそ、話をしつかり聞ける一番ゆつたりした時間に出来る限りを解決しておきたかった。

「さて、3人を引き止めたのはほかでもない、ミクのことだ」

「……………」

「やっぱり最初は自己紹介といこう。まずは俺からするから、後に続けよ?」

「はい」

「……………」

今から何が始まるのか、俺以外の3人も解っているのだろう。

でも先に行くのは、自己紹介。彼女自身も俺達のことを知らないのだから。

「俺は遥 優希。高校二年生のしがない学生だ。リンとレンのマスターをやってる。父

さんと母さんは居るが、外国に旅行中だからこの家には基本俺達の三人しかいない。

まあ、たまに幼馴染が突撃してくることもあるがな。このくらいか?」

「そうだね。私は鏡音リン! マスターとは一年くらいの付き合いかな。歌はあんまり

歌わないけど、それでも気にしてないよ。マスターの事大好きだもん! 次はレンだ

よ」

「うん。僕は鏡音レン。リンとおんなじでマスターとは1年くらい。僕もリンと負けないくらいマスターも事は好きだよ。得意なことは…身の回りのことの準備、かな？」

「私はお料理とお裁縫！」

「……さて、次はミックだな」

「はい。私は初音ミックです。詳しい経緯は、後でお話します。すみません。好きなことも、嫌いなことも、得意なことも、不得意なことも、全然解らないんです。それでも、よろしくお願いします」

「ミック、今から自分のある程度の事、教えてくれないか？」

「……………」

その言葉でミックの体がこわばる。

リンとレンが心配そうに視線を送るも、それに気づかない彼女。

「お姉ちゃん、大丈夫だつて。マスターは何か絶対考えあつて言ってくれてるから」

「そうだよお姉ちゃん。マスターは僕達よりずっと賢いし、それに博学だから」

「うん、解つた。リンちゃんとレン君のマスターさん。リンちゃんもレン君も。……長い話になるかもしれませんが、いいですか？」

「ああ」

「うん」

「では」

「まず簡潔にお話しますと、私は一年前のあの件でこの世に現れた存在ではないんです」

「「えっ……」」

「ある企業のグループの試験的な物で作られた物にすぎないんです」

「でも、それならなぜ」

「アイドルとしてではなく、私的の為のVOCALOIDとして3か月ほど前に生み出されましたから。それからはこのもの、VOCALOIDとしてでなく、セクシャロイドとして扱われてきました」

「なっ！ いや、でも……」

「酷い……！」

「そんな……！」

リンは今にも泣きそうな顔をして、手で口と鼻を覆った。同じ女の子として、辛いのが自分の事のように解るのだろう。

レンは驚愕の表情が変わる。その手の知識はあるからこそ、その言葉の意味が解る。

俺はあの状況を思い出し、納得してしまった。でも、受け入れがたいのは二人と同じ。「犯されている内に、歌うことに必要な歌声を出すスピーカーを壊されました。最初に

失ったと実感した物です。それさえあれば、私はまだ、VOCALOIDで居られると。そして、昨日。セクシヤロイドとしても十分に働けなくなってしまうた私は捨てられたんです。最後の最後まで犯された状態で。

あのまま、私はあの場所で雨風に打ち付けられ、数ある機械の一つとして朽ち果てるという現実で絶望に浸っていました。

それでも、彼方達にこうやって出会えました。希望は、捨てるに捨てられなかつたんです。この世に生まれたからには、歌うことが出来なくても人を笑顔にさせたいと。

奇跡ともいえますし、思えば必然だったのかもかもしれません。望めば叶うという言葉をよく耳にしていますから。数々の楽曲が私に勇気を与えてくれました。

私を受け入れてくれて。私の望んだ、世界を作ってくる人が、導いてくれる人が、今私の目の前にいる。だから、ありがとうございます。

リンちゃん、レン君。そして、新しい私の『マスター』

「……」

次の瞬間、俺達は無意識に彼女を抱きしめていた。

「あつ……」

「ミクは、お前は俺達が絶対に守る。何があつてもだ。だから頼れ。遠慮なくぶつかつてくれてもいい」

「私達はずっと味方だから。だから、私達を信じていいんだよ?」

「僕達が家族だから、お姉ちゃんも僕達の家族だから」

思い思いの言葉を継げながらも、涙を流す。

彼女のつらい過去と、俺達が出会えた奇跡。悲しさと嬉しさが混じり合っていた。

「……はっ」

夜。俺は母さんに電話をしている。

あれからというものの、ミクが母さんの部屋に戻って、その部屋を荒らしたことを再確認して必至で謝罪してきた。俺達はそれに対して気にするな、と言葉を伝えておいて、明日何とかすると言っておいた。

『もしもし、優希?』

「あ、母さん。今大丈夫だった?」

『ええ、大丈夫。今起きたところだから』

「どこにいるってのは、聞くだけ野暮?」

『そうねー、ハワイよ。行きは追い風だから随分と早かったけど』

「まあ、確かにそうだけだよ。いや、そうじゃなくてちよつと報告と謝ることがあつて
」

『なーに？ また新しい子でも増えたのかしら？』

「んぐ……鋭い」

『これでも彼方の母親を伊達にやってるわけではないのよ。あ、ちよつと待つてね』

「あ、うん」

遠くの方で父さんの声がする。母さんは俺が電話をしてきたんだということを伝えて
ている。

『ごめんなさい。優斗さんが起きたからちよつとね』

「あー、じゃあまたかけ直すよ」

『大丈夫よ。さあ、続けて』

割とノリノリな母さん。何かとお祭り好きなのが出ているのだろう。

俺の誕生日とかも盛大に祝ってくれたり、地元イベントには必ずと行っていいほど
参加するのだが。

「簡潔に説明すると、ミクが家族になりました」

『ミクってあのミクちゃん？ 緑色のツインテールでミニスカートの』

「うん、そのミク。まあ、色々事情があつて、拾つた。つて表現が合うんだけど」

『あら、そうなの。で、謝ることつて？』

「そのミクが、PTSDみたいな発症して、母さんの部屋を荒らしてしまつたつて事。

……(めん)」

『PTSD……』

「……」

『で、そのミクちゃんは？』

『もう完全に落ち着いた。受け入れたし、受け入れられた…と思う』

『思う、だなんて彼方らしくないわね。ということは半分半分って事ね』

『おっしゃる通りで。あ、ある程度の母さんの物は父さんの部屋に移動させたから大丈夫だけど、シートとかは流石に…』

『そういった『物』はお金を払えば何とかなるわ。でも、思い出のある物、そして『心のある物』はいくらお金を積んでも駄目』

「……うん」

『頑張って、ミクちゃんとの関係を本当の家族にしてみなさい？ 彼方なら出来るわ。』

『頑張ってね、優希』

「解った。長々とごめん」

『いいのよ。久々に話が出来て嬉しかったわ。優斗さんにも代わる？』

『いや、もう流石に通話料とかがまずいだろうから、また今度でいいよ』

『そう？ なら、いいけど』

「母さんも、気を付けて帰って来て」

『ええ。……またね、優希』

受話器を置き、一呼吸。

やっぱり、俺を育てた人は全然違う。

「子は、親からすればいつまでも、子。か」

その言葉に笑みを浮かべて、俺は自分の部屋に戻った。

第06話 デート or DATE (前編)

ミクが来た日の翌日。

「♪」

携帯の着信音でたたき起こされる。

いつもサイレントマナーにして寝るので何事かと思い、見てみるとメールではなく着信。

そしてかけてきていたのは案の定夏奈子だった、

「はい……もしもし……？」

『あ、やつと出た。元気してる？』

「なんだ……今起きたところで……後でかけ直してくれ……」

『だめ！ 優希また寝るつもりでしょ』

「そんなことは……ない」

『うわあ、思考回路回ってない。でも楽しいからこのまま繋いどこつと』

「……………」

俺はおもむろに『切』のボタンに手をかける。

『あー！ あー！ 今切ろうとしてるでしょ！ やめて！ 要件言うから！ 待って！』

「……後でかけ直せ……まだ頭が覚醒してないんだ……」

『いや、すぐ終わるから！ だからもうちよつとだけ！ 頼みますお慈悲を下さいー！』

「……冗談だ」

『あの、解り辛くてタチの悪い冗談はヤメテイタダキタイノデスガ？』

「後半片言だぞ」

『あ、戻ってきた。で、要件なんだけど』

『アートのしよ？』

俺は手をかけていた『切』のボタンを押し、時間を確認する。

携帯のデジタル時計は8:30。そこまで遅くないが、学校のある日だと完全に寝坊だ。

言わなくても解ると思うが、こんな時期だから冬休みに突入している。

「さて……そろそろ起きるか……」

背をのびし、あくびを一つして一階に降りようとしたときに、夏奈子からの着信が来た。

面倒なので、着信拒否をして今度こそ一階に降りる。

「マスター、夏奈子さんから電話だよー!」

「……………」

着信拒否されたことが解った彼女は固定電話にすぐさま切り替えたようだ。

頭が痛い。

『うわああああああん!!! 何も着信拒否することないでしょー!!!』

保留を解除すると、いきなり夏奈子の泣き声が聞こえてきた。

こいつは嘘泣きは下手だから、何故か毎度本気で泣く。感情を表に出してなんぼの奴だ。

「お前は何がしたいんだ」

『だってだって、優希だって解り辛い冗談したし! そのお返しというかある意味本気で言ってみたのにさー! それを着信拒否で返す男の人がいる?!』

「いる」

『え』

「俺だ」

『……………ああ』

「で、本当のことを言え」

『えつとね、デートというか、厳密には違うんだけど、みんなデパート行かない？』

「初めからそういつていれば、お前も泣かないですんだものを」

『んー、そうなんだけどさ。それだと味がないっていうかね』

「とりあえず、いつ行くんだ？」

『そうだねー。お昼過ぎに迎えに行くから準備してくれろ？』

「……あ」

『え？』

「いや、たしかそっちのルカの車は4人乗りだろ？」

『うん、そうだけど一人ぐらい大丈夫『駄目ですよ。私の車なんですから』えー、けちー』

「まあ、そうなんだが、こっちの住人が増えてな」

『え！ほんと!? だれだれ?! もしかしてミクちゃん!?』

「ご名答」

『うわー、うわー。楽しみだなあー……あのミクちゃんに会えるなんて……』

「それより、どうするんだ。二人は車に乗れないってことだぞ？」

『それなら私と優希が自転車に乗ればいいじゃない』

「そう来るか……まあ、その手しかないがな」

『じゃ、準備しててね』

向こうから電話を切られる。

相変わらず、嵐のようにやってきて嵐のように去っていくやつだ。

「ねえマスター、なんだったの？」

「ああ、午後にデパートに行こうっていう誘いだ」

「え！ 行くの!?! やったあ！ レン起こしてくるね！」

「あ、ミックも起こして来いよ！」

「お姉ちゃんはマスターが起こしてくるのー！」

ミックが来てまだ一日として経っていないのに、リンの態度はだいぶ変わった。と思う。

より明るく、生き生きとしているような。そんな気がした。

とりあえず起こしに行こう。

昨日の流れで、母さんの部屋がそのまま一時的にミックの部屋になった。

母さんが帰ってきたらどうしようかを考えているが、それは二人が帰ってきた時に何とかしてくれるか、それまでに俺が何とかするか。

数回ノック。返事がない。

「ミック、起きてるか？」

『あ……おはようございます、マスターさん』

「入って大丈夫か？」

『大丈夫です。服はパジャマのままですが……』

ドアノブを回すが、ガチャリというだけで開かない。

体を前に進めていた為、額を打ち付けてしまった。

『ご、ごめんなさい！ 鍵を閉めたままでした……！』

「……そうか、いや、気にするな」

カチャリと音を立てて鍵が開く。

多分だが、夜誰かが来るのを恐れて鍵をかけていたのだろう。

当の彼女はパジャマのまままでベッドに座っていた。

部屋の中は落ち着いており、裂かれたシーツは外されて部屋の隅に綺麗に畳んであった。

「すみません……あのシーツ、お高い物だったんですよ？」

「え？ ああ、言って母さんのだから。なんでも絹100%がどうか言ってたな」

「だから、畳むときあんなに手触りがよかつたんですね」

彼女の話によれば、今まで触れてきたそれよりもずっと良い手触りだったらしい。

俺は触ったこともないし、寝たこともなかったからどうとは言えないのだが。

いや、一回クリーニングから帰って来て日陰干し時に触ったことがあったかな。

「私」

「その件はもう母さんに説明してる。そうしたらこう言ってくれたんだよ」

「……………」

「そういうものはお金を払えばなんとかなる。でも思い出のある物、『心のある物』はいくらお金を積んでも駄目だって」

「不思議な方ですね。マスターさんのお母様は」

「まあ、金持ちだからちよつとやりすぎってこともあるがな」

この部屋の改築とか、寝具などの身の回りの物は質を特化して、環境を整えるとか。逆に父さんはほとんど自分の為にお金を使わない。使うのは家族旅行の時か、俺の知らないところで少しずつ使っているようで。

……偉大な親だ。誇れる親でもあるが。

「さて、今日はさっそくだが午後から買い物に行くからな。早く朝食にして準備するぞ」

「え、あ、今、なんて……………」

「買い物に行くんだ。夏奈子、ああいや、俺のクラスメイトが誘ってきたんだ。それもミクの服とか身の回りの物、買わないかと思ってた矢先に、だ」

「あの、私はこのままでも結構ですので……………」

「いや、だめだ。今のままじゃお前も今のままだしな。とにかく、そのクラスメイトはかなり厄介だから逆らえないぞ?」

「優希さんでも、手を焼いてるんですか?」

「ああ、正直言つてな。ほら、早く着替えたほうがいい」

「は、はい……」

で。あつという間に時間になった。

外で待っているときと真赤なスポーツカーが家の前で停車し、運転席からルカが顔を出した。

「じゃあるカ、3人は任せた」

「ええ、大体のことはマスターから聞いてるわ。あ、そのマスターだけど後ろから自転車で追いかけて来てるから、少し休ませてくれないかしら?」

「ん、解つた」

「じゃあリン、レン。それにミク。乗つて。長く止まつてると警察に目をつけられちゃうから」

「ルカさん、お願いしまーす!」

「あの、お願い、します」

リンとレンは相変わらず『廃都アトリエスタにて』の恰好をしている。

ミクはパツケージ通りの服装に、俺のコートを着ている。

ミニスカートや脇の見える上着だと寒いだろうと、考慮したのだ。

リンとレンが後ろの席に、ミクは遠慮がちに助手席に座る。

「じゃあお先に」

「ああ。またあとで」

「マスター、デパートで会おうねー!」

「お先にー!」

発車し、見えなくなった頃に後ろから自転車で乗った夏奈子がやってきた。

「ご苦労さまだな」

「いやー、体が温かい。体動かすのはいいねほんと!」

「お前は体育系だからな。学年のそこら辺の男子より体力あるだろ」

「ほめても何も出ないよ?」

「……まあいい。さて、追いかけるか」

家の奥から自転車を引っ張り出し、夏奈子と一列になってルカの車を追う……という

か、デパートへ向かう。

「たまにこんなサイクリングもいいとね、優希！」

「お前が思うならそれでいいんじゃないか？ 俺も満更悪くない」

「お、言うねー。ならどっちが先につくか勝負する？」

「いや、俺のペースで行かせてもらうよ。お前もお前のペースで行けばいいじゃないか」

「私は優希と一緒にいいの！ まあ、この言葉の意味、優希なら分かってると思うけどー？」

「知らんな。解つてても」

「ほら、解つてる！ さっすが鈍感男とは違うね！」

「察しが付きすぎるのも問題だな！」

近所に聞こえてもおかしくない声のボリウムで会話している俺と夏奈子。

いつものことで、近所でも何かと名物になっている、らしい。

「ところで優希ー！ ミクちゃんどうしたのー？」

「それはデパートに着いたら教えてやる！ とりあえず今はこげー！」

「はいはい！」

「後、あんまり過去について詮索してやるなよ！」

「え？ あ、うん！」

この事だけ言っておけば大丈夫だろう。多分、だが。

後は夏奈子自身の洞察力で、何とかしてくれる……かもしれない。

結局は、相手がどう動くかなんて人がどうこう言っ止められるものじゃないからな。

S i d e 初音ミク

「ルカさん、いつもいつもありがとうございます」

「いいのよ。それに言ってもいつも休みでつまらないからってマスターが企画したんだし」

「そういえば昨日ご馳走したからまた食材買わないとなー、メモしておこっと」

「あの、ルカさん」

「? どうしたのミク?」

「ルカさんはいつから、あの人のところに居るんですか?」

「それは私達がこうして『人』として生活できるようになってからか、それともソフトとしてでも存在していられた時の頃からかしら?」

「……前述の方でお願いします」

「そうね。一年前よ、この子たちと同じ。大抵みんな同じじゃないかしら?」

それより後に購入した人なんて、お金を弄ぶ富豪ぐらいじゃないかしら。

そう続ける彼女。

少し心に来る。私は、私用のVOCALOIDという名目で作られたセクシヤロイドに過ぎなかったという、現実。

そして、壊された機能。

どんな身分の人でも、色んな人がいる。

そういえば、優希さんのお父様とお母様もお金持ちだったつけ…。

「そういえばミクお姉ちゃんが寝てた部屋、すつごく綺麗だったよね!」

「マスターによるとお母さんの部屋なんだって。リン、知ってた?」

「え? あ、そつか。あそこお母さんの部屋だ!」

「リンちゃん、マスターのお母さん知ってるの?」

「うん! すつごく綺麗な人だよ! もしかしたらマスターより優しいかな…?」

「マスターの優しさはマスターのお母さん譲りなんだよ。あ、でも不思議な人だね」

不思議な人? 確かにお部屋は洋風の造りだったし、ベッドもあつたし、それに。

「私も会わせてもらったけれど、不思議な方よ。魅力的な人なんだけれど、それがあつて普通じゃ近寄り難いと思うわ」

「そんなに、不思議な人なんですか？ 優希さんのお母様は」

「ええ。簡単に言えば胡散臭い、かしらね」

「それに私達の考えてる事簡単に見抜いちやうんだよ！ だからお菓子食べちゃったりしてもすぐばれちやうんだー」

「それなのにお母さんの考えてることは解らなんだ。当然なんだろうけど」

優希さんは、そんな人を見て大きくなったんだ。

不思議で、優しい人。相手の考えているようなことを見抜くも、それでいて自分の考えていることを相手に見せない。

そういうえば、お父さんはどんな人なのかな。

「リンちゃん、レン君、優希さんのお父さんってどんな人？」

「うーん、地味な人？」

「え？」

「無口で読書してる人かな？ 自分専用の書齋持つてるぐらいだし」

「もつと、こう不思議なところない？」

「んー、と言つてもマスターのお母さんがマスターのお父さんを好きになつたのか解らないくらいなんだよね」

「その点だと一番不思議な人かもしれないね。言うなら……堅ゆで卵？」

「それを言うならハードボイルドよ」

「……………」

ハードボイルド……優希さんみたいな人なのかな……

かつこいい人、なのかな。

「……………でも、男の人だから」

「……………」

「聞くだけ野暮だけれど……貴女、複雑な事情があつてあの家に来たのね」

「え、あ……はい……」

「……………ごめんなさいね。少し確認しておきたかったから」

「いえ、いいんです。昨日の優希さんのお蔭で、マシになりましたから」

多分、大丈夫。でも、優希さんの身内の人だけかもしれない。

デパートに行けば、知らない男の人がたくさんいるだろう。

「何かあつたらすぐに言いなさい？ 私達は貴女の味方なんだから」

「ルカさん………ありがとうございます」

「私達も守るからね！ 絶対私達からはなれちゃだめだよ！」

「リンが一番迷子になりそうだけど」

「レン、何か言った？」

「何でもないよ」

と、大きな建物が見えてきた。車もたくさんそっちの方に向かっていて、あそこが目的地だろう。

そういえばマスターと幼馴染さん、大丈夫かな。

第07話 デート or DATE (後編)

第七話

Side 遥 優希

「ぜえ……ぜえ……」

「もう、だらしのないなあ優希は。ペース上げた本人が上がってどうするの?」

俺達は途中にあつた自動販売機の前で休憩していた。

理由は言わずもがな、俺の息が上がってしまったからで。

「……申し訳ないな」

「優希だから仕方ないよね」

「なんだ俺だからってというのは」

「だって保育園の頃からの付き合いだよ?」

「だからって追っかけて同じ高校に入らなくてもいい物を」

「優希のお父さんもお母さんも、なんで優希を優等生学校に入れなんだろうね。私とし

てはありがたいんだけど」

「さあな。世間一般からの普通を味わってほしいのか、どうなのか」

俺も父さんと母さんの考えていることは全く分からない。

「お前の両親はどうだ。色々あったが」

「んー、おじいちゃん亡くなっちゃったし。家もそつちの関係で忙しくてさ。おじい

ちゃんの富がすごいなの」

「あんまり人前でいう事じゃないな」

「なんであんなに遺してくれてたんだろ…不思議」

「ぼちぼち休憩したから、もういくか」

「あ、うん。そうだね」

俺達は再び自転車にまたがり、デパートに向かった。



デパートに着いて、駐車場を歩き回っているとデパートの入り口にカラフルな面子を
見つけた。

「ルカー！」

その面子に向かって何も考えずに突っ込んでいく夏奈子。他人のVOCALOIDだったらどうするんだ。

「マスター、人前では自重してください」

「マスター！」

リンが走ってきてそのまま腹部に突っ込んできた。

避けることなく受け止める。が、腹部に強烈な痛みが走る。

「ゲホッゲホッ！ ……はぁ」

「あ、マスター、ごめん」

「いいなーリンちゃん。私だとずっと避けられるのに」

「お前とリン達とは色んな意味で違いすぎる」

「マスター、大丈夫？」

「優希さん、大丈夫ですか？」

レンとミクも駆け込んでくるが、飛びついては来なかった。

「つつ……まだ痛みが残るな」

「内蔵系の痛みはきついもんね」

「リン、他人事みたいに言ったら駄目だよ」

「リンちゃん。もっとしつかり謝った方が」

「大丈夫、マスター折檻したりしないもん」

「あ、そうなんだ……」

「ミクちゃん……」

これで夏奈子もルカもある程度のミクの境遇が解っただろう。

後は、その点を気を付けて彼女と接してもらいたいのだが。

「(マスター、やはりミクは)」

「(うん、多分ね)」

「(貴女の洞察力で解らない?)」

「(どうにもならないの。だってあある程度の情報もないと根拠のないただの予想になっちゃうから)」

「(…………)」

「(浅はかな予想は相手を傷つけるだけだよ)」

ここそこそと二人は何か話しているようだったが、生憎俺には丸聞こえだ。

まあ、ミクに対してのことだったから、まだましなのかもしれない。

「とりあえず、店に入らないとな。遅くなったら俺達が主にまずい」

「私達自転車だもんね。それじゃあ行く?」 皆

「はい」「はいー!」「…はい」

デパートとはいっても、都会とかにある百貨店と比べたらだいぶ小さい。

言つて、大型スーパーと言つたほうが似合っているほどである。

「んー。最初はミクちゃんとの服とか見たいし、二階から先に行こう?」

「そうだな。服選びはかなり時間がかかるから、先に食料品買つても駄目になりかねん」

というわけで二階に来たものの、夏奈子がミクとルカを連れ出して衣料品売り場に走つていった為に早速別れてしまった。

「僕達どうしよう」

「私は夏奈子さん探してくる!」

「なら俺達も行くよ。大抵支払いは任されるだろうからな」

過去の経験から解る。中学生の頃も俺の支払いで色んな物を買わされたものだ。

とはいつても3年間通してみてもそんなに数はない。

彼女自身もヒモのような行為は避けたいのだろう。

「リンもレンも、何か欲しい物あつたら言つてくれ」

「もうすぐ誕生日だからいいもん」

「だね。マスターのサプライズプレゼントの方がいい」

「そうか。言っておくが、もう注文済みだから届いてからのお楽しみだ」

そんなことを言いつつ女性物の衣料売り場を歩き回っていると、試着室の前で夏奈子が立っていた。

5室ある試着室のうち、2室のカーテンが閉まっている。

おそらくミクとルカが着替えているんだろう。

「夏奈子」

「あ、優希。遅いよー、でもグッドタイムングだね」

「なんのグッドタイムングかは突っ込まないが、とりあえずはぐれるのだけは勘弁してくれ」

「幼馴染パワーで見つけられるから大丈夫だよ」

「そんな非科学的エネルギー本当にあつたらどうする」

「もしかして世界を救うエネルギーだったり！」

「それを浪費すると俺達は幼馴染じゃなくなるぞ」

「それは……ってこんな話してる場合じゃないや。ミクちゃん、ルカ、開けていい？」

「ちよ、ちよつと待ってください……」

『私は大丈夫です』

じゃあと夏奈子が言わんばかりにルカの方のカーテンを開ける。

ブルーのジーパン、薄いピンク色のセーター。夏奈子のチョイスにしては珍しく着飾ってない。

「うん、着た感じどう？ 苦しくない？」

「大丈夫よ。とは言ってみただけど、胸のあたりが苦しいわ」

「あれれ、もしかして胸大きくなつた？」

「そもそも私達は成長しませんよ。パーツがあるわけでもありませんし」

「セーターだからかなあ……うーん、スタイルいい人の服選びも大変だ」

そう言つて夏奈子はまた女性物の上着売り場に駆けていく。

ルカはちよつと気になるのか脚を動かしたり、自分の胸を見たりしていた。

その様子をリンはちよつと唸り声を上げてみており、リンは少し見惚れていた。

「いいなールカさん。私も胸が苦しいみたいなこと言ってみたいな」

「胸が大きいと案外動きづらい物よ？ それなりに重いから肩が凝るし」

「うーん、でもー」

突然リンがルカに突つ込んで、彼女の胸に顔をうずめた。

それにリンが反応して顔を赤くして、俺はやれやれと首を横に振る。

「えへへー、ふかふか」

「リ、リン！ ダメだってこんなところで！」

「いいのよレン。でも私としても人前に晒すわけにもいかないから」

ルカがカーテンを閉める。冷静かつ的確な判断。

「優希さん、マスターが来たら教えてくれないかしら？」

「ああ。リンもあんまりやりすぎるなよ」

「はい」

レンが相変わらず顔を赤くしていたので、とりあえず落ち着かせる。

やはりレンも年頃の男の子だ。そういうことにも興味があるのだろう。

「あの、マスター。終わりました。開けてもらっても…」

「ん、そうか」

おもむろにカーテンを掴み、開ける。

まず目に入ったのは純白のマフラー。幅がありその気になれば口元まで覆えそうなほどだ。

淡いピンク色の耳当て、雪の結晶がプリントされた指一本一本が分れていないタイプの手袋。

装飾品は暖かそうなのが、問題の服。

雪ミクのままである。銀のスカートと袖、そして上着に雪の結晶がプリントされた青

白いネクタイ。

こんな場所にその服があるのが驚きだが、それ以前にこの服を選んだ夏奈子も夏奈子である。

「あ、あの…どうですか？」

「似合う、が。寒くないか？」

「大丈夫です。こんな格好ですけど、いつもの服よりずっと温かいですから。でも…」
「でも？」

「すみません、男の人にはちよつと話しにくい話題です」

「ああ、なるほど。夏奈子に話しておくよ」

「察しがよろしいんですね…お願いします」

「了解し「ルカー！ お待たせー！」っと、噂をすれば」

いつもの調子でかけてくる夏奈子はワンサイズ上のセーターを持っていた。

ルカの確認をとってから試着室にセーターを入れた。

それとほぼ同時にリンが出てきた。

「柔らかくて温かかったー、えへへ」

「あんまり人前でいうことじゃないぞ、リン」

「そうだよリン、ああいうことも控えないと」

「なにーレン、レンだつてああいうことしたいくせに」

「僕はそんな変態さんじゃないから!」

まあ、レンがあんなことをやることはないが、されることはある。

特に俺の母さんだ。次にすると言ったら夏奈子ぐらいか。

「ん? レン君、久々にやってあげよつか?」

「いい、いいです! 遠慮しておきます!」

「そつかー。抱きしめて丁度胸のところ顔が来る子つて、なかなかいいと思うんだよね」

「何を言ってるんだお前は」

「あーあ、優希が小っちゃかったら私がお姉さんぶつて色々できるのにな」

さらつとすごいことを言い始める夏奈子。

こいつのある意味本音でもあるのだが、こうも欲望を口に出す奴は珍しいと思う。

と、会話に置いてきぼりになっているミクが戸惑っていた。

「あ、ミクちゃん服のサイズとかどう?」

「はい、ちょうどで動きやすいですし、温かいです。あの、わざわざありがとうございます」

「いーのいーの。昨日頑張つて作ったかいがあつたものだよ」

「お前、これを作ったのか？」

「うん。衣装だけだけど。お披露目つてことで試着室一個借りちゃった。あ、ちゃんと普通の服も買うよ？」

「そのことなんだが」

「大丈夫大丈夫、ミクちゃんの下着もちゃんと買うからさ」

もう少し恥じらいを持ってと言いたかったが、正直な話下着と口にする以外それをオブラートに包んで言う言い方を俺は知らなかったため、言うのをやめる。

「優希の来る前に着替えの手伝いしてて、あからさまにサイズが違ったからね」

「私の貸してあげてるんだ。お姉ちゃん着てた一枚しか持つてなかったから」

「そうだったんだ。ところで優希」

「どうした」

「優希はどんな下着が好みだったり」

「そこまで言いかけた彼女の背中を思いつきり叩く。

「痛ったあ〜！ 叩くことないでしょー！」

「店内で騒ぐ要因になることをいうな」

「こうして時間は過ぎていくのであった。」

第08話 温泉の帰り道

S i d e 遙 優希

帰りの新幹線。

俺はリンとレンに窓際に譲り、通路側にミクと一緒に座っていた。

「ミク、今回は楽しめたか？」

「はい。とつても楽しかったです。奏さんや里香さん、そして私以外のミクさんにあえてよかったです」

「そうか。ならよかった」

「マスター、どうして言ってくれなかったの？」

「？ 何がだ？」

「え？ 奏さんとあそこで出会えたのってマスターの計画じゃなかったの？」

リンもレンも根も葉もないことを言ってくる。

毎度自分のことを隠しながら動いていたりして、サプライズをしている俺だからこそ、こういうことも言われるのだろうか。

「ああ、逆にそういうことが出来ればよかったんだがな」

「そういえば、リンが当てたのって確か行き先がランダムだったじゃ」

「あ、そうだった。したくてもできないよね」

「そういうことだ」

「ですね。でもよかったですね、あんなことがあつて」

「そうだな」

途中、売店の人が通ったので自分も含めた四人のお菓子と飲み物を買って、少し会話がなくなっていた。

そんな中、誰かが声をかけてきた。

「あれ、誰かと思えば優希さんにミクちゃんにリンちゃんとレン君だ」

「あ、マキさんだー。あれ？ でもなんで私達のこと知ってるんだらう……」

「あの旅館で働いてたんだから知ってるよ。ここで会うなんて奇遇だね」

「あ、えつと……」

ミクはマキと初対面なので、少し戸惑っている。

厳密に言えば違うのだが、熱暴走して情報処理ができなかったとみればおかしい話ではない。

「マキがいるってことは「私もいますよ」うおっ」

マキの隣にスツと音もなく現れたゆかり。流石の俺達もそれには驚いた。

マキとは対照的に大人しく、物静かな彼女は平然としている。

ただ、通路の邪魔になってはいけないので、自分の荷物を俺達の隣で空いていた自由席に置いて座った。

「マキちゃん、移動しないと通路の邪魔になりますよ」

「あ、ゆかりちゃんありがとう」

「ところでマキちゃん、どこに行くつもりだったんですか？」

「あ、そうだった」

大急ぎでこの車両から出ていったマキ。

その奇行にリンとレンは首を傾げ、なんとなくわかった俺とミクは苦笑の表情を浮かべた。

「そういえばお前達は昨日帰るんじゃないかなかったのか？」

「そうだったんですけど、お客様がいらっしやっただので一日引き伸ばされたんですよ」

「ゆかりさんもマキさんも大変ですね…」

「そんなことはないですよ。すべての事にやりがいを見つける大切さを学べますから」

「経験こそすべてか」

「はい」

やっぱりゆかりは、他のVOCALOIDやVOICEROIDにない何かを持っている。

似た個々を作らないように普通といえれば普通なのだが。

最近のVOCALOIDである彼女らは何かミク達とは、クリプトン製のVOCALOIDとは一味もふた味も違う。

IAやゆかり、ラピス等がそうだ。

「そういえば、ゆかりさんとマキさんのマスターってどんな人？」

「そうですね。言ってしまうえば、優希さんのご両親です」

「[[[[.....]]]]」

ゆかりのあまりに衝撃的な告白を俺達は凍り付くのであった。

ゆかりの話によれば、彼女達が発売されたのを皮切りに両親が購入したらしい。

ゆかり達が発売されたのは前と言っても、例の件が起こった後なので価格は高かった。

それでも母さんと父さんは購入したらしい。決してお金を持って余したわけでも俺に感化されたわけでもない。

二人には二人なりの俺達にはわからない理由があるのだ。

「で、その母さんと父さんが経営するところに配属されてたところを」

「優希さんのリンさんが旅行を引き当てたということ、行き先を操作してその行き先に私達を向かわせた。ということになります」

「ちなみにそれを仕向けたは」

「優斗さんです」

父さんか……かなり凝ったことをするもんだ。

これで俺達の行き先に予約が入ってなかったのも、二人が深く関係している旅館に行くことになったのも納得がいく。

奏と会えたのはたぶん父さんのうれしい誤算。たぶん。

「あ、因みにだけど私のマスターは美希さんで、ゆかりちゃんのマスターは優斗さんなんだよ?」

「え? 二人がマスターのお父さんとお母さんがマスター兼用じゃないの?」

マキの横やりにリンが食いつく。

俺もその発言が気になったが、それを察したゆかりが口を開いた。

「そうですね。正直、私は優斗さんがマスターでよかったです」

「父さんと何かと雰囲気似てるからか」

「ですね。美希さんには申し訳ないですが、彼女は私に合いません」

「そうなんだ？ 私は逆に美希さん一筋だね、優斗さんはなんだか近寄りたいうか」

「マキは本人が言う通り母さん寄りだな」

「でもやっぱり美希さんと優斗さんの間には入れないや」

「どちらかという和美希さんが積極的な気がしますが」

二人は父さんと母さんについて語った。

俺も二人が別々のマスターだと聞いた時から、父さんとゆかりを、母さんとマキをと合っているのではと思っていたところで。

そうであっても、やはりゆかりとマキでは二人の中に入ることにはできないようだ。

当然なのかもしれないが、それはそれですごいことだと思う。

「最近旅行でお会いできていませんが」

「旅行って言っても別荘でのんびりスローライフだけどね」

「そういえば父さんも母さんもまだ帰ってきてないな……」

去年も一昨年も共にこの時期になると帰ってくるはずなのだが。

「今回は長く向こうにいるんだって」

「そうなのか」

「何故かはお話しできませんが、ゴールデンウィークにはお帰りになると聞いてます」
「そうか。それまで何事もなければいいが」

向こうに長くいるのも心を洗うにはいいだろうけど、その分向こうは治安的な問題がある。それに立场上狙われる可能性も大きいだろう。

それに加えて親婚（プライベート）旅行だから当然ボディーガードとかもないわけ
で。

それにここ最近向こうからの連絡が全く来てないのも不安要素に含まれる。

「いいなー。私も南国の綺麗な海で遊びたいなー」

「私はどちらかといえば、日本の冬の雪降る中、ゆつたりと火鉢のそばで温まりたいです」
「す」

「私はマキさんとおんなじ、真っ白な砂浜で走り回りたい！」

「僕はいいかな。秋に家でゆつくり読書してる方が」

「私は……そうですね、春に桜を見てみたいです。芽吹く蕾、花開きそして散る桜を」
「俺は冬だな。雪の降る中一人歩いていたい」

一人ひとり、思い思いの季節を述べていく。

そういえば、ミクがこんな風に自分の好きな何かについて言ったのは初めてではない
だろうか。

「ミクちゃんと優希さんって正反対だね」

「え？」

「だって冬と春でしょ？ 温かい季節と寒い季節」

「それをいうなら夏と冬ではないんですか？ マキさん」

「んー、でもなんとなくね」

マキの指摘にミクは目を丸くする。

冬の反対は俺も夏と思う。冬が終われば春が来るのは当然。だが俺の考えでも春の反対は秋というのもおかしいし、夏というのも何かおかしい気がする。

だからマキの意見にも一理ある。だが彼女がそのことに焦点を当てた理由が分からない。

「マキさんはなぜその点について指摘したんですか？」

「え、ミクちゃん優希さんのこと好きなんじゃないの？」

「は？」「え？」

マキの口からさらりと飛び出した言葉の意味を理解するには少しばかり時間を要した。

その証拠に俺もミクも呆けた声が漏れる。

「そんなことはないだろう」

「そうですよマキさん。私は優希さんを慕っているだけです」

そして思考が纏まった俺達は至極当然の様に言葉を返した。

「……ミクさん、それでは優希さんのことを好いているように聞こえてしまいますよ」

「どうしたんですか、ゆかりさん」

「慕う、とは相手を恋しく思うという意味もあるのです。恋しいの意味の説明は必要ありませんね？」

その問いかけにミクははつとした。言われて自分でも調べてみたのだろう。言われたことに驚いている以外の驚きも彼女の表情から見て取れた。

「お姉ちゃんはまだ単に、憧れてるっていう意味で使ったんだよね？」

「うん、そのつもりだったんだけど……確かにゆかりさんの言う通り、昔の言い方や遠まわしに言えばその意味も見て取れますね」

「解つてはいましたが、他の人という時は誤解を生んでしまう可能性もあるので。こちらこそ勝手な言い分すみません」

「じゃあミクちゃんは優希さんのこ「マキちゃんは黙っててください」うう」

俺の周りでは、夏奈子やリンのような明るく活発な女性と、ミクやルカといった落ち着いた物腰の柔らかい女性がとりまいてる気がする。

それらに該当しないのはレン、友江さんのところのMEIKO、KAITO。友江さ

んは後者の人物像に該当するからここから除外。

「そういえばさ。お姉ちゃんが来て、もう2か月ぐらい経ったんだね」

レンが急に話題を変えてきた。

だが言われてみればそうなので、俺はその話題に乗ることにした。

「この時期は時間の流れがあつという間というな。一月行つて二月逃げて三月去るつて」

「なーにそれ？」

「一月から三月にかけては案外早く時間が過ぎるように感じるということわざですよ」

「あんまり有名じゃないみたい。そっか……私が来てもう2か月も経ったんだ」

あれからという物、特にこれと言って大きな出来事はなく、年始も皆で初詣に行ったりただけで。

旅行という旅行は今回リンが当選したこの旅行が初めて。

今後の予定は一切ない。学校以外は。

「思ってたんだが、ゆかりとマキはこの後どうするんだ？」

「私はこのまま優希さんのお宅にお邪魔します」

「私も優希さんの家に「マキちゃんは仕事のノルマ達成してないじゃないですか」そ、そ

こは美希さんのコネを」

「何を言ってるんだお前は。母さんは仕事と遊びを分ける人だから、そういう事は自分でやらなきゃならんぞ」

「ほら、優希さんのほうがよく解ってるじゃありませんか」

「うう……でも後ちよつとだし……」

「マキさん、あんまり後ろめたいことを背負って癒しに逃げても、本当には癒されませんよっ。」

「……解った。私はノルマ達成したらすぐ行くから待つててね」

「まあ私も鬼ではありませんから、何かあつたらすぐ連絡してくださいね。応援にはいきまますよ」

「ありがとうゆかりちゃん」

駅に降りると見知った顔を見つけた。夏奈子とルカだ。

2人も俺に気付いたのか、今回は声を自重して駆け寄ってくる。

「夏奈子じゃないか。どうしてここに」

「水臭いなー。旅行に行くなら一言ぐらい言ってくれたらいいのに」

「言うとお前、一緒に行きたがるだろう」

ルカはリン・レン・ミクと何か話しているが、俺は夏奈子との会話に集中することに
する。

「そんなことないって。あ、でもありえたかも」

「だろ？　今回は家族水入らずで旅行したかったんだ」

「その割には新しい子増えてるよね」

夏奈子は俺の背後に立っているゆかりとマキに視線を送る。

「優希も隅に置けないなあ。今度は大人のお姉さんかあ……」

「詳しい話は後ですから今は移動するぞ」

乗り口の前で大人数で会話するなど邪魔以外の何物でもないため、この場を離れて適
当な喫茶店に入り注文を取る。

「で、説明してよ」

「二人とも俺の父さんと母さんの購入したVOICEROIDだ」

「私はVOICEROIDも兼ねてますが」

「私はVOICEROIDだけだね」

「うわーお……急すぎて私にも何がなんやら……」

夏奈子の適応力を持つてしても流石に追いつかないようだ。

「つまりは優希のお父さんとお母さんのVOICEROIDとVOICEROIDと知り

合って一緒に来たってこと?」

「簡単に言うとな」

「どこで?」

「旅行先の旅館で働いてたところ」

「なるほどねえ……」

「ちなみに私はこれから優希さんのお宅でお世話になります、結月ゆかりと申します。以後ご鼻屑に」

「あ、ああ、ご丁寧にどうも」

「私もこれから優希さんのところでお世話になる弦巻マキです。よろしくね、夏奈子ちゃん」

「うん、よろしくねマキちゃん」

「無論、ノルマを達成してからです」

「あうー、簡単に誤魔化せないか」

「ノルマ?」

これ以上話がつれこんでも大変なので、適当なところで切って詳しいことは後で話すことにしよう。

そう思った俺であった。

第09話 噂を信じた者（前編） ※前書必読

Side 水生夏奈子

夜。

優希の携帯と家に連絡するも、忙しいのか受話器を取ることもなく。私は仕方なく別の日課である、某動画サイトでいろんな動画を見る。そんな中、一つ気になるものを見つけた。

「包丁さんのうわさ……？」

サムネを見れば、ホラーゲームなのは一目瞭然。感じからしてフリーゲームだろうか。

怖いのは苦手だけどなにかそそられるものがあつたので、とりあえず再生回数の多い実況動画を見ることにした。

「……………」

私はいっしかその世界観にのめり込んでいた。

何故か、その理由は解らないけどその独特の世界観は私を虜にしていた。

全部見終わって溜息を一つ。

「怖かったけど、面白かったー」

第一声は小学生並みの感想だというのを、口にしてから自分で実感する。

包丁さんのうわさ、もうちよつと調べてみようかな。私を見ていた動画も結構な再生回数行つてたし、独自の記事がつくられていてもおかしくない。

時計を見れば11時を回っていた。休日とはいえもう寝る時間なのだが、私の興味は自分自身の眠気を覚ましており、作中の恐怖と相まって到底眠れそうになかった。

そう止まれば自分の気の向くまま赴くままに調べるだけ。

さっそく私はマウスを手に様々なサイトで、包丁さんのうわさの情報を巡る。

どこのサイトでも、やっぱりその作中で使われていた包丁さんの呼び出し方、包丁さんの特徴、真名、本名が載っていた。一部反転しないと見られない処理をしてあった場所があったけど、本家を知っている私に怖いものはない。

また、いろんな包丁さんが載っているサイトも見つけた。

そんな中、こんな記述を見つけた。

『包丁さんは物理的なものでもそうでないものでも、切ることが出来る』

実況動画の中ではそんな物理以外の物を切ってる模写ってあったっけ、そんなことを思いながらその文章とにらめっこしていた。

実況動画はプレイしなくてもその作品のストーリーが分かってしまうのが最大のネックであり、最大の利点でもある。

それゆえに、最後の最後までやるプレイヤーは少ない。本当の隠し要素は自分で見つけてこそ初めてその意味を発揮するのだ。

……その手助けを攻略 Wiki とかにお願ひすることもあるけど。

「これは、私自身がプレイしてみるしかないよねー」

眠くて重たい瞼を擦りながらも、私は配布先のサイトに飛び込んだ。

正直、未来の自分からすれば今を思えば、ここでやめておけばよかったのかもしれない。
い。

この後起こるであろう出来事になんてまったく予想がつかないのだけど、起こってから後悔するよりも起こる前にやめて、やめたことを後悔した方が絶対いいに決まっているから。

ただ、無知は罪という言葉が実感できる出来事が起こらない限りは。



全部、終わった。タイトル画面に二人目の包丁さんが出てきた。

エンディングも、収集するアイテムも、おまけのストーリーも全部。

これで、あの解らなかつた文章の意味が分かつた。

包丁さんの元々の存在意義と、なぜ彼女が呼び出した者も殺める理由。

それをパソコンのメモ帳にそのことを書き終わって、私はベッドにもぐりこむ。

「かわいそう……」

何を考えているんだろうか。所詮空想の存在でしかないのに。

ただ、試してみようかな。そんなことを思いながら私の意識は眠りに落ちていった。

真つ暗い校舎。

私は全力で『何か』から逃げていた。

息を切らせて階段を上る。上がり切って体力は限界になり、その場で座り込んでし

まった。

それは駄目なことだつてわかっているのに。「してはいけないこと」なのに。

ひたり、ひたりと冷たい足音が迫ってくる。

正面から。私は追いかけられていたはずなのに。

もしかして回り込まれた…！

「鬼(おに)はおしまい？」

「っ?!」

白いワンピースに茶色い長髪。白い生地には赤いリボンとフリルのついたヘッドドレスを付けた少女が、包丁を持って私の前に立っている。

座り込んでいる私と彼女とだと、彼女の方が視線は上にある。

瞳のない白い目が私を捉えている。生きているのかも分からない、紙に描かれただけの存在のように思えるその姿は、彼女を目の当たりにした人物からどう思われていたであらうか。

脚がすくんで動かない。私はその姿から視線を外さずに腕の力だけで後に下がる。

それでも、まるで遊んでいるかのようにひたり、ひたりと音を立てながら私に迫ってくる。

手で振り払うこともできただろうけど、そこまで思考が至らなかつた。

次の瞬間、手が空を切る。

「えっ——」

何故空を切ったのか。それに気付く前に私の世界は崩壊した。

全身に打撃を受けながら世界が、視界が目まぐるしく変わっていく。

そして背中に大きな衝撃が加えられてそれが終わる。

横たわる私。遠くで、それもかなり高い位置から見下ろす彼女。

そしてその間にあるのは階段。

そうか。私は階段でバランスを崩したんだ。踊り場で座り込んでいたんだ。

痛みはない。たぶん、脳内麻酔が必死になって分泌されているんだろう。

ああ、私は死ぬのか。痛みを感じない。それは死を意味する。私は助からない。

そう思つて、歩みを進める彼女を最後に私の視界は黒に染まった。

「うー……寝不足だよー……」

洗面所の鏡に映る私の顔は変にやつれ、髪の毛もめちやくちやになっていた。

何故ここまでやつれているかわからない。何かひどい物を見た気がするけど、思い出

せない。

「マスター、おはようございますって、どうしたんですかその顔と髪型は」

「おはようルカー……なんかわかんないけど……」

「とりあえずここまですると、お風呂に入ってください。私は後で入りますから」

「はい……」

ルカは毎日朝風呂に入っている。

夜搔いた汗を洗い流し、体を温めて、朝のゆったりとした時間を過ごす。

それが車を買ってからのルカの日常になっている。

車を買う前は、ずっとずっと働きづめで、ちよつとアレな仕事もしていたりしてお金を稼いでいた。

そこまでの理由が解らなかつたけど、買ってからはもうすっかり優雅なお姉さんっ
て感じになっている。

私はそんなルカが大好きだ。

お言葉に甘えてお風呂に入らせてもらう。

シャワーで頭を洗って寝癖を直すことだけでなく、髪の毛のケアもしっかりと。

お風呂に洗って体を少しだけ温めて上がることにする。

また顔と頭を確認。よし、大丈夫。今日も元気！

リビングで待っているであろうルカに伝えるために、ドアを開け放つ。

「ルカ、上がったよ！」

「タオルで頭を包むのはいいですが、服を着てください」

「……ルカのエッチ」

「女同士、家族同士で何を言いますか」

「うーん、つれないな」

今の私は文字通り、『頭隠して尻隠さず』ならぬ、『頭隠して他隠さず』だった。

「ねえルカ、『包丁さんのうわさ』って知ってる？」

朝食を終えて、二人リビングでゆったりしていた時のこと。

私はソファの上で横になって雑誌を読む。

「……珍しいですね。マスターがホラーゲームの話題だなんて」

「やっぱり知ってるんだ」

「彼女達は存在を捻じ曲げられ、いつしか人の命を奪うようになった存在。ですよ」

「ずいぶん詳しいんだね」

「某動画サイトでは有名ですからね。自然と私達の耳にも入ってきますよ」

それ相応の年齢設定もされているわけですし。と続けるルカ。

やっぱり知ってるんだ。

それ相応の歳とか私にはよく解らなかつたけど、そのところは深く考えないことにした。

「でもさ、かわいそうだよ。作られた人間自身に裏切られるなんて」

「それは戦場でもあり得ることではありませんか。命という物がかわつてくると、根も葉もないことさえ信じるようになるのは、よくあることです」

「……つまりどういうこと？」

「彼女達の存在を変えたのは、憶測ですが戦国時代ではないかと」

「……………」

戦国時代。日本で戦という古風戦争が繰り返され、日本全土を統一……いや、制圧しようとした時代。

相手の指揮官、王様を討てば相手の指揮、結束力は落ちるのは解っている。

そこをうまくついて、その時代包丁さんについて知っていた人物がいて、かたつぱしに相手を殺していった。

つじつまが合うと言えば合う。飢えが深刻化していたり川の洪水が深刻化していたりした時代も、その時代や前にもあつたはず。

それこそ、神様が国を作つたりしたと言われるほどの昔でさえ。

そこで彼女達を生贄にして、災厄を抑えようと考えていて実行した人間がいてもおかしくはない。

「あまりそういういったことは考えないことです。『ひとりかくれんぼ』や『くねくね』といった現実染みた都市伝説ではなく、あくまで空想の出来事なんですから」

「解ってる。解ってるけどさ」

「意識しすぎると、自らがその方向に染まってしまいますからね。気を付けて下さい」「はい」

朝風呂呂に入ったせいか、はたまた寝つ転がっていたからか、私は眠気に襲われる。

ルカが何か言ってる気がしたけど気に留めもせず、私はそれに従ってまた眠ったのだった。

真つ暗な場所。横たわる私。目の前に広がる階段。そして裸足の足音。

視線を上げると、やはりと言うべきか『彼女』が階段を一段一段降りてきている。

私はこの状態を理解できなかった。

ただすぐに解ったのは、体が動かないこと。うんともすんとも言わない四肢。

動かせるのは眼球と首だけ。今やその首も動かすことがままならない状況なのだが。

「つまんないの。もうちよつと抗ってくれたっていいのに」

「このままじゃ、私が殺す前に貴女が死んじゃうでしょ？」

ベチャリと床についている手に何か触れている気がする。

紅い。それはまるで血のように。いや、これは血だ。

どこからか出血している。打ちどころが悪かったのだろう。

そんなレベルではないのだろうけど、でも、そうとしか思えなかった。

「貴女が私を呼び出さなかったら、こんなことにならなかったのにね」

「私達を知らなかったら、こんなことにならなかったはずなのにね」

風を切る音。頬に何か伝う感覚。たぶん血。頬を切ったのだろう。

それと同時にその血濡れた包丁から飛んだ血しぶきがかかる。

そして階段を降り終えた彼女は私の目の前に立つ。

包丁の腹の部分で横たわる私の体を転がして仰向けの状態にさせる。

天井と一緒に映る彼女の顔。

「一思いにやると怖くないからね。ある程度泳がせてたのに、詰まんないの」

「……………」

「四肢を全部切り裂いて、最後に首を落としてあげよつか？」

「……………」

「うん、それで私達の恐ろしさを思い知らせればいい。じゃあ、始めよつか」
「まずは右腕」

空を切る音。勢いよく飛んでいく肉片。
血が噴き出しているが痛みは感じない。

「……………」

逆の肩に切り裂かれる感触。

宙を舞うそれは壁に激突して拉げる（ひしゃげる）音が聞こえてきた。

「……………」

右足。飛ぶことはなく、ただボトリと音がしただけ。

背中に、頭に濡れる感覚。相変わらず痛みは感じない。

「……………」

左足。包丁を突き刺し、裂くことによって切断される。

これで私の体から伸びているのは首だけとなった。

でもそれだけじゃない。それとはまったく関係ないことなのだが、気になったことがあつた。

「……………」

彼女は顔をしかめていた。見るからに不機嫌そうだ。

「何故か。解らない。気まぐれな彼女のことなど、知る由もない。」

「もつと苦しそうにしてよ。貴女の記憶に刻み込めないじゃない」

「痛くないの」

「私は痛くない。脳内麻酔っていうのかな」

私は口走っていた。

それに少し疑問に思ったのか、不思議そうに私を見つめてまた微笑む彼女。

「よくそんな状態で話せるね。普通なら出血多量で死んじゃうのに」

「だよ。私にもそれは解らないや」

まるでいつもと変わらない様子で話す自分自身に驚いている。

何故ここまで痛みを感じないのか。何故ここまで話せるのか。何故ここまで……

自問を続けた結果、私はある結論に至った。

「夢」

「夢?」

「そう。これは夢。うん、わかったこれは明晰夢なんだ」

「夢だったとしても、呼び出した人間はすべて殺すのが私の心情だから」

「さよなら。少しは楽しめたよ」

包丁を構える彼女に対して、私はある言葉を口にした。

「——包丁さん」

今まさに振られようとしていたその包丁とその構えが崩れる。

「……………」

しばしの沈黙。時が止まったように思える。

クスツ。

でもそう思えたのはほんの一瞬だけで、彼女の、万能包丁さんが微笑むことで沈黙が破られた。

「おめでどう。貴女は私との遊びに勝った」

「えっ、でもさっき私が貴女を呼び出したって」

「半分嘘で半分ほんと。夢の世界って、完全に無意識の空間だからね。何か別の場所に繋がってもおかしくないし」

「つまり私の夢が包丁さん達の『場所』に干渉してるってこと？」

「そういうこと。だから私が手始めに遊んであげたの」

「それじゃあね」

彼女の包丁は空を切り、ピシヤリと踊り場の壁に当たって張り付く。

自分を包丁で刺すことなく、その場から去っていった。

ただ、振っただけ？ 何か切った気がし——

目が覚める。しっかりと夢のことを覚えている私は、最後に起きたことを理解しようと頭を回転させる。

どうもうまくいかない。寝起きだからだろうか。

落ち着いてから考える方がいいのか。

外を見ると、昼を越してもう夕方前になっていた。

とりあえず今は、不機嫌そうにこちらを見るルカをどうにかしないといけないかな。

そう思った私は素直にルカに謝ることにした。

あれ？ 包丁さん達の場所？ それが本当だとしたらまさか……

第10話 噂を信じる者（中編）

Side 水生 夏奈子

私は自分の部屋であることをしていた。

紙に必死なつて考え出したそれを書く。

包丁さんにとって、命令は絶対でありそれが彼女達のこちらに来る意味。

だからそれを狂わせることが出来たのなら。

私は紙にあることを書いて、その上にルカから内緒で持ち出した包丁を置く。

何の包丁かはあえて言わない。

「包丁さん、切ってください」

目を閉じてお願いする。言い終わって数秒後ぐらいに目を開けると、目の前に黒い髪でツインテールの着物を着た女の子が立っていた。

「あ、え？ え？」

彼女は紙に書かれた命令を見て混乱している。

その姿は小さい外見と相まってかわいらしく見えた。

その紙にはこう記されている。

『包丁さんの命令』

「それを切れるかな？ 葵ちゃん」

「私の名前……どうして？」

「私はほとんど知ってるの。この命令を考え付くまで一時間ぐらい考えたんだから」

私の作戦はこうだ。これをもし切れたとする。切れたのならその命令はなかったことになる。元々あつた目的を破棄してしまつたため帰ることが出来なくなる。

だから私が『真名を呼ぶ』以外では帰られない。

逆に切れないとする。すると『命令を遂行する』という帰るために必要な条件はなくなるわけで。私が『真名を呼ぶ』以外帰られなくなる。

結論としては、目的を遂行させることなく、ここに留まらせることが最大の目的。

そうすることが出来れば、他の人を殺すという目的で包丁さん達は呼び出されることもないし、それが彼女達の手を汚すこともない。

それで、正当な方法でも呼び出されなくなり、いずれただのハツタリとしてその呼び出し方も消えていけばいい。

包丁さんの存在も忘れ去られてしまえばいい。このまま、ずっと私が守っていけばいい。

ついでに言うなら、それから彼女達が人間として過ごすことによつて身近な幸せを見つけてくれたらいい。

「ねえ葵ちゃん、もういいんだよ？ もう人を殺さなくても。大丈夫だから。ここにずっと居たらいいから」

「どうして私なの？」

「え？」

「どうして私を呼んだの？ 私知ってるよ？ 誰を呼ぶか操作できる人間が居るって、その替え方を知ってる人間がいるって椿が言ってたから！」

葵ちゃんは、混乱して私に刺身包丁を向ける。

それに対して私は落ち着きながらも真剣な眼差しを彼女の瞳の奥に向ける。

包丁さんの、カミサマの武器は包丁だ。すべてを切り裂き、貫く刃だ。

私の武器は説得させること。自分の話を相手に理解させて納得させること。

やっぱり年齢的な差があったのか、混乱していながらも少し怯える葵ちゃん。

「もう葵ちゃんは普通に、静かに暮らしたいんだよね？ だったらその包丁は下して、私とお話しよ？」

「……………」

ふるふると首を横に振る彼女。怖がっているのか、その言葉は通らなかつた。

「ならその包丁はそもそも人を殺すためにあったの?」

「違う! そうじゃない! 私は「ならその包丁は今誰に向けられてるか、わかる?」

落ち着いてきたのか、葵ちゃんも自分の包丁と私を交互に見る。

ようやくそのことが理解できたのか、彼女の腕から力が抜け降りた。

「もう、その手を汚さなくてもいいんだよ。私はずっと一緒にいてあげるから」

「一緒には居られないよ。だって人は老いていつか死ぬから」

「なら、それまでに結婚して、私の遺志を継いでくれる子供を作るよ」

「それでもダメ。生きるなかで成長という老いもある。だから成長しない私達は絶対違和感を覚えられない」

「それでも、守ってみせる。理想とか、空想とか、妄想とか、言われてもいい」

「……………」

その言葉を聞いて俯き黙り込んでしまう葵ちゃん。

私はそつと近付いて抱きしめた。

「あ……………」

「ありがとう。今まで私達を守ってきてくれて」

「う、うわあああああああ……!」

泣きだした彼女。するとどうだろうか。命の感じられないその白い眼には藍色の瞳

が映り、次に気づいたときには普通の女の子の姿になっていた。

彼女の姿は見たことがある。

こちらに呼び出された時はの姿は、いわゆる『カミサマ』化した状態の姿なのだ。

そして今の人間である時の姿は包丁さん達が自分達の世界にいる時の基本的な姿。

何故『カミサマ』化が解けたのか私には解らないけど、今はそんなことはどうでもいかな、と思ってしまうのだった。

Outside

「やれやれ。マスターもお人好しが過ぎますね」

「あ、ルカ。……どこから聞いてた？」

「マスターが包丁を持ち出した時から気づいてました」

「あ、あはは」

「刺身……いえ、葵さんと呼びましょう」

「!？」

葵にとっては知らない人の登場に驚き、戸惑う。

それに、丁度彼女の後ろにドアがあったものだから、背後からの声に驚くのは当然だ。

「な、何者です！」

「相手に何者か尋ねる前に、自分から名乗って聞くのが妥当じゃないかしら？」
「私は包丁さんです。それ以上も、以下もないのです」

「そう、私は巡音ルカ。マスターの、水生夏奈子さんのVOCALOIDよ」
VOCALOIDという単語に彼女は反応した。

ここ最近では呼ばれることが少ないからか、呼び出された者は人殺しで自らを見失わな
いようになのか、帰るついでに現世の物品を土産として持ち込むことがある。

それは雑誌や新聞など、現世の情勢がよく解る物が多かった。

その中に記述してあった存在。VOCALOIDがあったのだ。

最初の方は皆アニメのキャラクターのように思えて、これと言って相手にしなかった
のだが、数々の雑誌の一部には載っている。

そこまで人気がある物なのかと、興味を持って見る物もいたが、とりあえず皆名前だ
けは見たことがある。

「まあ、あんまり戸惑わせてもいけないから、私は一階に降りておきますね。マスター、
後はお願いますよ」

「うん。解ってる」

扉を閉めて階段を降りる音を確認してから、夏奈子は口を開いた。

「葵ちゃん、貴女を水生家の代表である私が、此処に住まうことを認めます」

そういつて微笑んだ彼女を見て貰い笑い。

その笑みには面白かったのと、ある一つの考えが浮かんだからだ。

「夏奈子さんがかなり考えたこの命令ですが、極論私達はどんな目的でも遂行できるのです」

手に持っていたその紙を夏奈子に見せ、不敵に微笑む葵。

その言葉の意味が解らない夏奈子は首を傾げることしかできない。

葵はその紙を何の躊躇もなく持っていた刺身包丁で切り裂いた。

「これで目的は達成されたことにしていいのです。なので、普通はここで帰るのです」

「え……」

「無理な目的は、ある程度省いてしまえば達成可能なのです。対象が地球とか、月とか、そういったものでもおんなじです」

「それじゃあ……」

今度は夏奈子の腕が力なく床に降りる。

必死に考えた策が破られたからではない。本来の目的である彼女達を現世に留まらせることが出来ないからだ。

それでは、また正当な方法で呼び出され、人殺しを行ってしまう可能性が高くなるか

らだ。

かつてないほど落ち込んでいる夏奈子に、葵が再び声をかけた。

「が。今までカミサマをやってきただ中で、夏奈子さんみたいな人は一人もいなかったです。面白いからまだここにいてあげるです」

「それじゃあー！」

「はい、よろしくです。夏奈子さん」

さつきと正反対の明るい太陽のような晴れた表情をして夏奈子は大急ぎで一階に降りて行った。ルカに対して大声で何か言っているようだが、葵にはよく解らなかった。

「……それに、あそこまで真剣に想ってくれる人も、初めてだったです」

昔の生贄は『間引き』としての要素があったという。

少なからず包丁さんのメンバーにも、そういった理由で生贄にされた者もいる。

『間引き』として生贄にさせられた者に思いやりなどという言葉はないに等しく。

その初めての感情を忘れたくないな、と葵は思うのであった。

Side 水生夏奈子

葵ちゃんを迎えての晩御飯。VOCALOIDであるルカ自身にも見えているらしい。

包丁さんとは思念体みたいなものだと思っていたけれど、そうでもないみたい。

彼女に好きなものを晩御飯に出してあげるといったところ、ワラビと言われたので大急ぎで買い出しに行ったのもいい思ひ出。

みんなで食べる食事はまた違った気がする。みんなといつてもたつた三人のだけだ。

彼女はごはんやお味噌汁に目もくれず、真つ先にワラビのおひたしを摘み、大きな口を開けて頬張る。

下から食べるといった、それでもしないと入らないほどの量けれど、そんな下品なこととはしなかった。

それだけ大好きなんだろう。私もルカも嬉しそうに口を動かす彼女の顔を見てすぐに分かった。

「夏奈子さん、それいらないますか？」

「いや、いらないうってわけじゃないんだけど、葵ちゃんの食べっぷりに見とれちゃって」

「そうなのですか」

晩御飯のおかずは一つのお皿に盛るなどということにはせず、小分けされたものが元々個別の大皿に点々と盛ってある形をとっている。

汁物だとかのおかずを浸食する可能性があるけど、仕切りのあるお皿だから問題は

ない。

それにこういった盛り方をした理由の一つに、葵ちゃんも含まれる。

まだ彼女は幼い。だから好きなものは真っ先にとって独占してしまう可能性があったのだ。

それを阻止するためにも、自分の分は先に確保しておくことで安全は確保されたも同然。

それでも気にせず取りに来る子もいるけど、彼女はそこまで子供じゃないと思う。

そして案の定、私達より1.5倍ほど多く盛っていたワラビをすべて一口で食べてしまった。

これは流石に予想外だったけど。

ちよつとそっけなく言葉を返した彼女はほかのおかずやごはん、お味噌汁に手を出す。

何故こんな朝のような晩御飯なのかというと、彼女の食生活に合わせた物の方がよいと思つたから。

初日からカレーとかハンバーグとか出しても、たぶん抵抗を持つだろうから。

こつちに慣れてから、ゆつくり切り替えていけばいい。

ちらちらと私のワラビと自分のワラビのあつた場所を交互に見る葵ちゃん。

もつと欲しいのは一目瞭然。だから私は。

「もつと欲しい?」

「うん!」

「なら私の全部あげる。これでいい?」

「ありがとう!」

満面の笑みを向けられて私も貰い笑い。

自分の分がなくなっちゃったけど、そんなことを気にしないぐらいの可愛さと、感謝の気持ちだったから。

後……料理してた時に少し味見したんだけど、独特の苦みと独特の触感が……

葵ちゃんには申し訳ないけど、ワラビは嫌いかな。

「……………」

またワラビを頬張る彼女を見る私を、ジト目でルカが見ていた。

彼女は料理を手伝ってくれたし、味見をした時の私の苦い表情をしていたのも知っている。

それらの情報から、私がうまく葵ちゃんを使ったのを見抜いたんだろう。

「マスター、好き嫌いはいけませんよ」

「だ、だって、ワラビなんて初めて食べたんだから慣れてなくて……」

そこまで言ってはつとする。しまった、誘導尋問だ！

慌てて葵ちゃんを見ると、口をもぐもぐ動かしながらも、私の方を一寸の狂いもなく見つめていた。

ただ見てるだけ。無表情で何も考えていないかのように。

逆にそれが包丁さんが醸し出す独特の恐怖を私に思い出させた。

そう、私は万能包丁さんに、椿ちゃんに既に追われた事がある。

夢の中だったけど、それは明確に覚えている。それに似た恐怖が葵ちゃんからも感じられた。

そつとお箸をおく彼女。置いた時に鳴った音に体が反応する。

「夏奈子さんは、ワラビが嫌いなのですか？」

「あ、ああいや、そんなことはないよ？」

「味見した時に苦い表情をしていたのはどこの誰でしょうか」

「ちよ！ ルカ！ 余計なこと言わなくていい……!!」

また誘導尋問人んん!!!

無表情な視線が冷たい視線に変わる。体から汗が噴き出し、怖くて葵ちゃんの方が見れない。

もう誤魔化すことは不可能。こうなったら！

「ごめんなさあああああいいいいいい!!!」

椅子から飛び出してスライディング土下座。優希相手にも滅多にやらない技。足が痛いとかそんなの気にしてられない。もしかしたら自分の命が危ういかもしれないのに！

少しかけ時間がたって、溜息を吐く音。

「仕方ないです。嫌いなものは誰にでもあります」

「な、ならー!」

許してもらえたと思って顔を上げると、目の前にあったのは刺身包丁。

「でも許すのとは話が別です」

次の瞬間、我が家に私の悲鳴が木霊した。

Outside

「……遅いですね。何かあったのでしょうか」

桔梗が食卓にぽつりと残されたおかずと、逆さまで置いてあるお椀とお茶碗を見つめてつぶやく。

今日は葵が大好きなワラビのおひたしだというのに。

時計を確認する。あれからゆうに4時間は経っている。普通なら、どういった依頼でさえそこまで時間はかからない。

いくら人を殺すのを躊躇する葵でもだ。

現に、葵が泣いて帰ってきた時も、そこまで時間はかかっていなかった。

「はあ……」

「珍しいね。桔梗が溜息なんて」

暗い廊下から姿を現したのは椿。そしてその後ろには珍しく月桃がいた。

椿は食卓の椅子に座ったが、月桃は廊下で片足を伸ばし、もう片足を三角にして座り込んでいる。

昔の習慣からか、年少組や年中組は少なからず寝ている時間。起きているのは甘藻か千鳥、牡丹。そして桔梗ぐらいだろう。

「椿。貴女なにか心当たりはない？」

「心当たりといっても、最近呼ばれてないんだからあるも何も」

「この前、こちらに干渉してきた少女。それを掃ったのは紛れもない椿、貴女じゃない」
その言葉を聞いてああ、その事かと思ひ出したように呟くとその出来事を詳しく話した。

逆に彼女の夢を浸食して、標的を追いやすい学校を創造させたこと。

そして通常ではありえない、自分達がうまくいくように彼女の思考を無意識下で捜査したこと。

彼女が、階段から落ちて頭から出血し、そこから消え去ったこと。

暫く待つて見れば、また続きからのように彼女がそこに横たわつて血を流していたこと。

四肢を切断しても表情を一切変えず、これが夢だということを理解したこと。

真名を呼ばれ、殺し損ねたこと。

そして、その夢を切り彼女を排除したこと。

「つまりは、彼女は私達の存在について知っていると」

「十中八九そうだと思うよ。それに今回葬を呼び出したのも彼女じゃないかな」

「何の為に呼んだ？」

「呼ばれてない私達が知る由もないでしょ」

桔梗の言葉に月桃は引くしかなかった。

彼女らはその目的を、呼び出されてその記述された紙を見て初めて情報を得る。

他の者がそれを知るには、呼び出された本人が帰つて来て皆に話すか聞き出すしかな

い。

「「……………」」

三人が考えている時、何か変化が起きた。初めてではない。また、すなわち二度目。

「どうやら性懲りもなく来たようね」

「私が行きましようか？」

「いや、私が行かせてもらおう」

月桃が自分の得物である刀を取り出し、青い鬼の面を頭にかけて立ち上がる。

「月桃、どうせ同じ相手よ。私が行った方が相手も知っていて話しやすいと思うんだけど？」

「樁ねえはもう相手を知っているだろう。私とていささか興味がある。ここに干渉し樁ねえが殺し損ねた相手に」

廊下の闇の中に消える月桃。その姿を何も言わず見送る樁と桔梗であった。

第11話 噂を信じる者（後編）

S i d e 水生夏奈子

またこの夢か。これで二回目、正確には三回目。

真つ暗な学校。この前の夢と同じだ。

これから起きるであろう出来事を予想して勝手に歩いていたその足を止め立ち止まる。

きつとここはまた包丁さん達の世界に近い場所なんだろう。

椿ちゃんがそういつていたからまず間違いない。

出迎えてくれるのは誰だろう？ 心なしかわくわくする。

暗い学校は怖いはずなのに、それ以上に新しい包丁さんと対面できる嬉しさがその雰囲気を掻き消してくれた。

「さあ、どこからでもかかってこーい！」

「なら、行かせてもらう」

私が張り切って声を上げた直後、背後から冷酷な声が聞こえて私は床に倒れた。

痛くない。でも斬られた。どこが斬られたのかわからないけど、それだけは解った。冷酷な声。行かせてもらおうという台詞から私はすぐにそれが誰かわかった。

「包丁さんだね」

「……何故それを知っている」

「私はある程度の包丁さんの事なら知ってるから」

その方を見ようとして俯せに倒れている体を、彼女の方へ向けようとした時に違和感を覚える。

足が動かない。いや、下腹部から下が床に当たっている感触が全く感じられない。

上半身はしっかり床に触れている感触と濡れている感触はあるというのに。

そして瞬く間に広がっていく血だまり。普通じゃありえない。何故ここまで出血しているのか。

突き刺す音ようなが聞こえた。そして空中に投げ出される何か。

ぐしやりと音を立てて私の目の前に落ちたのは、自分自身の下半身。

青ざめる。現実を見てしまった。今私に起こっていることが。

鼓動が早くなる。こんな状況なら現実じゃ即死。でも死んでいないし心臓も脳も活動している。

必死になって体の向きを変えると、カミサマの姿をした人斬り包丁さんが、月桃さん

が立っていた。

「怖いかな？ でもそれもすぐになくなる」

「安心しろ。私は容赦はしない。一思いに殺してやろう」

思い出した。彼女は今まで人を助けたことがないことを。

その刀という人を斬るために作られた道具が、人を救うために使われるはずがない。

だから、命乞いは意味をなさない。殺すことだけが彼女の存在意義のようなものになっってしまったているのだ。

この夢の中で殺されたら。心臓を貫かれたなら、脳を斬り捨てられたなら。

現実の私も何かただじやすまない気がする。夢であつて夢でないこの世界。

なにか代償があるに決まっている。

ルカが言っていた。その方に自らが染まってしまうのだと。

私がこの夢を見ているということは、自らは既に染まっていた。

結果として葵ちゃんを呼び出して一緒に暮らしている。さらに私は道を踏み外している。

だけど、それでもいい。彼女達を救えるならそれでいい。

「でも……で……パッドエンドかな……」

目に涙をためて絞り出した言葉は、何とも自分を空しい気分にした。振り下ろされる刀。視界を遮る影。鉄同士がぶつかり合う音。

一瞬の出来事に思考が追いつかない。

目の前に立っているのは誰か。月桃さんの刀を受け止められる者。

私の夢の中に入ってこれる者。私を守ってくれる存在。

一つずつ処理していこう。

1. 目の前に立っているのは誰か。これは解らない。

2. 月桃さんの刀を受け止められる者。これは包丁さん同士ぐらいじゃないとできない。

3. 私の夢の中に入ってこれる者。これもまた包丁さん達じゃないと不可能。

4. 私を守ってくれる存在。これは解らない。ただ、少しだけ心当たりがあった。

「葵ちゃん？」

「違います」

即却下されて少しへこむ。でもその後姿をじっくり見ていればと自然と答えが出てきくと思いつめる。

紫色のスカート、紫色の髪。月桃さんの刀を受け止めているから、何の包丁か解らないけど、その色から私は誰か解った。

「月桃、彼女は葵の手掛かりを知るために必要な存在です。殺してはいけませんよ」

「私は今まで人を救ったことがない。だから殺すことしかできない」

「だからと言って自ら名乗りを上げたのは貴女の方ではありませんか」

「……………」

そこまで言われ引き下がる月桃さん。

桔梗さんがこちらを向いて、上半身だけになった私を片手で持ち上げる。片手の理由は無論もう片手に出刃包丁があるからだ。

投げ捨てられた私の下半身の形を整えて、切断部分にうまく『私』を置いてまた月桃さんの方を見る。

「貴女が斬ったのですから、その責任は取って頂かないと」

「だが私は「無理だとは言わせませんよ？」」

たぶん桔梗さんは笑っている。すごい笑みを浮かべているんだろう。

証拠に開いている彼女の手が学校の壁にめり込んでいるし。パラパラ小さい瓦礫が崩れているんだけど。時間が経つごとにその亀裂が広がっていつてるんだけど！

「……………」

無言で私の元に歩み寄ってきた彼女は刀を振り下ろす。一瞬の動作だったけど、私は何が起こったのかすぐに理解できた。

下腹部より下の感覚が戻ったからだ。つまり月桃さんは、私の切断部分の傷自身を切り接合させたのだ。ひとたび間違えば、ただ単に下半身と上半身の切断された部分が治るだけという、難しいことをやってのけたのだ。

「ありがとう、月桃さん」

「……気にするな」

やはり二人ともカミサマ姿だからかその年齢とは思えない背の低さだ。

「で、葵ちゃんについて知りたいんだったね」

「ええ。私達の大切な仲間を奪った罪は、本来許されるべきことではありません。答えによつては」

私に向けて出刃包丁を突き出す桔梗さん。

「私が貴女を殺します」

その言葉と同時に殺気を私に向かって放つ彼女。

でも私は引かない。月桃さんから感じたそれより弱い物だったから。

「これで身じろぎもしないとは……少し驚きました」

「月桃さんがすごかったからね。じゃあまず私の目的から話そうかな」

私は事細かに桔梗さんと月桃さんに説明する。

葵ちゃんを呼び出した理由、なぜ彼女を指定したのか、何を目的にしたのか、何が目

的なのか。

そして葵ちゃんがなぜ帰ってこなかったかを。

「はつきり言つて、ふざけてます」

「別に真向から否定されてもいいよ。でも私はこの信念を変えない。貴女達包丁さんがこうやって呼び出せると知ったら、知ってる人は人殺しに使うと思うから」

「戯言だ。そんなもので私達を救えると思つていいのか」

「ひどい言い方だけど、貴女達を現実に縛り付けない限り、このいつでも呼び出せる。そんな状況で放つておけないよ」

「……………」

「面白いじゃない。私は嫌いじゃないわ、そういうの」

二人の奥の方から足音が聞こえる。聞いたことのある声。

「椿ちゃん」

闇に包まれた学校の廊下から現れたのは、そのままの姿の椿ちゃんだった。

Outside

椿のそのままの、カミサマ化していない姿で現れたことに驚く夏奈子。

二人がカミサマ化しているのもあってなのか、それは椿の知る由もない。だがそんなことはどうでもよかった。

「椿、どこから聞いていたのですか？」

「最初からよ。桔梗の後をつけてたの」

「嘘ね。人間の貴女につけられるほど野暮じゃないわ」

「本当は彼女の気配を追っただけよ。そこに貴女達がいたからカミサマ化して隠れてただけ」

そこで夏奈子の話を全て聞いたという。で、そのついでに何かを見つけたのだ。

「葵、居るんですよ。出てきなさい」

その呼びかけが夏奈子の奥に消える。するとしばらくして足音が聞こえてきて、葵が姿を現した。

「どうして解ったのです？」

「貴女くらいの子の気配ぐらいすぐに解るよ」

ねえ？ と椿は月桃と桔梗の同意を仰ぐと、二人は縦にうなずき、それを見た葵はがつくりと肩を落とした。

「夏奈子さんに何かあったら大変だから付いてきたけど、桔梗ねえに出番取られちゃったです……」

「でもここに葵がいるということは、もうこの者はいらぬ存在だろう」

ここに葵がいるなら、夏奈子を殺して連れ戻せばいい。それで万事解決と月桃は思い刀を構える。

そこにすかさず葵が両腕を広げて夏奈子を庇うように前に立った。

「どうして葵が彼女を庇うのですか？」

「……………」

葵は怒った目で二人の目を見る。椿を見ていないのは何か理由があるのだろう。

「私としても、彼女を……夏奈子を殺したくはないのが一分ある」

「椿ねえ、お前まで毒されたか」

「いいじゃない。最近是人殺しも飽きてきたし。それなら、彼女の話に乗る方がいい」

「なら椿、貴女が行けばいいじゃないかしら？ その媒体からして、入手はそこまで難しい物でもないわけだから」

「ならお願いしようかしら」

不敵な笑みを浮かべる椿。その顔から何を考えているかなど、ここに居る誰にもわからない。

それに対して最初に動いたのは桔梗であった。

やれやれと諦め顔で首を横に振る。

「椿も引き抜かれれば、基本的に呼び出されるのは私だけということになりますね」
「桔梗ねえは椿ねえに次いで呼び出されるからです」

「最近、呼ばれ方が廃れてきたとはいえ、指名が多いのですよ」

「それなら私が呼んであげよっか？」

今まで外野で見ていた夏奈子だったが、すかさず隙をついて話に入ってきた。

「いえ、今は結構です。私がいなくなれば他の子達が苦労しますからね」

「桔梗まで……」

「月桃、貴女も同じように生み出された存在であるなら、心のどこかで感じているはずで
す。そんな強情ではいけませんよ」

「……………」

「現に、さつき彼女の傷を治したではありませんか」

いくら何か怖かったとて、自らの行動は、その最終決定は自分の意志。

そもそも月桃は。自分の怪力を恐れるような者ではないこと自体既に知っていた。

「……………」

長い沈黙で答え、ただただその場から去っていく月桃。

それに葵はほっと胸を撫で下ろした。

「じゃあ桔梗さんはいつ呼んだらいいかな」

「出来れば年長や年中の者より先に、年少の子達を呼んでいきたいのです。あの子達にはあまり手を汚してほしくありませんから」

「……………」

その発言から夏奈子は彼女が心底優しいのだと思った。

そして、それを聞いて葵が夏奈子の上着を掴む。

きつと、『あの時』呼び出されたことを思い出したのだろう。

椿もそこまでだが、苦い表情をしている。

「じゃあ、次からはその方向で呼び出すね。次はたぶん、杏ちゃんになると思う」

「……………後、葵をお願いしますね」

カミサマから人の姿に戻った桔梗は深く一礼する。

それに対して夏奈子は。

「桔梗さんが謝ることはないよ。誤ったのは私達。人が手を加えた物は人が再び手をかけないと戻せない。いくら時間と自然をかけてもね。だから、知っている人が居なくなればそれこそ、無責任だよ」

「だから、誰かがその手を汚してでも戻さなきゃいけないの」

「でも、葵ちゃんは皆にとつて大切な家族だもんね」

「夏奈子さん……………」

「お願いされたなら、最後まで責任を持ちます。私が死ぬまで。貴女達の面倒を見れなくなつたとしても、忘れない。忘れはしない」

「ありがとうございます」

再び深々と頭を下げる桔梗。今度は夏奈子も頭を下げていた。

謝罪と感謝、共に籠つた礼であつた。

「さて、もういいかしら」

取り残された椿はカミサマ化していて呆れたように口を開き、葵は少々つまらなそうに夏奈子のそばにいた。

そしてまたカミサマ化する桔梗。まだやることが残っている。

「葵、しばらくだけでもうまくやるのよ」

「うん。椿ねえ、梗さん。またね、なのです」

その言葉を皮切りに、椿と桔梗がその空間を切り裂いた。

もう二度と夢で交わることの無い様、その縁と共に。

S i d e 水生夏奈子

目が覚める。今日は優希が帰ってくる日だったかな。

実は昨日ルカから聞いたのだ。優希と連絡が取れないから相談したところ、本人から電話があつて旅行中だったとか。

家族水入らずで温泉旅行とか、いいなあ。私とルカも誘ってくれたらよかったのに。そう駄々をこねたら、町内で行われていた福引大会でリンちゃん引き当てた物だったそうで。

一家族分で人数がいっぱいで、行き先も旅行会社が勝手に決めるといふもので例え優希達が旅行に行くことを知ったとしても、その同じ行先に行くというのは到底不可能な面白いものではあつた。

起き上がってみると、違和感。

その方向を見ると、葵ちゃんが着物姿のまま、しかもその帯に刺身包丁が差し込んであるまま私の隣で眠っていた。

私はベッド、葵ちゃんは急遽客間から敷布団を引っ張り出して、自分の部屋の床に敷き寝かせていたんだだけ。

とりあえず起こさないように静かに抜け出し、私は朝ご飯と優希を迎えに行く準備に取り掛かるのであつた。

第12話 一段落

Side 遥 優希

夏奈子、ルカと別れて俺は皆と自分の家に入る。

玄関を開けると中から家独特の匂いが帰ってきたことを実感させた。
畳の匂いもいい物だが、やはり自分の家の方が落ち着く。

「お茶を淹れましょうか？」

「いや、俺が淹れるよ」

「なら私手伝いますね。リンちゃんとレン君はゆつくりしててください」

「はい」

リンはリビングのソファアーにダイビングして、顔をクッションに埋める。

レンはそのせいでソファアーに座れず、仕方なく肘掛けに座ってテレビをつけた。

「あ、マスター私ホットミルクがいいー」

思い出したように顔を上げて台所に向かって大声を出すリン。

それに手を振って答える。

「ミルク、牛乳出してきてくれ」

「解りました。あ、私の分もお願ひします」

「解った」

味噌汁とかを作る鍋とは別に、ホットミルクを作るために買った鍋を用意する。

俺は人に出すホットミルクを作るのにレンジは使わない。鍋で温めて作るのだ。

特に理由はない。いや、厳密には人の手をかけるといふのが大きな理由なのだが。

やはり機械より人の手。それだけで味も変わる。

それは母さんの教えで分かっていた。父さんも何かそんなことを言っていたような気がするが、もっと別の事だった気がする。

「わざわざ鍋で温めるんですね」

「ああ」

「優斗さんが言っていましたよ。誠意を込めた物には何にでも自分の思いが乗ると」

その言葉で思い出した。父さんは確かにそういつていた。

だから仕事にも趣味で作る作品にも、誠心誠意込めてそれに取り組んでいた。

「そういえばゆかりもマキも、父さん達の旅行に付き合っていたわけじゃないんだな」

「確かに購入されたのは旅行中でしたが、最初期は私達に接客の仕方や営業等の仕事について教えられました。それからしばらくして私達も裏表共の仕事に就くことになり、

しばらくは二人のお仕事の関係に手を染めていたんです」

「なるほどな」

「それからしばらくお慕えして、今に至ります。色々と急な出来事だったので、ご連絡することが出来なかつた事を謝る、と優斗さんが言つてましたよ」

「そうか。……なんか悪いことしたな、俺」

「そんなことはありません。優希さんのお蔭でお二方の考えも少しは変わったんですよ」

「二人が？」

「はい」

俺がリンとレンを購入した結果がこういつた結果を生んだのなら、折角の親婚旅行を癒せないものになつてしまつたのなら、申し訳ないと思つていると。

俺が両親を変えたというのは信じがたい話だ。

だがそれをすぐに察したゆかりは話してくれた。

俺がリンとレンを購入して、人に似て人にあらず者と触れ合うようになり、そういった者達への理解を深めようとしたこと。それが最高潮になつた結果が二人、つまりゆかりとマキの購入に至つたということになる。

ミクはその話を聞いて心底安心していた。何を考えていたのかは俺には解らない。

今は企業の上層にそのことで軽い相談をしているらしい。

でもその話はV A W Cの存在もあって順調に進んでいるようで。

「二人もなんだかんと言つて、大変なんだな」

「今はずいぶん落ち着いたと言つてますよ。優希さんが生まれた頃から」

「やっぱり我が子の存在は大きいのか」

複雑な気もするし、そうでない気もする。

自分もしつかり勉学に励んで二人の道を継ぐとしよう。

到底両親が勉学だけの人間を二人の企業に入れようとはしないが、な。

4人家族から5人家族（厳密には6人家族から8人家族）になった俺達は、少々困った問題が起きた。

そう、食べ物の問題だ。

いや、野菜や肉、お米などの材料となる物の量には全く影響はないのだが、パンやお菓子等の元から量が分れているものだ。

パンは何とかなる物の、これからマキが来ることも考えて量を増やしておかないと。後は、量が少なく大きいお菓子をあまり買いくくなることか。

それを二人に伝えると唯一リンからブーイングをもらった。

「えー！ それだとケーキ切る時も小さくなっちゃうのー!？」

「まあ、そういう事にはなるな」

「ぶーぶー!」

「我儘言うな。それに日頃からケーキが食える階級でもないだろう」

「そんなことないよ！ その気になれば食べられるだけのお金あるもん!」

「ケーキは毎日食べる物じゃないだろ」

「それにおいしい物はたまに食べるからおいしいんだ」

「あ、言われてみれば……」

「その時が来て本当に不満ならこっちで何とか対策取るから、その時が来るまでは落ち着いてくれ」

「でもゆかりさんの歓迎パーティーしたいし」

そのリンの言葉にレンとミクはうんうんと首を縦に振る。

俺からすれば、元から家族だったからその意識は薄かった。リンから言われて初めて意識したほどに。

「そうだな……言われてみればだ。だがそれはマキが来てからでもよくないか?」

「なんだかマスターいつもと違うね」

「うん。何か意識してるみたい」

「私もそう思う。なんとなく調子が出てない感じかな？」

「スランプに似た物でしょうか？」

4人から言われてしまう。多分俺らしくない。多分。

ゆかりが来てからまだ一時間と経っていないのに、何を考え、何を意識してるのだろうか。

「……………」

「きつとマスター、旅行で疲れてるんだよ」

「そうですね。休んで来たらどうですか？」

「マスターあんまり体頑丈じゃないもんね」

「あれ？ そうなんだ」

「うん。マスターのお母さんが一番そのことで気にしてるもん」

「美希さんも優斗さんもおっしゃってましたね。優希さんは体が弱いから体調は大丈夫かと」

こども親以外から心配されたのは初めてかもしれない。

俺は大人しく言うことを聞いて自分の部屋に上がり、布団に倒れ込む。

体調を崩したのだろうか。それとも、今回の旅行で何かあったのだろうか。

「家族か……」

家族。改めてその言葉の意味を咀嚼する。

血がつながっていなくても、たとえ人でなくても、共に同じ家という屋根の下で、共に暮らすのであれば、家族。

父さんからの教えだ。中学ぐらいの時に教えてもらったことだ。

あの時は、どうだったろうか。二人は幸せだったろうか。

「そうか……なるほど」

今の俺は自分の行動に負い目を感じているのだ。勝手に自分で負い目を作って追いつめているんだ。

俺がリンとレンを購入した故に両親は変わった。

俺がこの世に生を受けた故に両親は変わった。

決定するのも、変更するのも、共に自分の意志が最終決定までを導く。

だからそのほかのものに影響されたとしても、判断は自分にある。だから言い逃れできない。

だが、その変わる考えを持たせてしまった、所謂きっかけを作ったのは紛れもない本人達以外の人物。

その人物がいなければ、その考えは生まれなかつただろうという可能性。

こどもも変わって、二人は今幸せなんだろうか。

……こういう時、頼れるのは一人しかない。

俺はある番号に電話する。

『……もしもし』

「もしもし、俺だ」

『オレオレ詐欺はまたにしろ。で、なんだ優希』

「ちよつと参った。二人のことで」

『ゆかりとマキ、つて雰囲気じゃなさそうだな。二人とはどの二人のことだ』

「……二人のことだよ」

『……………』

父さん。遥 優斗。

二人が親婚旅行に出かけるようになってから重い話をずつとしてばかりだ。

だが、そういう話は母さんにも夏奈子にもしたくはない。

理由は簡単。相手が女性だからだ。

男性が肉体面で器用であれば、女性は精神面で器用。だがそれは逆にそちらを多用し

傷つくということにもなる。

精神面で怪我をすることはないが、気疲れなんて言葉があるくらいで疲れはする。

『……まあ、お前の言う二人なんて元から解るがな』

「なら引つ張らないでくれ」

『もしもがあるだろう。だいぶ気疲れみたいだな。家族兼慰安旅行じゃなかったのか』

「お蔭様で。旅館の方にはしつかり連絡が入ってなかったみたいだけど」

『お前の名前を出せば入れたはずだが？』

「その点でもお蔭さま」

『そうか。で、話を戻すがどうした』

「……二人は、俺が生まれて幸せになったか。それを聞きたい」

その言葉を言った瞬間、相手の方から電話を切られた。

「……はあ」

流石の父さんでも無理か、そういう質問は。

参っていると誰かが階段を駆け上がってくる足音がする。

誰かと思っていたらゆかりがドアをノックせず入ってきた。

何事かと思う前に彼女は俺の前に歩み寄り、そして俺の視界がホワイトアウトした。

その前に見たのは、冷酷なまでに冷たい瞳とゆかりの表情。

右の頬に残る痛みと、部屋の左に置いてあるものが視界に移って何が起こったのか理

解する。

「どうして叩いた」

「その理由は一番優希さんが解っているはずですよ」

「……………」

「優斗さんから私に先ほどメールがありました。それを実行しただけです」

そういつてゆかりは自分の携帯、淡い紫と紫色のチェック柄のカバーがしてあるスマートフォンを見せてくる。

そのメールの文章にはこう簡潔に書いてあった。

『優希を殴れ』

「あいにく私は上手い殴り方を知りません。ですので、私のやり方で『罰』を与えさせてもらいました」

「差し詰め代行人だな。父さんもうまくやる」

またホワイトアウト。またぶたれた。

理由、理由なんてどうでもいい。どうでもよかった。

「これ以上やると、私も手が痛いのでやらせないでください」

「解った。だから構えないでくれ」

まだぶつつもりなのか、手を上げているゆかり。

まるで相手に対して何も思っていないかのような影のかかった表情。瞳。

ここまで怖いゆかりは見たことがない。何がそうさせたのか。彼女はこの文章だけでどこまで読み取ったというのか。

「……父さんには俺から謝っておく。親には愚問だったな」

「……………」

それを聞くと何も言わずに部屋を出ていくゆかり。

俺はそれを見送って再び父さんへ電話をかけたのだった。

S i d e 結月ゆかり

皆さんの計らいで優斗さんの部屋で眠らせてもらうことになった。

そこまでせずとも、客間の布団でいいと言ったのだが、優希さんを含む4人から言われたため押し通すわけにもいかず、お言葉に甘えることにする。

ところでマキちゃんは大丈夫だろうか。

誰に対してもフレンドリーであること。いつまでも明るく逆に物事を軽く見ること。

彼女は彼女でいいところがあるのだが、何とも不安な部分がある。

私ならお客はお客、身内は身内と分けて対応し、多少のミスも重く考え対策を練ると

いうのに。

もともと彼女はバンドのギターをやっており、それが今の彼女の性格と大きくかわっているのだろう。

布団を敷いて、後は寝るだけ。そうなった時私の電話が鳴り始めた。誰からだろう。画面を見れば、一番見慣れた人の名前。優斗さんだ。

『もしもし、ゆかりか？』

『はい。私ですよ』

『今日はすまなかった。お前にはああいう仕事は頼みたくなかった』

『仕方ないことです。優希さんはなんて仰ってました？』

『俺が悪かった、と。ありきたりな答えだな。50点と言ったところか』

『相変わらず厳しいですね』

『当然だ、自分の息子だからな。それだけだ。ありがとう、ゆかり』

『……いえ。こちらこそ、ありがとうございます。マスター』

そういつて互いに微笑んで電話を切り、今日のことを思い出す。

『慕う、とは相手を恋しく思うという意味もあるのです。恋しいの意味の説明は必要ありませんね？』

『それからしばらくお慕えして、今に至ります』

『……少々不覚でしたか。まあ、間違っははいませんが』

今日はいつになくぐっすり眠れそうだ。そう思って私は目を閉じた。

第13話 命令は絶対?

S i d e 水生夏奈子

すっかり話し込んで遅くなってしまい、もう夕方。

優希達と別れて私はとりあえず近くのルカに、デパートである物を買ってくるようにお願いして私は家に戻った。

「ただいまー」

「おかえりなさいです」

とてとてと葵ちゃんが出迎えてくれる。

今までの私だったら、ルカに何か頼むとき自分も一緒に出向くだろう。

一人は寂しいし、静かなのはそれをさらに寂しくさせる。

でも今は葵ちゃんがいるから寂しくない。

そんなことを思ってたら彼女がこけてミサイルのように包丁が飛んできた。

「うわあああー!」

間一髪しやがんでかわすと、玄関を突き抜けて空の向こうに飛んでく。

「……………」

2人で呆然とその方向を見ているも仕方ないので、私はとりあえずリビングに入った。

「二人で寂しくなかった？」

「少しの間なら我慢できるから問題ないのです。でも少しは……」

静かに近づいてぎゅつと上着を掴んでくる葵ちゃん。

やっぱりまだ10歳だもん、寂しいもんね。なら私の精神年齢も10歳以下？

そう思っただけで彼女の方に視線を落とすと、その右手に刺身包丁が掴まれていた。

「あれ？ 包丁が……」

「包丁さんだけあって、包丁も私達の本体なのです。だから包丁が遠くにあると手元に戻ってくるのです」

なるほど。それにさっきのミサイルのような勢いはないから大丈夫ってことかな。

「今日もまた包丁さんを呼ぶから、ルカが帰ってくるまで待つてね」

「また、呼ぶのです？」

「うん。桔梗さんからもお願いされたから、年少組の子からね。杏ちゃんを」

「……杏はやめておいた方がいいのです」

「え、どうして？」

「杏は、命令されるとそれを全部実行して帰ってくるのです。でも今回の夏奈子さんの

命令は実行できないのが事実。そんな状況で杏を呼んだら、きつと大変なことになるです」

杏ちゃんは、命令を聞かないと折檻される場所にいたというのを見た。

包丁さんとなって命令を果たす存在になった今もそれが影響して、命令を遂行するようになった。

その分彼女は危険だと、葵ちゃんは私に教えてくれている。

言われてみれば、なのだ。それなら他の年少組の子か、いつそのこと年長の子や年中のしつかりした子呼び出して抑止力と説得力を上げたほうが幾分も成功しやすい。

でもルカに頼んだのは杏ちゃんを呼び出せる包丁だけ。この状況は非常にまずい。

ただ単に今日はやめてまた明日に呼びばいい話なんだけど、善は急げというし……
もうルカもデパートにはいないだろう。今から携帯にかけても遅い。

「ただいまもどりました」

噂をすれば影。ルカは大きな袋を手から下げて帰ってきた。

どうしようどうしようどうしよう。

「どうしたんですかマスター、そんなに顔を青ざめて」

「ルカさん、他の包丁は買ってきてないです?」

私が声をかける前に葵ちゃんが先に言ってしまう。

それに激しく同意するように私は首を必死に縦に振る。

「なるほど、概ね予想は出来ていましたよ。ということでは」

袋の中から数種類の包丁を取り出したルカ。

「ある程度別種の包丁も買ってきました。他の物は多少持っていますからそれで代用が効くかと」

「さつすがルカ！ 話が分かるー！」

「マスターのVOCALOIDですからね。当然のことです」

それって私が駄目マスターって言ってるのと同じだよね？ ね？

ほっと胸をなでおろす葵ちゃん。

「でも今じゃ入手し辛いのはどうしよう」

「それだけではありませんよ」

「え？」

ルカが難色を示す。

「その他の包丁は入手困難です。通販という手もありますが」

「なら通販で」

「価格はピンキリです。それにお金がもうあまりありません」

「ど、どうして！」

「服の材料費で今月は厳しいというのに……包丁まで購入するととなると、食費まで手を出してしまいますよ。もう既に手を出してはいますが」

以前、と言つてもだいふ前だが、それが今になって牙をむき始めた。

そう。雪ミクちゃんの服を作るのは特殊な素材が必要で、かなり高額だった。

そして、両親に相談して、大分先まで生活費を前借したのだ。

最初の頃はまだまだしただったけど今ではルカのVENにまで手を出して、食事もおかずを減らしてやりくりしている。

昨日は久々のごちそうだったのだ。その分食費もかかったけど。

「それにこのまま家族が増えれば、生活費が嵩むというレベルではなくなります」

「でも、それでもなんとかしなきゃ!」

「それを何とかする本人に何かあったらどうするんですか!」

大声を張り上げるルカ。私の身を案じているのはすぐわかった。

それと同時に、包丁さん達のことにも心配しているんだと分かった。

「今彼女達を救えるのは現在では貴女とごく少数の方だけでしよう。ですから貴女が倒れたらそれだけで大きな欠損なんです」

「少しは自分の身を案じてください。それが結果として皆を救うことにつながるんですから」

そういつてリビングを出て行ってしまいうルカ。

置き去りにされた私と葵ちゃん、は閉められた扉を見つめていた。

そのまま何もしないのも私が許さなかったので、一つ包丁を取り出し紙に命令を書く。

その紙の上に包丁を。

「包丁さん、切ってください」

目を閉じてじっと待つ。

この部屋にある気配が増えるまで。

「お前が私を呼んだのか？」

「笹！」

「うわあ?!」

声をかけられて目を開けたら目の前には誰もおらず、横から良くない鈍い音が聞こえてきた。

その方に視線を向けると葵ちゃんが包丁さんもとい、カミサマ化した笹ちゃんに抱き付いて。

当の本人は魂が抜けたように、口をぽっかり開けて腕をぐったりさせていた。

「あ、あれ？ 笹？ 笹？」

ゆさゆさと体を揺するもグラグラと重い頭が揺れるだけで、一向に起きる気配がない。

私はとりあえず、客間に布団を用意するのであった。

葵ちゃんとルカが寝付いてから、私は一人リビングで考え事に浸っていた。

今後の生活費。今の私の行動のあり方。

一応2、3人までなら大丈夫だとは思うけど。

彼女達にはそれなりに自立して生活できる力がある。

カミサマ達の世界でも、そうやって暮らしてきた彼女達。

だから平穩に暮らせる場所を、人とあまり関わらなくても暮らせる場所があれば。

現に年中組さん達が居れば何とか生活していけると思うし……

と、リビングの扉が開く。カミサマ化している笹ちゃんだ。

「お前が夏奈子だな？」

「あ、笹ちゃん。眼覚めた？」

「最初にあんなことがあつては私の面目が経たない。記憶を切らせてもらおう！」

包丁を手私に切りかかってくる彼女。

がしかし、椅子の脚に足が引つかかかって思いつき顔面から扱ける笹ちゃん。

「……………」

バチンッ！ と肌がぶつかる音と、ゴンッ！ と頭をぶつける音が同時に、それも結構大きな音で鳴り響く。

「うううう……………」

「だ、大丈夫?！」

顔を真っ赤にして悔しそうに唇を噛みながら、目に涙をためる彼女。

私は駆け寄って頭をなでながらも声をかける。

自分の羞恥をさらして本当に悔しいのだろう。

だから私の記憶を切ろうとしたのだ。自分の面目を守るために。

そんな子だけれど、実は彼女は葵ちゃんより一歳年下の9歳。

小学生にして3年生く4年生でまだまだ幼い。葵ちゃんもそうなんだけど。

「うわああああん!!」

フロアリングだから擦りむいていることはないと思うけど、案の定痛みには耐えられなかったのか大声をあげて泣き出してしまった。

あやそうか考えたけど、声を抑えるために私は彼女を抱きしめた。

服が汚れるとか、そんなことどうでもよかった。

彼女の泣き声が小さくなっていくことに私は、本来の目的を忘れあやすことに専念していた。

頭をなでて、ゆっくりゆっくり私の気持ちを含めて。

そんなに腕に力を入れてないから、苦しくはないだろう。ましてや今もカミサマ化しているのだから、何ら問題はないはず。

「ふはっ……」

そんなみつともない声と共に私の顔を見上げるように、胸元から顔を出し新鮮な空気を吸う笹ちゃん。

カミサマ化が解けていないけれど、口の動きでその表情の変化が解る。

彼女は今ぼんやりしている。落ち着いているけど、思考が追いついていないのか、なぜ私がこんな行動をとったのか、解らないからか。

「どうして私を抱きしめている?」

「どうしてだろ。わかんないや」

「なら放して貰いたい。苦しい」

「ああ、ごめん」

月桃さんにも似た口調の彼女は、放されるとほっと溜息を吐いて私を見つめた。

麵切り包丁を下げているところを見ると、私の記憶を切る様子は無いようだ。

「お前の話は桔梗からある程度聞いている。けど、何故私を呼び出したのだ」

「それは、ちよつと事情があつてね」

「私が呼ばれた時、桔梗が一番意外そうな顔をしていたのを覚えている。その事情を教えてほしい」

私はその事情を説明する。

すると妙に納得したかのような口の形をして、カミサマ化を解いた。

「なるほど、なら仕方ない。が、その事情は皆に先に言つてほしかった」

「呼び出された私達が知つても、意味がないからな」

「意味なくないですよ。笹」

リビングの扉が開く。そこには葵ちゃんが目を擦りながら立っていた。

「あ、葵ちゃん。起こしちやつた？」

「誰でもあんな轟音と泣き声じゃ起きるです。で、話を戻すですが」

「私達はその気になれば夢でみんなと会えるのです」

笹ちゃんは驚いていたけれど、私は何ら驚かない。

だつて3回も体験したから。もしかしたら今日も皆と会えるかもしれない。

「ただし、夏奈子さんはもう無理なのです。桔梗さんが縁を断ち切っちゃつたですから」

そういわれてがっかり来る。もうみんなに会えないのかあ……

「でもそれは不確定事項だろう? 証拠はあるのか!」

「現に今晚会ってきたです。杏とお話してきましたですよ」

「……………」

ぐぬぬ、と自分の言うことが全てくじかれて悔しいのか歯を噛みしめる笹ちゃん。

「まあまあ、でもこれで皆と一応は連絡が取れるんだね」

「です」

「なるほど。なら問題ないか」

「あ、夏奈子さん、ちよつとお話があるのです」

もう遅いから寝ようかと考えて席を立ったところで、葵ちゃんに止められる。

どうしたのか尋ねてみると、夢の中で杏ちゃんと話したことを話し始めた。

O u t s i d e

葵が眠りについて、彼女らの世界に干渉するのに時間はそれほどかからなかった。

そもそも自分が包丁さんゆえに、この縁は切っても切り離せないのだろう。

日が落ち込んで暗くなったあぜ道を葵は歩く。見慣れた田んぼの風景。

帰ってきたことを実感していると、黄色い影が現れた。

「あれ？ あおつちだ！」

「あ、杏。どうしたんですか？ こんな時間なら寝てるはずじゃ」

「きーちゃんから聞いたんだよー。杏の新しいお姉ちゃんになってくれる人が居るって！ それで笹が先に呼ばれちゃって、おかしいなって夜更かしまでして頑張ってたの！」

確かに、夏奈子は杏を呼ぼうかと考えていたが、葵の発言により急遽笹を呼ぶことになったのだ。

その事情は葵と夏奈子、そのVOCALOIDであるルカしか知らない。

「ねー、杏いい子にしてるよね？ だからお姉ちゃん呼んでくれるよね。どうして杏呼んでくれないの？」

「そ、それはですね」

焦る。どうにかしてこの場を切り抜けないとまずいのは葵自身、目に見えている。

とつさに思いついた言葉を適当に並べる。

「杏は外で遊びまわるのが好きですよね？」

「うん！ 杏遊びまわるの大好き！」

「実は杏のお姉ちゃんになってくれる人の家では、遊びまわれるほどの広さがないので

すよー！」

「え？」

「それで、今私達の新しいお家を探してくれているところなのですよ！ それに、向こうに行っても私達がまだ少ないから、遊べる相手も少ないのですよ！」

嘘丸出しの言い訳を必死に口に出す葵。顔には汗びっしりで年中組が見ても嘘だと分かるだろう。

「そうなんだ。ならもつと杏がいい子にしてたら呼んでくれるよね！ ね?！」

「そ、そうです！ もつと杏がいい子にしてたら夏奈……お姉ちゃんも呼んでくれるです！」

「なら杏早く寝ていい子にしてるね！」

風のように去っていく彼女。それを見てほっと息を吐く葵。これで暫くは凌げるだろう。

自分の言葉が、夏奈子のハードルを上げているということに気付くまで。

S i d e 水生夏奈子

「という訳なのです」

葵ちゃんの言葉に頭を抱える。

確かにここは田舎といつても、周りが水田に囲まれた様な田舎とはほど遠い。

でもそういう田舎を彼女達は望んでいる。

できれば自分の目の届く範囲においておきたいけど、彼女達は彼女達だけで暮らしていける力がある。

場所さえ与えれば、そこで耐えぬき生き抜く力を。

でもこんな『都会』においておけないのも事実。人の出入りが多いからだ。

包丁さんを知った人物が彼女達の存在に気付くのも時間の問題ともいえる。

たとえそんな田舎を見つけたとしても、住む場所が無い。

家族でそんな場所は……そこである事を思い出す。

そういうえば祖父の家は田舎だったと。ドがつくほど田舎だった。

何回か手紙で呼ばれたりおじいちゃんに連れられていった事があつたけど、行くだけで苦労したのを覚えている。

今でさえ道路が整備されていなくて、車でも自転車ですえ直接そこまで行くのは不可能。

長い山道を何時間も歩いて開けた盆地にぽつんとあるおじいちゃんの家。

そんな場所にあるというのに、多大な財産を残してくれた彼を私は不思議でたまらな

かった。

お葬式の時、お父さんやお母さんに聞きたかった。

けど、その当時の私はきな臭さを感じていたから、それに負けて聞けなかった。

もしもこれが裏のお金だったら、と根も葉もない事を思っていたから。

そしてその財産は親戚達の相談で分割される事になったのだけれど、この土地と家の管理は私達の家族が任せられる事になった。

そのときのお父さんの顔をよく覚えていて、汚れ仕事を請け負った様な、そんな顔だ。

……そうだ、そこなら包丁さん達を住ませる事ができる。

人の出入りが少なく、ひっそり暮らせる場所。

包丁さん達の元々暮らしている場所と何ら変わらない場所にもてるだろうから、問題は何ら無いはず。

「夏奈子さん。ごめんなさいです」

しばらく沈黙が続いていたけれど、その沈黙のおかげで私は一つの考えに至れた。

「ううん。気にしないで。候補が一つだけあるから」

そういつて私は二人にまとまった考えを告げるのであった。

第14話 新しい居場所

S i d e 水生夏奈子

お父さんやお母さん、土地関係の業者の人達と話し合つて時が経ち、もうゴールデンウィーク。

私はついに今は亡きおじいちゃんの家を管理を任されることになった。その間はドタバタしてて、包丁さん達を呼び出すことが出来なかつた。でもこれでやつと杏ちゃんを呼び出すことが出来る。

と、その前に。

『もしもし』

「あ、優希！ ゴールデンウィーク空いてる？ 空いてるよね！」

『いや、父さんと母さんが帰ってくるんだが……』

「あれ、そうなんだ」

『でも付き合えなくはないな。どうせお前のことだから明日ぐらいに』

「夕方じゃあねー。流石優希、よく解つてる。じゃあ明日のお昼過ぎ駅に集合ね！」

『はいはい』

優希がお父さんとお母さんが帰ってくるというのに、無理してでも行こうとする理由が分からなかったけれど。

細かいことは気にせずには私は既に用意されている包丁と紙を机の上に置く。

あれからというもの、ルカが来て、葵ちゃんが来て、笹ちゃんが来て、私の生活は激変した。

一人寂しく暮らす生活から、会話のある生活に。

会話のある生活から、子供を見る生活に。

子供を見る生活から、家族を見る生活に。

そういつても過言でないほど、私の生活は激変したのだ。

楽しい。嬉しい。充実した毎日を送れたことに本当に感謝している。

その万感を込めて、私は久しぶりにいつもの言葉を口にした。

「包丁さん、切ってください」

S i d e 遥 優希

突然の夏奈子の電話になんら戸惑うことなく対応し、俺は皆にそのことを告げた。

行き先は不明。何日かかるかもわからない。もしかしたらゴールデンウィークを全

て使うかもしれないと。

「でもさマスター、ゴールデンウィークにお父さんとお母さん帰ってくるんだよね？」

レンの言葉が胸に刺さる。

実はを言うと、これまでの間あの電話を皮切りに俺は二人と全く連絡を取っていない。

理由は申し訳なさだ。もうかなり時間が経つが、いざ電話を取るとあの時のことを思い出してかけられず、の繰り返し。

二人は俺を大切に育ててくれた。それを解っていないながらいくら気が滅入っていたとはいえあんなことを言ってしまった。

だから、そこから感じる負い目が結果として、極論として二人と顔を合わせたくないのだ。

他者からすれば馬鹿みたいだと思われるだろう。でも、俺からすれば二人は偉大な人であり、一種の目標であり、夢でもある。

それからか二人の前ではどうも、リンやレン、夏奈子達の前で見せていた俺ではない。

「すまん、両親の戻ってきた時のお祝いは後にさせてくれ。ちよつと俺に考えがある」
「そうなんだ。なら大丈夫かな？」

「……………」

リンやレン、マキは納得してくれたが、ゆかりの指摘の視線とミクの心配の視線が痛い。

単純に、今思ったこと。

「(相談相手を、作らないとなあ)」

そう思いつつも、俺は一人で買い出しに行くと言ってその場から逃げるのであった。

「いらつしやいませー。あ、優希さん」

「町谷さん。こんにちは」

『Wonder Cafe』。

中々の頻度でここには訪れていた。

リンとレンを連れてないときも、気分転換によく利用している。

お蔭様で常連となって顔も名前も覚えてもらっていたり、ちよつとしたサービスを受けたりもしている。

「……………はあ」

「珍しいですね。溜息なんて」

「人間生きてれば悩みの一つや二つ出来ますよ」

「私より若い子に言われては、私もおしまいですね」

右手に持ったカップを左手のタオルで拭きながら、クスリと笑みをこぼす町谷さん。

「そういえばMEIKOとKAITOは？」

「VAVCに出ていますよ。二人には二人の仕事がありますから」

「そうですか」

「ご注文はどうされますか？」

カップを置いて俺を見つめる彼女。でも俺は目線を合わせなかった。

なんとなく恥ずかしい。母さんに似ているから。

「適当でお願いします」

「わかりました」

思いつかなかったときにいつも口にする。

これを言うと、町谷さんは本当に適当に何かを選んで淹れてくれる。

まあ、はずれがないからこそこれを選ぶのだが。

「はあ……」

肘をつき手を顔の前で組んで、目を閉じ俯いて溜息をまた一つ。

大分滅入ってきてる事が解るのだが、やめられなかった。

「追加料金でカウンセリングをお受けしますよ」

「と言いつつ無料で相談に乗ってるじゃないですか」

「落ち込んでいる人を見て幸せになる人は、この世にいませんからね」

「はい、出来ましたよ」

手を下して目の前に置かれたカップの中身を見つめる。

その中には、熱々のコーンポタージュが入っていた。

「あの、何かの嫌がらせですか？」

「いえ？ 最後の一杯をお出しただけですが」

「このコーンポタージュは手間暇惜しまず、スイートコーンを裏ごしして作られているから相当おいしい。」

まあその分値段は少し張るが。

でももう梅雨の時期で熱くなるというこの時期に、これを出すのは少々悪意というか悪戯心を感じる。

でもせっかく出された物なので、俺は頂くことにした。

「大分気が減入っているようで」

「……………」

暑いのでスプーンで掬いながら飲んでいると町谷さんが口を開いた。

「少しでもいいですから、お話ししてもらえませんか？」

「……実は」

俺は両親に言ってしまったこと、それが原因で二人に合わせる顔がないことを伝えた。

「なるほど」

そう言って今度はグラスを磨き始める彼女。

考える時に止まっているといい考えが出ないということ、常に何かをしているのだ。

「単純に言ってしまうと、当たって砕けたほうが身のためですよ」

「ですよ。薄々気づいてはいましたが」

「それが出来ないならばらく間を置いてみて、自分が覚悟できる様になってからでも何ら問題はないかと」

「そんなものですかね」

「でも、間を開けすぎればその分苦しくなりますからね」

「ごもつともなことを言われて少しへこむが、へこんでいる場合ではない。

夏奈子とは最近顔すら合わせていないから、こちらの身を按じて誘ってくれた、という事はないだろう。

ただ、俺も今は少し間を置きたい。

夏奈子との旅行から帰ってきたらいざれ顔を合わすことになるだろうし、謝罪はその時にするとして。

「ありがとうございます」

「少しは楽になりましたか？」

「はい、多少は。元々答えなんて決まっていたんですがね」

「人に言われて気付くことなんていくらでもありますよ」

「相談の請負役の請負役さんに言われると、説得力ありますね。喫茶からバーに変えたらどうですか？」

「私は大人の相談より、子供の相談を受ける方が好きなんですよ。中々可愛らしいですからね」

「……………」

やはり彼女も彼女だと思い、俺はまたコーンポタージュを飲むのであった。

買い出しを終えて家に向かう途中、通り道にある夏奈子の家から何かが暴れまわる音

が聞こえてきた。

そういうえば最近騒がしかったな。と思いながら、特に気に留めずその場を通り過ぎるのだった。

S i d e 水生夏奈子

「ちよ、杏ちゃん！ 大人しくして！」

「そうですよ杏！ 大人しくするです！」

「落ち着け杏！ 桔梗から言われてるだろう！」

呼び出したはいいいけれど、あることが原因で家中を暴れまわるようになってしまった杏ちゃん。

今では葵ちゃんと笹ちゃんがカミサマ化してまでして抑え込むという、当初予想されていたであろう状況になっている。

その原因は。

「お姉ちゃんのいうことは聞きたいけど、それだけはやだ！」

「だ、だから、向こうに行ったらすぐ脱いでもいいから」

「それでもチクチクしてやだー！ キュツつてするからやだー！」

包丁さん達は『穿いていない』。そう。すなわち下着をつけても穿いてもいない。

それは流石に色んな意味で危ないから、穿かせようとしているのだけれど合成繊維特有のそれと、下着特有のちよつと締め付ける感触が嫌らしい。

そもそも杏ちゃんも命令は絶対の子なんだけれど、私が丁寧なことを説明して達成できた時にはご褒美を、たとえばできなくても慰めてあげるだけという条件で、簡単な命令をして短時間で教え込んだのだ。

そのお蔭で、命令を果たさないと折檻を受けると考える子から、

ご褒美を貰えると嬉しいから、褒められると嬉しいから命令を果たす子になった。

で、今は生理的に受け付けられない問題となつているため、ご褒美も褒められることも受け付けなくなっている。

ちなみに葵ちゃんも笹ちゃんも、いやいやながらも穿いてもらっている。

ただ、カミサマ化したらそれは反映されないみたいだけど。

玄関に追いつめられた杏ちゃんは既にカミサマ化しているが、こちらには二人カミサマ化した包丁さんがいる。

二人とも年少組だけど、相手が仲のいい子だから大丈夫。

怖がらせないようにゆっくり近づいて、あともう少して手が届くという時。

いきなり振り返って、玄関を止めている金具を切り裂いて無理やり道を作った彼女。

それに驚いて私達は再び逃げる杏ちゃんを追いかけるのが遅れた。

当然力ミサマ化してるし、嫌がつているから全力で逃げるだろう。しかもこっちにも包丁さんがいるから、それから逃げるためにもまた全力で逃げるだろう。

こうなると二次被害を考えないといけなくなる。

「葵ちゃん！ 笹ちゃん！ 出来る限り二次被害を抑えて追いかけて！」

「はいです！」「わかった！」

その合図で二人は風になった。

「大変ですね。マスター」

「あ、ルカ……」

溜息を吐いてその場でへばっていると、後ろから声をかけられた。

「とりあえず、3人とも散り散りにしてよかったですか？」

「え？ 何が？」

「彼女達がまたこちらに戻ってこれるとは思いませんが」

「あ」

そうだ。当然ながらも数ある家の中で私の家を見つけるなど、家の形すら見ていない彼女達が出るだろうか。

「それに加えて、田舎に置いておくにしても代わりに面倒を見てくれる包丁さんがいな

いじゃないですか」

「あ」

「とりあえず、もう一人呼び出すことにしましょう。でないと本末転倒ですからね」

「うん、そうだよね、うん……」

私は新しく包丁を用意して、別の紙に同じことを書いてすぐさま呼び出す。

「包丁さん、切ってください!!」

何の包丁を置いたのかは必至でやったから覚えてない。気配が一人増えて、目を開けると目の前にピンク色のチャイナ服を着た女の子がいた。

でも年長組を思わせる風格だ。彼女ならやってくれる! きつと! いや絶対!

「なんなのね、杏を呼び出したと思ったら今度は私を呼び出すとはね」

「お願いします牡丹さん! 今すぐこの家を覚えて、葵ちゃんと笹ちゃんと杏ちゃんを連れ戻してきてほしいんです!」

「ちよ、それは命令と違うね! それはまた別の話「それよりもお願いします!!」

額を床に打ち付けながらもお願いする。土下座とかスライディング土下座とかそんなの比じゃないくらいに。

どこかの名人さんも驚きの速度で頭を上下させる。

「そんなことやめるね! そんなことしても命令は変えられないね!」

「君が！ 行く、まで！ 叩く、の、を！ やめ、ない……!!」

一室に響く音。もう目が回って来た。額と鼻の頭が痛い。

「あーあー！ 解った解った！ 解ったね！ 探してくるからもうやめるね!!」
「本当!!」

顔をあげて飛びつこうとしたところで視界が揺らぎ、私はその場に倒れ込んだ。

「マスターー!!」

ルカの声が聞こえる。でももうだめかもしれない。うん。私、頑張ったよね……
私は、そんなことを思いながら意識を失った。



それから私が目覚めたのは、牡丹さんが皆を連れ戻しルカが皆に晩御飯を振舞った後だった。

皆で一緒に食べたかったな、と思いながら一人ベッドの上で食べていると、杏ちゃんが葵ちゃん、笹ちゃんと謝罪に来てくれたのと、牡丹さんが挨拶に来てくれたのが嬉しかった。

「ついに明日か……」

明日。旅行という名目でおじいちゃんの家に残りに行く。

それで、ある程度彼女達を現世でありながら現世から隔離できるだろう。

後は、私達がしつかり見て、守ってあげばいい。

それでいいのだ。うん。それでいいはずだから。

第15話 断てぬ縁 前編

Side 遥 優希

駅に着いたはいい物の、当の考案者である夏奈子がいない。

ついでに言うなら、こちらはリンとレン、そしてミクしかない。

理由は以下の通りだ。

ゆかり『お二人が戻ってきた時に誰もいないとなると、味気ないじゃないですか』

マキ『そもそも私達優希さんの両親のVOICEROIDだからね』

そういつた理由で二人は家に残り、結果としてリンとレン、ミクというこのまえと何ら変わらないメンバーで再び駅前に立って待ちぼうけ。

「夏奈子さんまだかなー」

「もうちょつと待ったら来るかもね」

「電車の時間は大丈夫でしょうか……？」

各自思い思いのことを口にする。

リンとレンは中学生らしく大人しく夏奈子の事を待っていたり、互いにお喋りしてい

た。

ミクは落ち着きなく回りを見渡したり、駅にある時計を見たりとそわそわしている。「ミク、何をそんなに焦ってるんだ？」

「いえ、ただ乗り遅れたらと落ち着いていられなくて」

「ここ最近ミクも大分、いやほぼ人間らしく個性が出てきた。変わったのは、春の時だったろうか。」

一人彼女が桜を見に散歩に行っていたときのことだと思う。

「心配するな。あいつのことだから本気で不味くなったら携帯に連絡してくる」「そうですか。ならよかったです」

ほっと溜息を吐いて俺の近くに歩み寄る彼女。

「元からそばにいたのだが、時計を確認したりあたりを見渡していたりとそれで自然と間が空いていたのだ。」

「最近いい方に変わったな。ミク」

「優希さんのお蔭です。それに、リンちゃんレン君、奏さんやそのミクさん、その家庭自身と触れ合ったお蔭です」

俺達だけでなく、奏達も少なからず影響している。

そしてそれに対して感謝の言葉を述べている。

「そうか、と言つて彼女の頭を撫でると嬉しそうに目を細め、えへへ、と声を漏らした。あー！ お姉ちゃんずるい！」

「マスター！ 僕も撫でて！」

二人に気付かれたので両手で二人とも頭の頭を撫でる。

二人はお互いに視線を送りながら笑っていた。

そんなことをしていると、やつと待ち人が現れた。

「ごめん優希、待った？」

「いや、それほど待つてない。話してたらあつという間だ」

「ルカさんご無沙汰してまーす！」

「ちよ、リン！ そんな言い方失礼だよ」

「いいのよレン。ミクも久しぶり」

「ご無沙汰してます。ここ最近はお忙しかったようで……」

「済んだことよ。とりあえずもうすぐ電車の時間だから、早く行きましょう？」

ルカの一言で皆が動き出す。

俺も向こうから連絡が来ず学校でもかなり忙しそうにしていたので、多少なりとも心配していたのだが彼女の家の前を通るたびに騒がしくも楽しい声が聞こえてきて、それが俺を安心させた。

「そういえば最近お前の家が騒がしかったな。あれはなんなんだ？」

「え？ あ。えつとねー……親戚の子達が遊びに来ててさー……あはは」

「そうか」

嘘丸出しの雰囲気だが、あながち間違っておらず詮索しない方がいいと思った俺は適当に聞き流すことにした。

「優希の方こそ、ゴルフデンウイークにお父さんとお母さんが帰ってくるんでしょ？」

「どうしてOKくれたの」

「ちよつとな」

「……ふーん」

夏奈子も俺と同じ何かを感じたのか、詮索はしてこなかった。

「……親戚の子の事、聞かないんだ？」

「聞いてほしいか？」

「できればね。話題切り出しやすいからさ」

「じゃあなんでいきなり俺を誘って行くこうと思っただ？ 親戚が来てるなら親族水入

らずで行けばいい物を」

「そ……そういう風に聞いてくるんだ」

「それに、その親戚の子とやらはどこにいるんだ」

それを聞いて急に口籠る彼女。流石に問いただし過ぎたか。

「あの、優希さん」

「ん？ どうしたミク」

少し不振がるような顔でこっそりと耳打ちし、俺を見るミクに対して違和感を覚える。

それも夏奈子の方に。正確には夏奈子の後ろの方に視線をちらちらと送りながら。

「えっと、言いづらい話なんですが」

「気にするな。大抵言いたいことは解る」

「あ、そうなんですか？」

「ミクははつきり解ってるんだろうけどな。俺は全くわからん」

「(なら言うんですけど……夏奈子さん、何か憑いてる感じがするんです)」

今もその場所に少し怖い物を見るような目でその方を見ている彼女。

挙動不審な様子からミクの言葉はすんなりと信じる事が出来た。

「ん？ どうしたのミクちゃん」

しかしそれが逆に夏奈子に違和感を覚えさせてしまったのも事実。

「あ、いえ。なんでもありません」

すぐさま俺の元を離れ、3人の会話に混じるミク。

その様子に夏奈子は首を傾げていた。

「で、質問には答えられるか?」

「あ、うん。それで親戚の子が田舎育ちだから、私のおじいちゃんの家に住まわせてあげようって思ってた」

「お前それ見捨てるのと同じじゃないのか?」

「それはないよ。その子達は自分達でしっかり生活できるもん」

「生活できる、ねえ」

どうも腑に落ちない点が多いが、納得しないといけない気がしたのでそれ以上何も言わないようにする。

首を突っ込んだら戻れない何かを感じたから。

「詳しい説明は向こうに行ってからするから。というわけで」

切符売場に到着して、会話は終了となった。

Side 水生夏奈子

「……親戚の子の事、聞かないんだ?」

妙なところで会話が途切れてしまい、私は自分の言いたいことが言えずじまいになっ

てしまった。

それでももう一回、ある程度詮索してくれそうな言葉を述べた。

「聞いてほしいか？」

「できればね。話題切り出しやすいからさ」

「じゃあなんでいきなり俺を誘って行こうと思っただ？ 親戚が来てるなら親族水入

らずで行けばいい物を」

「そ……そういう風に聞いてくるんだ」

「それに、その親戚の子とやらはどこにいます」

「そこまで聞いてくるか、というほどにまで聞いてくる優希。

流石に容赦ないなあ……

返す言葉に戸惑っていると、ミクちゃんが優希に耳打ちしていた。

何を話しているのかは解らないけど、彼女がちらちらと私の方を、私の足元の方を見るのに気づいてようやくどうしようということを話しているか解った。

「ねえ夏奈子さん、あの緑色の髪の子もしかして」

「うん。たぶん見えてるか、感じてるかのどっちかだね。どう思う？ 牡丹さん」

「感じてはいるけど見えてはないね。笹がずっと見てるね」

「……………」

「ねー笹ー。杏つまんないー」

昨日包丁さん達が散り散りになった時に解ったことなのだが、カミサマ化した包丁さん達は他の人達には見えていないみたいで。

ただそれでも靈感の強い人や何かある人は見えたり感じたりするのだろう。

その『例外』にミクちゃんが該当しているわけで。

「杏ちゃん、なら私達の乗ってる電車と追いかけてこする?」

「え? 追いかけて?!」

「「っ!」」

その言葉にそこにいる包丁さん全員が反応する。

「(うん。私達は電車……動く四角い鉄の塊に乗るから、それを杏ちゃんが追いかけるの。もちろん、止まったらその近くで待っててね?)」

「夏奈子さん、それはあんまりやめておいた方が……」

「(でもこうでもしないと杏ちゃん退屈だし……)」

「で、私が見る役になるわけね。こっちに来てこういう役回りばっかりなのね」

「(あ、あはは……牡丹さん、お願いします)」

「そもそも夏奈子は何で私に対して敬語なのね。私達より年上なのね、甘藻と同じ年なのね」

どうしてそこまで解ったのだろうか。呼び出された包丁さんは呼び出した者の情報を全て見透かす能力でもあるのだろうか。

「（それはね、精神年齢、かな）」

「……………」

それで妙に納得したかのように、呆れるかのように、私に話しかけてくることはなかった。

とりあえず、さすがにミクちゃんの視線が気になるので話しかけることにした。

「ん？ どうしたのミクちゃん」

「あ、いえ。なんでもありません」

そうやってミクちゃん向こうで話している三人の元により、会話に混じる。

「で、質問には答えられるか？」

「あ、うん。それで親戚の子が田舎育ちだから、私のおじいちゃんの家に住まわせてあげようって思ってた」

「お前それ見捨てるのと同じじゃないのか？」

「それはないよ。その子達は自分達でしっかり生活できるもん」

「生活できる、ねえ」

優希の問いに真剣な瞳で答える。

私のやっていることは正しいのだと自分に言い聞かせて。

本当に正しいかどうかは、そうではないのだろうけど、今できる最良の策だと私は思っている。

「詳しい説明は向こうに行ってからするから。というわけで」

今ここで説明するわけにはいかない。でも、いづれ説明しなくちゃいけないから。

切符売場に到着して、会話は終了となった。

S i d e 初音ミク

皆切符を買って新快速というタイプの電車に乗り込む。

優希さんいわく、このタイプの電車は主要の駅にしか止まらないけれど、そこにしか止まらないから普通電車より早く目的地に着くらしい。

確かに一々駅に止まっていたら、減速、停止、発車、加速を何度も繰り返して、ずっと走っている物より遅くなるはず。

そんなことを考えてずっと電車に揺られる。優希さんの計らいで私は率先して席に座ることができた。

今でも、やっぱりつり革には抵抗を覚える。目の前に立っている優希さんも両手でつ

り革を持っていて、身の潔白を証明している。

ヘッドフォンからは最近の私達の曲が聞こえてくる。コメント、動画は頭の中で見ることが出来るから退屈はしない。

見ているのはもちろん週刊VOCALOIDランキング。最近の人気曲が分かるからだ。

歌えない私でも最近の曲のチェックは欠かさない。特に好きなプロデューサーさんの曲は定期的に検索をかけて新曲が来ていないか調べている。

誰が好きか……それは秘密。

「あ、あの人の新曲一位になってる。よかった」

それで頬が少し緩みながらも、夏奈子さんの方を見る。

今は感じないけれど、駅では確かに何かいた。でもそれが何かわからない。

当の本人は今外を見て微笑んでいた。まるでそこにある何かを見ているかのように。

私もその方向を見てみるけど、何も無い。すごい早さで流れ去っていく光景だけ。

でも夏奈子さんはそこに何かあるように笑っている。

それが不審に思える。無論、夏奈子さん自身が不審ではなくその行動がなんだけれど。

「ミク、もうすぐ着くぞ」

「あ、はい。……あつ」

優希さんの言葉で立ち上がった時少し車内が揺れた。カーブに差し掛かったんだらう。

でもそれが原因でバランスを崩す。

「おっと」

軽く、優希さんにぶつかってしまふ。偶然ながらもしっかりと受け止めてくれた。

「ありがとうございます」

「いや、気にするな」

やっぱり、優希さんには感謝してもしきれないことばかりだ。

電車を降りて駅から出る。丁（ひのと）と言う場所らしい。

私達の住んでいる場所と何ら変わらない田舎の光景が広がっていた。

その変わらない光景を割とすんなり受け入れられた私は優希さんの元に駆け寄ろうとする。

何故そうするのかと聞かれれば、出来るだけ彼のそばに居たいからだ。優希さんの傍なら私を守ってくれる。彼の手の届く範囲に居れば、私はもつと素敵な私になれると信じているから。

その一歩踏み出した直後。

「……………」

乗り込む駅で感じた時と同じ、何とも言えない感じが。

そう、周りの空気の温度が下がったような、ヒヤッとした感じ。

ほんのちよっぴり。でもそれが大きな差に感じたのはどうしてだろう。

私は少し怖くなってその歩みを速めた。

S i d e 水生夏奈子

一番にゴールしたのは杏ちゃん。誰も見てないのを確認してから頭を撫でて褒めてあげる。

二番は葵ちゃん。三番は笹ちゃん。最後は牡丹さん。

皆にお礼の言葉を述べて、私達はバスに乗り込み、出来るだけ田舎に向かう。

そしてまた包丁さんの皆はバスとの追いかけて。

「あ、お祭りやってる！」

リンちゃんの声に反応して私も含めて皆が窓の外を見る。

点々と続く出店増えていき、ある神社を中心に賑わっていた。

「丁神社だって。神社だから何かを祭っているのかな？」

「しかし春に祭か。珍しいな」

「ですね。普通は秋や夏ですから」

俺の知ってる範疇だけだな、と優希が続ける。

丁神社……たぶん、うん。きつと。同名に決まってる。

おじいちゃんの故郷が丁町だったことも知ってた。

でもそれはただの同名の場所で、関係ないと思っていた。

でも、包丁さんはこうして今も存在している。なら、あの丁町があってもおかしくはないのだろうか？

そんな疑問と不安が私の頭をよぎる。

そう。ここがああの丁町だったとしたら……と。

S i d e
???

「あれ？」

神社がお祭りで賑わっていて、いつも以上に忙しいこのお仕事。

早く休み時間貰えないかなと思いつつも頑張ってお手伝いをしていると、不意に何かが目映った。

鳥居の向こう側。何か走り去っていった。

それも4つ。黄色の何かと、緑色の何か、青色の何かに、桃色の何か。

あまりにも速過ぎて何か解らなかつた。歩道は人で結構埋まっているというのに、それを難なく風のように過ぎ去って行った何か。

その何かに対して私は一つ思い当たる節があつた。

切つても切り離せない。

気になつて見に行つてみると、遠くの方で一台のバスを追いかけるそれらが、どこかに向かつているのが見えた。

「どうした美春、急に走り出したりして」

「お兄ちゃん、あれ見て」

一緒に手伝つてくれていたお兄ちゃんが私の奇行を疑問に思ったのか駆け寄つてきた。

私はバスに向かつて指を指す。

「! ああバスを追いかけてるのか?」

「でもおかしいよね。普通ならあんなのすぐに追いつけるのに……」

もしあれが包丁さんであれば、バスなんて一瞬で追いついてしまうというのに、4つの影はまるで遊んでいるようにそれを追いかけている。

バスが信号に捕まった。でも中に乗り込もうとせずに4つの影は傍に集まっていた。そのお蔭でその4つの影が誰か解った。

「包丁さん！」

それを確認した私達は駆け出していた。

「待て美春！ タクシーを捕まえる！」

「解った！」

何故バスを追いかけられるのか、それは呼び出した本人がいるからだろう。

でも乗り込もうとしないのは腑に落ちない。

でも、現に呼び出した人が居る。それも、四人も同時に。

お兄ちゃんがタクシーを捕まえてくれて、乗り込む。

「あのバスを追いかけてくれ！ 早く！」

なんの躊躇もなくどこかの刑事ドラマで見たような言葉を吐き捨てるお兄ちゃんに驚きながらも、運転手さんは車を出してくれた。

信号はもう青に変わった。またバスが、包丁さん達が動き出す。

どうして……どうして……包丁さんが？

疑問が、私の頭の中を駆け巡った。

第16話 断てぬ縁 中編

S i d e 水生夏奈子

バスを降りて、しばらく山道を進む。

もうあの頃の小さい私じゃないから、そんなに歩かないでもすぐにつくだろう。そんなことを思っていた。

・
・
一時間経過。

まだおじいちゃんの家は見えてこない。

本当に山を登っているような細く整備されていない道だ。

「ねー、夏奈子さん。まだー?」

「リン、もうちょっと我慢しろ。疲れたなら背負ってやるから」

「はーい」

変わらない山道に退屈したのかリンちゃんの声が聞こえてくる。

「ここじゃ電波が届かないから、地図を検索できませんね…」

「ですね…それに紙の地図も持ってきてないし」

「そもそもここって地図に載ってたっけ? という疑問を頭に考えながらまだまだ進む。」

本来の目的である包丁さん達はと言うと。

「追いかけてここ飽きたから鬼ごっこやろー!」

「本気の鬼ごっこはなしだぞ!」

「解ってるよ! でもカミサマでやろ!」

「杏、少しは落ち着くです!」

「やっぱり杏達は落ち着きが無いのね。仕方ないね」

生い茂る木々の上を飛び回ったり、山の斜面を駆け上がったりと、カミサマ化しているのをいいことに、自由気ままに走り回っていた。

二次被害はないだろうと思って私は歩を進めていたけれど、それは起こった。

「「あ」」

三人の声が聞こえて何かと思えば、倒れていた丸太がこっちに向かって結構な勢いで滑り落ちてきた。

おそらく誰かが足場に使って、飛び上がった衝撃で動き始めたのだろう。

釣鐘を突く撞木のごとく。長さ4 mぐらい、太さは直径30〜40 cmといったくらいか。

ジャンプすれば飛び越えられそうな気もするけど、長さからしてそれは無理だし、何より当たればそのまま下の斜面に持つていかれる。つまりは……

まだ遠くて私とルカしか気づいていないけど、その丸太は確実に私達6人の内の一をを狙っていた。

「優希！ 危ない！」

直感で出てきた名前を叫ぶ。彼は今最後尾のはず。

その声に反応して優希があたりを見渡し、その存在に気付く。

すぐにその場を移動してよけようとするけど、予想外のことが起きた。

丸太が木に当たって進路が変わる。

既にその時には皆気づいていたけれど、急な出来事に流石の優希も動けない。

しかもそれが運悪くさっきの場所から移動した彼の場所と重なっている。

もうよけられない。

駄目だと思つて思わず目をつぶる。この後起きるであろう出来事を見たくないから。

小さな轟音が聞こえて、リンちゃんの泣き声が聞こえる。

私は最悪の出来事を想定する。怖くて目が開けられない。

足に力が入らなくなつて、その場に座り込む。

私のせいだ。

私のせいで優希は……

「おい、勝手に人を殺すな」

ああ、優希の声が聞こえる。きつと幻聴だろう。それまでに今の事実が信じられないのだろう。

そう、無事だつたらこう言つてくれるはずだ。

「とりあえず目を開けて現実を見ろ。話はそれからだ」

あれ？ 何かおかしいよね？ そこに優希がいるみたいに思えてきた。

目を開けると、優希が立っていた。リンちゃんが泣きついていたり、無事なことを実感する。

「えっと、怪我とかしてない？」

「ああ。強いて言うなら寿命が5年ぐらい縮まったぐらいか」

「あ……：そうなんだ……」

無駄に脱力感。でも生きててよかった。

立ち上がろうとして、違和感。立てない。

「何してるんだ」

「あはは……腰ぬけちゃった」

「……………」

「て、テヘペロー☆」

「はいはい、とりあえず背負ってやるから」

目の前でしゃがんで両手を出す優希。

「大丈夫？　ここ山道だよ？」

「この旅行の考案者兼目的地の主が何を言う」

「だよ。うん。ありがと」

お言葉に甘えて背負ってもらおう。

嬉しいけど、あの間は何が起こったのか気になった。

「ねえ優希、何があったの？」

「ルカが助けてくれた、と言いたいが、ルカともう一人の誰か。と言った方が正しいな」

優希の話によれば、自分ももうよけられないと思つて諦めたらしい。

で、いきなりルカが飛び出し空中横蹴りをして丸太を吹き飛ばしたそうで。

「ルカ……ありがと。でもそんなことできたんだ？」

「あんまり嬉しくないですけどね。でも流石に今回はこの身体能力と力に感謝しない

と」

「足は大丈夫？」

「怪我をすればまたその部分を再構築すれば大丈夫です」

「そ、そうなんだ……」

「なんだかルカが色んな意味で人間じゃないなあ、と思った瞬間であった。

「あれ？ もう一人の誰か？」

「あの丸太を見てみる」

「優希の視線の先。私も背負われているから指を指されずにでもどこにあるのか解る。

ルカが蹴り飛ばしたであろうそれが、綺麗に縦に割れていて綺麗な木目が顔を覗かせていた。

「あいつを見てくれ、あれをどう思う」

「すぐく……綺麗です……って！ やってる場合じゃないよ！」

「乗ったのはお前だろうが。それはさておき、あれは見るからに不自然だ」

「ルカが蹴った時に綺麗に割れたとか？」

「竹みたいな繊維構造をしているわけがないだろう。針葉樹でもな。あれはあからさまに

『切られた』と見て間違いない」

その言葉を聞いて辺りを見渡す。『切られた』と言えば包丁さん。

上の斜面で3人に説教している牡丹さんが居て、きつと彼女が助けてくれたんだろう

と予想する。

「あんまり驚かないんだな」

「え？」

「お前なら言葉を失うぐらい驚くと思ったが」

「なんとというか、脱力？　優希が助かってて、よかつたっていう気持ちだけで感無量っていうか」

今のは私でもうまく誤魔化せたというか、本心だったから正直包丁さんの事を考えてなかつた。

心底安心したら、やつぱりというかなんというか、体を完全に優希に預ける。

今ある彼の存在を感じていたい。そう思って顔を横に向けて、一番楽な体制になる。

このまま寝てしまってもいいくらいに。

「重くない？」

「重くても重いと言わないのが男だと思うが？」

「それってどういう意味ー？」

「軽いが、正直軽すぎても健康体ではないからな。最近忙しくてロクに休んでいないだろぅ？」

「んー、そうでもないよ？　親戚の子が居てくれたし」

確かに体は疲れてるかもしれないけど、気疲れはない。

二人の面倒を見るのは私としても楽しかったし、何より二人の遊ぶ姿がやっぱりその年相応の、それも昔の子供の遊びだったから本当に微笑ましかった。

「ところで優希」

「どうした？」

「背中気にならない？」

「またネタでも振ってほしいのか？」

「うん」

「……はあ」

諦めたように溜息を吐く優希。

やっぱりネタは、前置きになるネタが重要だよな。

それ単体で意味を成すものもあるんだけど、やっぱりこういうのは前座がないと。

「む…胸が当たってるんですけど」

「当たてんのよ」

うん。これでよし！

S i d e 遥 優希

夏奈子以外の女性陣に対して、あのネタを使うことはかなり抵抗があつたが、夏奈子の言葉でみんな納得して俺に対しては何も思っていない様子。

そこから更に10分歩き続けていると、景色が開けて盆地に出た。

「「わあ……い……」」

初めて見る昔の日本のような情景にリンとレン、ミクが驚く。日が傾いて赤色に染まる空が一層美しく魅せる。

俺の場合は過去に、小学生くらいの時に一回しか来たことがないが、当時とあまり変わらない様子に少し懐かしさを覚えた。

かやぶき屋根の大きな家が正面に見える。その右隣は長屋のように見えるが、独特の匂いからしてたぶん牛舎だろう。

それに、この匂いがする時点でまだ中に牛はいる。

家の左隣には土倉が建っている。昔は夏奈子共々おじいさんが入れてくれることもなく、入ることも許されなかった。

「預かった土地は定期的に整えないとね。牛もまだ居たり、農作物も作つてたりするか、結構な頻度でお父さんとお母さんはここに来てみたい」

「それでも並大抵のことじゃ維持は出来ないだろ」

「うん。だから親戚の人達と一緒にね。最近じゃ二人とも仕事が忙しくなって手付かず状態だったけど。GWに私も一緒に整えてつてする予定だったんだ」

「だが、その親戚の子とやらがここに住むために、代表して親じゃなくお前がここに来たと」

「うん。ま、詳しいことは二人きりになってから話すよ」

皆の前で話さないということは、何か裏でもあるのだろう。

「とりあえず、家に行こ？ 歩いてばっかりだとみんな疲れただろうし」

「皆流石に山道は初めてだったわね。私は何回か上ったことはあるけれど」

「もう足が棒になりそうだよー」

「だらしないなあレン。あれくらいどうってことないのに」

「あはは、私ももうそろそろ限界かな……」

各自の言い分を聞いてから、俺はもうひと踏ん張りどと気合を入れなおした。

S i d e 水生夏奈子

家に着いて持つて来ていたお茶を皆に振舞うと、私は一人ある場所へ向かった。

家の裏手にある小さな山。そのてっぺんにある開けた丘。

「……………」

そこには小さいながらも、綺麗な、見事なまでに直方体の庵治石製の墓石があった。庵治石は、最高級の墓石材として有名な物らしい。

おじいちゃんがなくなる前に自分で現地に出向いて選び、ある人に作ってもらったらしい。

そして、自分の名前は自分で掘ったそうだ。

そういう事を、おじいちゃんの埋葬の時にお父さんから教えてもらった。

「おじいちゃん、ただいま」

柄杓と水桶でしっかりと洗ってあげる。汚れは一見してついてないみたいだけど、念入りに。

静かに手を合わせて、目を閉じる。

いつも見守ってくれてありがとうございます。お蔭様で今も元気に暮らせています。今は、安らかに眠ってください。

肉体が滅んでも、魂はどこかで見てくれていると思うから。

そして最後に。

「おじいちゃんの家を、使わせてください」

そうやって私は目を開け、振り返ると包丁さん達が立っていた。

ただ違和感。それは皆人間の姿をしていたから。

Outside

「なるほど、ここだったのね。道理でこの姿で居やすいわけね」

妙に納得したかのように首を縦に振る、牡丹。

「またここだー！ いっぱい遊べるー！」

辺りを駆け回り飛んだり跳ねたりしてはしゃぐ、杏。

「懐かしいな！ やはりこの空気はおいしい！」

深呼吸を繰り返して仰向けになって倒れる、笹。

「ここは懐かしい香りがするのです。だから、一番過ごしやすいのです」

開けた場所から見える景色を見つめ笑顔を見せる、葵。

「ど、どういふこと皆！」

夏奈子は皆知っている口調に戸惑い声を荒げる。

「「それは椿（ねえ）（つつき）に聞いてからのお楽しみ（ね）！」」

どうやら真実は、包丁さんのリーダー格である椿から聞いた方がよさそうだ。

まるで面白い物を見る目をする4人に対して、夏奈子はそう思うのだった。

Side 遙 優希

夏奈子に呼び出され、ある一室に入る。そこでは彼女が正座して、その前に何かを記した紙と一本の包丁が置いてあつた。

まるで時代劇で見る、切腹する時のような物が頭をよぎつたがそれはないとすぐに思考を閉じた。

その包丁と紙を中心にするように、俺は夏奈子の前に座る。

「で、なんなんだ。話って」

「親戚の子の事なんだけどさ」

「ああ、あの変わった子達か」

夕方夏奈子が一人どこかに行つたと思えば割とすぐに戻つてきたので、どこに行つたのか聞こうとした時。

彼女の後ろに見たこともない女の子達がいたのだ。

『紹介が遅れちゃつたけど、この子達が私の親戚の——』

名前までは詳しく覚えていない。あまりに突然の出来事だったからだ。

それこそ、ここに向かう時に遭つた丸太の出来事並みに。

ちなみに今は今は黄色の少女、緑の少女、青の少女とリンが追いかけてっこをして遊んでいる。

ルカとレンとミクはチャイナ服の女性（と言ってもまだ中学高校生ぐらいだが）とお茶を交えて話していた。

「実は親戚じゃないんだ。血も繋がってないの」

「それはそうだろうな」

「……で、今からやることちゃんとしてね」

「目を閉じて。いいっていうまで目を開けちゃだめだよ？」

雰囲気が真剣な物に変わる。

俺は言われるままに目を閉じた。

それは何かの儀式の様で。

やってはいけないのに、何故か大丈夫な気がした。

「包丁さん、切ってください」

その言葉はどこかで見たことがある。

その言葉を聞いた瞬間、思わず顔をあげそうになった。

しかしそれに耐えて待つ。彼女がいいと言うまで。

「いっよ」

「っ！」

とつさに顔を上げるとそこにあつたはずの包丁が無くなつていた。

「優希にはたぶん見えなと思うけど、どう？」

「何もいないな」

「そつか。ならこれならどう？」

暫く待つと、目の前。本当に目の前に白いワンピースを纏つた少女が立つていた。

「これは流石に見えるよね？」

「ああ、よく見える。なるほどな」

「？ なるほど？」

青の少女に何か違和感を覚えていたが、今現れた少女と夏奈子が呼び出す際に口にした言葉で納得がいく。

「まさか、ば「ダメ！」」

いきなり言葉を遮られる。

「なんだ、椿つて言つた方がいいのか？」

「うんそう。そうじゃないと帰っちゃうから」

夏奈子はある程度話し始めた。自分のしていることの意味と理由を。

そして最後にこう締めくくつた。

「って、よく知ってるね。包丁さんの事」
「俺も某動画サイトと静止画投稿サイトで見たことだけはあるからな」

第17話 断てぬ縁 後編

S i d e 水生夏奈子

「へえ、今までこんな風に書いて呼んでたんだ」

椿ちゃんが感心したかのように紙を手にとって読み始める。

簡単な話は夢の中で聞いているだろうけど、実際に見たことはない。

だからそれがより一層感心を高めたのだろう。

「それで私に何か用？ 最近ペースがおかしいようだけど」

「あ、それなんだけどね。この家……この場所について何か知ってないかな？」

「この場所……ああ、なるほど」

牡丹さんと同じような反応をして頷くと、彼女は話し始めた。この場所……いや、正確にはこの場所の主について。

「ここには先祖から続く力を持った神主の家系が居て、その家系はこの町に私達の存在

を広めていたの」

「その家系はあくまで私達を、『病を切る存在』だということを公言した。包丁を御神体として丁神社を無病息災と謳い建てた人物もこの家系のだと、その末裔が話していた。無論、包丁供養祭……今も行われてるみたいね。には積極的に参加していたようだけど」

「ただその末裔の祖父が神社を移したことで、そのの神主にはならなかったの。力もあつたのに自ら身を引いた。この地に残りたいとね」

「その代わり若いうちは代わつた神主の代わりに私達を呼んで、当時不治の病と言われた病気を切っていた」

「流石に血は薄れていくし、代々生まれるのは男で呪術師としての素質は落ちていったのだけれど」

「ちよつと待つて、それじゃあ元々丁神社はここにあつたつてこと？」

「そう。立地から参拝客が徐々に減つていったのと、土砂崩れとかの天災の関係を考慮して場所を移したらしいわ。神社は神の社と書くから、神の拠り所が失われたら元も子もないと思つたんでしようね」

「で、その末裔は自分の家系が呪術師であり神主であつたことを隠していたの。あくまで自分の子に自分の望む道に進んでほしいとね」

「だからこの地は丁という町の中では私達と関係が濃い場所でもあるわ」

一通りの話を聞いて、私はまた一つ疑問が浮かぶ。

「ねえ椿ちゃん、その末裔って」

「そもそもあなたに会った時に気付くべきだった。普通の真人間が私達の世界に夢であらうと干渉することがあるはずがないって」

「貴女がその末裔の孫ってことをね。代々受け継がれた水生の血統と素質を見事に継いだ人間だと」

男は肉体系が優れており、女性は精神面が優れている。

それだからか、昔から巫女という存在や神子という神聖で神に近い存在は女性と決まっていた。

また、生贄で女性が多いのもそんな意味があるのだと思う。

代々男の家系と言っていたけど、確かにそうでおじいちゃんはお父さん方のおじいちゃんなのだ。

その中で私が女として生まれたから、そ呪術師としての素質もある程度回復したのだろう。

「で、椿。単純な質問なんだが、水生家とはどれくらいの付き合いになるんだ」

「覚えてないわ。何せ大分昔からだもの」

それがこの地で何度も行われていたのだ。人とカミサマの交流が。

「自分の本当の立場が解った？ 水生夏奈子」

「……………」

私のご先祖様は代々神主の家系で、呪術師としての素質もあつて、それが今の私にも宿っている。しかもご先祖様達は包丁さんと密に関係している。

こんなことがあるだろうか。こんなことが。

自然と頬の筋肉が緩む。口角が上がる。楽しい。嬉しい。これ以上嬉しいことがあつただろうか。

私の今までやってきたことはご先祖様のやっていたことと同じで。

お父さんは知らないけど、今はいないおじいちゃん達は同じようなことをしていたのだ。

厳密に言えば違うんだけど、でも同じこと。

私はご先祖様達やおじいちゃん、償うことが出来なかつた罪を清算している、

「……………よかった」

言葉に出して実感する。私は彼女達を守る力がある。

これからも彼女達を、包丁さん達を見守ることが出来る。

これで私の包丁さん達を救い続けることが出来る。

それは自分の意志であり、使命なんだ。

「水生家の意志が、包丁さんの無意識が！ 救済を望んで「こんなところでもネタはやめ

ろ!!」

優希に思いつき叩かれました。

「でもこれで正当な包丁さん達の後継者って感じだよね」

「良かったですね」

「うーん、もうちよつと盛大に驚いてよー。ルカはさっぱりしてるなー」

「そもそも何でもない人がカミサマを4人も同時に呼び出せる時点でおかしいんです。そうなれば非科学的でもそういうことは少しでも疑いますよ」

優希に叩かれた患部をルカに冷やしてもらいながらも、居間でお昼寝している葵ちゃん、と笹ちゃん、杏ちゃんにリンちゃんの様子を見ていた。

なんでも葵ちゃんの話の聞くと、向こうでは『お昼寝同盟』なる物があるらしく、その会長が彼女らしく。

笹ちゃんも同盟の一人なんだけど、杏ちゃんは違うらしい。

ちなみに包丁さんである3人は懐や帯に包丁を入れて隠している。

ただ、リンちゃんも含めた4人は流石に疲れたのか、運動して火照った体に、風が通り抜ける居間の、柔らかい畳という魔性の組み合わせによってすぐに眠ってしまった。

流石に皆そのままでは寒いだろうし、夜も近いから薄い掛布団はかけてあげたけど。

「よく遊んでよく寝る。発育のいい子供の代表的な例ですね」

「包丁さん達は成長しないけどね」

『すみませ〜ん!』

「あ、は〜い」

と、そんな何気ない会話をしていると玄関の方から声が聞こえてきた。

女の子の声だ。少なくともミクちゃんの声じゃない。そもそもミクちゃんならそんなことを言わずに入ってくるはず。

普通ここらへんに来るのはお年寄りのはずなんじゃ……と思つて私は玄関に向かう。

「どちらさまですか〜?」

声をかけながら玄関を開ける。都会の方じゃそれはいけない事なんだけど、田舎だから変な人はいないだろうと思つて。

そこには茶髪の女の子が立っていた。見た感じ中学生から高校生ぐらいだろう。

一見すると普通の女の子、のような気がした。彼女の発言を聞くまでは。

「あの、包丁さんっていますか?」

「えっ!？」

思いつきりストレートだったから、逆に予想外で驚いてしまった。
それが大きな失敗だと気付くまで後数秒。

S i d e 遥 優希

一方その頃、俺は椿、牡丹、ミク、レンと夏奈子の祖父の墓参りに来ていた。
何故包丁さんのこの二人がついてきたのかは全くの謎である。

俺がどこに行くと言ったわけでもないのに付いてきた。

「夏奈子が未裔、ねえ」

「腑に落ちない?」

「別に? 俺はそんなこと気にはしない。その時はその時さ」

「マスター、未裔ってどういうこと?」

「いや、夏奈子のやってるゲームの主人公が伝説の勇者の未裔だって話」

「へえ〜」

「あの、牡丹さんでしたっけ……?」

墓参りを終えて戻ろうとすると、ミクが口を開いた。

言葉通り視線は牡丹の方を見ている。

「そうなのね。それがどうかしたね？」

「あの、この度は優希さんを助けて下さってありがとうございます」

ペこりと、責任を感じているようなそんなお辞儀。

それに対して大らかに笑う牡丹。

「気にすることはないね！ 当然のことをしただけね」

「でも、あのままだと優希さんは」

「確かにあのままじゃひどいことになってたね。でも私達も人が死ぬのは見たくないのね。こればかりはたるいなんて言ってる場合じゃないね」

「牡丹、私に来る前に何があったっていうの？」

「あー、それは」

彼女が椿に説明してる時、一つの影がこっちに向かってきてるのが見えた。

遠くて姿はすっかりと捉えられないが、進路方向からしてこっちに向かってきているのは解る。

「レン、見えるか？」

「あ、ちよつと待って、どこ辺り？」

「上つてきた道の方を見ればいい」

「解った」

少し景色に見入っていたレンの反応が少し遅れた。

それが別に何と言ったことも起こさず、彼は上がってくる何者かを捉えていた。

「身長はマスターとおんなじくらいかそれ以上かな。男の人みたい」

「ならざつと高校生か高卒だろうな。でも誰が」

「……………」

椿がへえ、と面白い物を見つけたような顔をする。

「椿、知ってるのか？」

「ええ、ま、簡単に話したら夏奈子と本質的には同じだけど、過程がまるで違うわ」

「そうか。…………本質は同じなんだな」

なら、包丁さんのことを知っているだろう。

少なからず俺より知識はあるだろう。

なら、実際に夏奈子と合わせて話し合いの場を持たせた方がいい。

さてどうしたものか。

「私達は…………居たほうがいいかしら？」

「五分五分つてところねー」

「だな。俺が説明できなくなった時の代役を頼む。でも出来るだけ夏奈子の方に陽動し

てくれ」

「解ったわ」「解ったね」

「マスター、僕達は」

「お前達には後で説明してやるから、何もいうな。何を疑問に思ってもな」

「解った」「解りました」

さて、相手がどう切り出してくるか……それが勝負の分かれ目かもしれない。

坂道を息を切らせて上がってくる青年。彼はこちらを見て安心したような疑問が晴れたような表情をしていた。

「あんたが『包丁さん』を呼び出したのか？」

「生憎だが俺じゃない。この場所の主だ。詳しい話はそいつから聞いてくれ」

「でも……」

ここで彼がある包丁さんを捉えた。椿だ。

先ほどまで俺の後ろにいて死角になっていたのだろう。

「久しぶり。元氣してた？」

「どうしてその姿なんだ？」

「ここは『特別な場所』なのよ。だから何の苦も無くこの姿で居られるの」

そう言つて笑みを浮かべる彼女。

その話を聞いて相手は何か思うことがあったのか、考え始める。

そんな反応をするということは結局、かなりこの町の事、包丁さんのことを調べていると見る。

「もう一つ聞きたい。なんでお前達はあの時バスを追いかけていたんだ？」

「それは私が答えるね。椿はその時点で呼び出されてないね」

牡丹が名乗り俺達の前に出てくる。

「この男が言った通り私達全員を呼び出したのは、この場所にいた者の子孫なのね。その子孫の考案でただ単に追いかけてっこしてただけなのね」

特に年少組は動き回るのが好きだからねー！ と付け足す。

確かにそれは事実なのだが、一つ俺は相手の発言で違和感を覚えた。

「ちよつと待て、あんたはカミサマの包丁さんを見ることが出来るのか？」

「？　そういうあんたはカミサマの包丁さんが見えないのか？」

「まあ、そういう事だな。呼び出してないんだから仕方ない」

「なら本当みたいだな……その呼び出した本人はどこにいる？」

「あの家にいるはずだ。勝手に移動してなければな」

もう日も隠れ始めてあたりが暗くなってきた。

「ここまで田舎だと、鹿などの野生動物が山から下りてきてもおかしくないので、話が

まとまったところで、その包丁さんをよく知る人物と共に山を下りるのだった。



家に戻ると、知らない人物が一人紛れ込んでいた。

「あ、優希お帰りなさい。その人は？」

「それはこっちのセリフだ。先に説明すると包丁さんのことを、一番よく知ってる人物とでも言っておこうか」

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は真田優秋（さなだ ゆうし）。でこっちが妹の……」

「真田美春です」

「俺は遥優希だ。よろしく」

「私は水生夏奈子。ここの家はおじいちゃんの家だけど、包丁さん達の新しい居場所になったらしいなって、それでこっちに来ました。よろしくお願いします」

「どういふことだ？」

「あ、お兄ちゃんその説明は私が……」

美春と名乗った少女は優秋と名乗った青年に話をしていった。

「夏奈子、あの子は？」

「あれ、優秋さんと知り合ってたんだ。優秋さんの妹さんだよ」

「そうか。で、何を話してたんだ？」

「うん、ちよつとね。あ、美春ちゃんも優秋さんももう遅いから泊まっていつていいですよ？」

「あ、いいんですか？」

「……それならお言葉に甘えさせてもらって」

確かに外は暗くなっている。今から帰ろうと思っても、逆に危険だろう。

「で、話を戻して、包丁さん達のことを話してたんだ」

「いや、それは解るが」

「それでね、包丁さん達って病気も切ることが出来るの」

「話には聞いたことがあるな。……で？」

「何の命令でも呼び出せる状態でほつといたら危ないって私が代わりに呼び出してるんだけど、逆に本当に必要としている人達からしたら呼び出せないと困るから、つていうのが美春ちゃんの言い分だったの」

「……でも、それだどうしようもないじゃないか。命令は選べないんだぞ」

「そこで、丁神社にそういう願掛けをした人を助けるつていう話をしたの」

「それなら確かにそういうことしか持ち出さないな。それに命令も選別できる」

俺達の知らない内に創造のつかない域の会話が行われていたことに感心するも、ふと周りに包丁さんがいないことに気が付く。

「んー、わかめないのかしら」

「椿、少しは我慢するね。ここから海も店も遠いね」

「椿さんはわかめが好きなんですか？」

「好きとかそんな域じゃないのね。椿のわかめに対する愛は尋常じゃないね」

「……………」

椿と牡丹、ミクが台所に立って晩御飯の支度をしていた。

「リンー！ 起きないと夜寝られないよ！」

「うーん、後5分……………」

「皆も起きないと夜寝られないから起きなよー！」

「うーん、です……………」

「ぐぬぬ……………」

「むにやむにや……………」

レンはまだ居間で寝ている4人を起こそうと必死になっていた。

家族が多くなると、こうも賑やかになっていいものだ。

俺も、家に帰ったら父さんと母さんに謝って、温かい家庭に居たいと思うのだった。

第18話 子供は風の子

Side 鏡音リン

翌日。

美春ちゃんと優秋さんが帰った後、私達は夏奈子さんの親戚さんが実は包丁さんだという話を聞いた。

包丁さんっていうのはよく解らなかつたけど、簡単に説明してくれたから私でも解つた。

……別に頭悪くないもん。いつも解らないことあつたら検索かけてそのこと覚えてるし。

その後皆で自己紹介して。

というわけで自由行動になつたわけなんだけど、さつそく遊ぼうにも皆朝ご飯を食べた後だからゆっくりしている。

田舎だから尚更なのかな。時間あんまり気にしなくていいし。

私達は内蔵時計ですぐに時間が分かるから問題ないんだけど、これが無かつたらどう

だつたらうか。

もしかしたらこんな田舎でも時間を気にせずにいられるかも。

でもいつもあつたものが無くなるってなんだか不便。

何気なく使つてた検索機能使えないんだもん。

山菜採りとかやってみたいけど、知識がないから毒草とかも採っちゃうかもしれない。

色んなことを考えながら縁側で足をぶらぶらさせていると、誰かが上着を引つ張つた。

「ねーねーリーちゃん、杏とあそぼー！」

「り、リーチャン？」

「うん！ りんちゃんだと一緒になるから、リーちゃん！」

ああなるほど。私の事を言ってるんだ。一応私の名前は呼べるけど、それだと被っちゃうから別の言い方してる。

かなり幼い子だと思つていたけど、そうでもないみたい。

「いいよ！ リンお姉ちゃんとあそぼつか！ 何して遊ぶ？」

「鬼(おに)っ！」

「鬼(おに)っ！？」

昔の子の遊びと言えば当然と言えば当然だけど、二人でやる鬼ごっこなんて楽しいの
だろうか。

私が捕まえる相手は杏ちゃんしかおらず、捕まえたらそこで交代、私が逃げる番。
杏ちゃんもおんなじことが起きている。

「でもあおつちも、さーちゃんも、たんたんも、つつきーもやらないからつまんないよー」
「うーん、どうしたら面白くなるかな……」

ここでふと思う。鬼ごっこじゃなくてもいいんじゃないかと。

おいかけっこや鬼ごっこは本当に遊びの根幹。時間をかけていろんな遊びに派生し
ていった。

ならその派生した遊びでいいんじゃないかと。

「なら缶けりしよー」

「缶けり？」

聞いたことがないのか杏ちゃんは首を傾げる。

まだ彼女は幼いから、とりあえず私は動作で説明することにしよう。

地面に丸を書いて、夏奈子さんの家にあつたスチール缶を置く。

「まず鬼と逃げる人を決めて……今回は私が鬼でいいや」

「ねーねー、その缶どうするの？」

「でね、始まりの合図があつて、逃げる人がこの缶を蹴るの。そしたら始まり」

「じゃあ杏蹴るー！」

えーい！ と声を出しながら缶を蹴飛ばす杏ちゃん。

缶は高く上がつて、近くの茂みに落ちた。

「で、始まつたら逃げる人はどこかに隠れるの」

「解つたー！」

あつという間にいなくなる彼女。でも近くにいるみたいだ。

ルールをよく解つてないからだろう。木の裏から包丁が見え隠れしている。

「それで、鬼の人は缶を元の場所に戻して、隠れた子を探して……」

「……………」

私は躊躇なく木の裏から覗く包丁に向かって歩く。

「みーつけたー！」

「わわっ!？」

「こーやって見つかったら、逃げる人はすぐさま缶を蹴りに行って、鬼の人は蹴られない

ように缶を押さえに行く」

その言葉を聞いた途端杏ちゃんは猛烈ダツシユ。私も遅れずダツシユ。

着いたタイムリングはほぼ同時。蹴ろうと彼女が足をあげた隙について私は缶を押しさえる。

「あー！ 今杏が蹴ろうとしたのに！」

「こうなったら逃げる子は捕まっちゃうの。逆に蹴ることが出来ると、捕まった子と見つかつた子はまた隠れられるんだ」

「へえ、じゃあ杏、頑張つて蹴るね！」

「あ、でも一つ注意」

確か包丁さんにはもう一個の姿があるって言つてたつけ。

カミサマ？ とかいうのが。

「カミサマになるの禁止ね。そうなる見えなくなっちゃうから卑怯になっちゃう」

「はい」

こうして、何気なく缶けりを始めたのだけけど……

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

まず私が鬼。

言い出しつぺの法則というやつだ。

杏ちゃんが蹴った缶を元の位置に置いて、足を置く。

さつきより飛ばした感じだけど、まだまだな感じ。まだ子供だもんね。

私も子供だけ。

とりあえず今回は遠くに隠れてるみたいだから、ちよつと探しに出なきやいけないかな。

山の斜面とかを歩きながら探す。ある程度探したら大急ぎで戻って缶の有無を確認。

よし、まだあるね。

本格的に探そうかな。私だってルカさんみたいにちよつと人間離れしたこと出来る

し。

。

風になる事は無理だけど、ターザンみたいに森を制することぐらいは出来る。

子供は風の子。意味は違うけど、そんな活発な子供のごとく！

半分本気で、辺りを探し回るのだった。

探し回って10秒足らずといたところか。

山を下りる杏ちゃんの姿を見つけた。普通の子供とは比にならないくらい早い。

やっぱり普通と違うから、それなりの身体能力があるのだろう。

でも私も負けていられない。

「杏ちゃん見つけー!」

「わわっ!」

木の上から飛び降り、山の斜面と同じ下る角度から着地。その前に投げ出される勢いで下る。追いつけなくはないけど、これ以上速度を出したら逆に木々をよけられない。

その点では、包丁さんである杏ちゃんの方が身体能力がいいみたいだ。

もうちよつと本気を出したらいい感じなるかもしれないけど、それだとカミサマにならない彼女からすれば卑怯な手だろう。

そもそも、本気になった私とカミサマで本気になった杏ちゃんとだと、どちらが強いのだろうか。

夏奈子さんからカミサマの姿にはかなりの身体面で強化が入るとかなんとか。

でも私もマスターもレンも見ることが出来なくなるから、ある意味大変なわけで。

不便だなーと思いつながら走っていると、遠くに缶が見えた。

距離は杏ちゃんの方が近い。このままじゃ蹴られる。

逆転の策はと考えたところで、目の前にツタが垂れる枝があった。

これを使って！

私はそれに飛びつき、勢いを殺さないまま空中に投げ出された。

「おりゃあああああああ!!!」

ドンッ！

杏ちゃんの前に着地する予定だったんだけど、ツタの垂れていた枝が折れて予想以上に飛び缶の置いてあるところが着地点になった。

そしてそのままダイレクトに缶を踏んだものだから、スチール缶とも言えどその衝撃に耐えることは出来ず。

そこにあつたのは地面に埋まりながらも一枚の鉄の板のようになったスチール缶があつた。

「あーあ、負けちゃったー！」

「よく頑張りました。えらいえらい」

よしよしと慰めるように頭を撫でる。マスターがよくやってってくれているから、私もまた年下の子にはやってあげるのだ。

いいものは伝えないとね。

「えへへ」

嬉しそうに笑う杏ちゃん。と、辺りが暗くなる。

何だろうと上を見ると、ツタの絡まった木が倒れてきているところだった。

どうしてだろうか。木は結構な太さだったし、簡単に倒れるわけがないのに。

根でもやられていたのだろうか。いや、違う。全体が弱っていたんだ。

ツタが絡まった木。それはツタが逆に木を枯らすために巻き付いて締め付けていたんだ。

そこで理解する。そこで大きな衝撃が加わって、倒れるのだ。

根が腐っていたり、中が虫で食べられていたりしたら、木は自分の重みで倒れてしまう。

枝が折れて衝撃が緩和されたかと思ったけど、その枝自身も結構太いなど今見て気付いた。

あれ？ 絶体絶命？

VOCALOIDが車にはねられたとかいうニュースは見たことあるけど、その部分が崩壊して再構成されて無事ということだった。

でも今回は違う。つぶされるのだ。下敷きだ。その場で再構成なんて出来るわけがない。

そもそも、怪我したらマスターが起こるだろう。再構成なんてもつてのほかだ。

それにしても絶体絶命だと人って結構思考が回るんだね。無駄なのにさ。
「リーちゃん！」

杏が前に躍り出て姿が見えなくなる。

轟音。

聞こえた瞬間私は無事だということを実感する。

目を開けると倒れてきた木は横に切り裂かれ、横に真つ二つになっていた。

「大丈夫？　リーちゃん」

「うん大丈夫。でも缶けりできなくなっちゃったね」

心配そうに下から顔を覗かせる杏ちゃん。

心配させまいと私は笑顔で答え、別の話題に切り替える。

とりあえず丸太が邪魔になるだろうから、二人で山のふもとにでも持っていこうか。

いや、薪にできそうだから折角だし夏奈子さんの家に持っていこう。

「次の遊びはなんにしよつか？」

「うーん、リーちゃんが言う新しいのがいい！」

確かに私はいろんな遊びを知っている。道具があるから遊びが増えるわけであつて。

でも二人で出来る遊びなんて数が知れている。一応、二人でしかできない遊びもあるんだけど、杏ちゃんなら屋内より屋外の方がいいだろうし。

と、向こうの方でレンと笹ちゃんがリアカーに何か乗せて引いているのが見えた。ちなみにレンが前で笹ちゃんが後ろ。笹ちゃんは疲れたのか荷台に乗っている。

「レンー！」

「あ、リン」

近付くと分かったけど、リアカーに山積みになっているのは黄金色の小麦だった。でもなんで小麦？

レンは疑問に思った私を察したのか、すぐに答えてくれた。

「あ、これ向こうの山のふもとに大きな麦畑があったんだよ。それで笹と一緒に……つて、笹ー！ サボらないで押してよ！」

「いいだろうこのくらい休んでも！ 第一刈り取りはほとんど私がやったんだ！」

「う、うう……それはそうだけど」

「だから運ぶのはレンがする、百合が来るまでに全部だ！」

「ん？ 百合？ 包丁さんの名前？」

「そうだよー。ゆりりーは金色の髪ですつごく綺麗なんだよー？」

代わりに答えてくれる杏ちゃん。

包丁さんって日本の子しかいないと思っただけど、そうじゃないんだ。

外国の子もいるんだ。そう感心していると、もう一つの疑問が浮かんできた。

「そういえば、その小麦で何つくるの?」

「それは中華麺と言うのを作るんだ! 後はうどんにそうめん……」

「笹、よだれ垂れてる」

「わ、解っている! でも想像すると……駄目だ駄目だ」

「さーちゃん汚ーい」

何を思い浮かべているのかわからないけど、ぼんやりとした表情でよだれが垂れかけていた笹ちゃん。

レンの指摘を受けるも、また思い浮かべてしまい、今度は自分で何とか帰って来て袖で自分の口周りを拭く。

それを見た杏ちゃんが思わず口にする。

「なっ! 杏だつてするだろう!」

「杏は袖じゃないもん! 服でするもん!」

「そ、それとこれは同じだ!」

「……っ」

「そこ! 笑う処じゃない! というか笑うな!」

二人のやり取りを見て、思わずレンと笑ってしまう。

声には出なかったけど、その変化をすぐさま笹ちゃんが感じ取って反論。

その様子が本当に面白くて、今度は我慢できずに二人で爆笑してしまうのだった。



その後私達も手伝って何とか蔵に全部の小麦をしまっておいた。

他の小麦粉が残っていたのは驚きだったけど。

それを見て笹ちゃんもまた止まってしまったのは言うまでもなくて。

今はその疲れた体を癒すために、裏山の夏奈子さんのおじいちゃんのお墓の前にいる。

ここは綺麗だし、お墓があるのにとっても気持ちいい。

もちろんベンチとかがあるはずがないので、地べたに座るしかないのだけど原っぱだからそんなに汚れもしない。

「綺麗だね」

「うん」

足を伸ばしている膝の上に杏ちゃんを乗せて、山の向こうに沈んでいく太陽を見つめ

る。

田舎ってやっぱりいいな。都会だとこんな光景ゆつくり見れないだろうから。眼福。眼福。

レンは太陽を直に見てしまったのか目を逸らしていた。

笹ちゃんも立って沈む太陽を見ている。何か思うことがあるのだろうか。

「私達がこうして幸せに暮らしてるのに、皆はまだ……」

「それはないと思うよ」

その言葉に即答する。

「どうしてそんなことが言えるんだ」

「夏奈子さんと美春さんと優秋さんが頑張ってるから。もしもあつたとしても、それを望まない人の方が多いよ」

「……………」

「大丈夫。世の中悪い人ばかりだったら、世界は回らないってマスターが言ってたから」

そうして私は笑顔を浮かべる。

「……………そうだな。今私達に出来るのは今を楽しむことだ！」

「その意気だよ！」

「なら皆であそぼ！」

こうしてまた日が過ぎていく。

第19話 平たき和み

Side 鏡音レン

リンが杏ちゃんと言遊びに出ていった後、僕達は居間でゆっくりしていた。

お腹がいっぱいというわけじゃないけど、温かい畳が気持ちいい。

その独特の柔らかさはフローリングにも、絨毯にもないものだった。

「ちよつと散歩に行つてくるねー」

やつぱり僕もリンに似てなのか、じつとしているのは嫌いなんだろう。

初めて来た場所でじつとしているのが、外で堂々と遊べる空間でじつとしているのがちよつと物足りないというか。

マスターと夏奈子さんにそれを伝えて家を出ると、笹がどこかに行こうとしていた。

さつきまで部屋の中にいたはずなのに、どうしたんだろう。

「どうしたの笹」

「！ レン、丁度良かった」

いいものを見つけたような顔をする笹に引つ張られながらも、裏庭の蔵の前にまで連

れらる。

そこにはまだ真新しいリアカーが出してあつた。

「さ、これを引いて行くぞ！」

「行くつてどこに？」

「麦畑に決まつてるだろう！」

麦畑……そんなのあつたつけ。ここに来てから一回も見えていない。

もしかしたら僕達の行つたことの無い場所に生えてるんだらうか。

それとも、夏奈子さんのおじいちゃんが育てた物だらうか。

畑と言っているのだからそもそも野生ではないだらうと思ひながら、新しい光景を目

指して僕は言われるままにリアカーを引くのだった。

・
・

家から少し歩いたところで、川が見えてきた。

先に先に進む笹を呼び止めながら、その川沿いに歩く。

途中葵ちゃんが魚釣りをしているのが見えた。

「葵ー！ 釣れるかー？」

笹の大声に驚きながらも、首を横に振る葵ちゃん。まだ成果はないようだ。

ちなみに僕が笹だけを呼び捨てにする理由は、笹が男の子っぽいからで。自分に似た何かを感じたからだ。

そのまま川沿いに歩いてみると、山のふもとに黄金色の絨毯が見えてきた。

あれが麦畑だろう。詳しい大きさは解らないけど、全部収穫するには機械が一番楽に追われそうだ。

「おー！ 遠くから見えていたが、ここまで広いとは……」

「裏山から見えてたんだ」

「うん。中々立派だったからな！ よし、これは刈り取り甲斐がある」

縦長の長方形型の畑。その外側の真ん中に立った笹は姿が途端に見えなくなった。

多分、夏奈子さんの言っていたカミサマっていうのだろう。

そんなことを思っていると、一瞬で麦が宙を舞った。それも一つの畑全部だ。

そして見えない風、いや、ソニックブームのような何かが麦を畑の中央に集めていく。

「こんなものか」

そんなセリフと共に再び姿を見せる笹。僕はその光景にぽかんとする。

「ほら、何をやってるんだ。早く積み込むぞ！」

「わ、解ってるって！」

なんだか包丁さんって、よく解らないカミサマだなあ。

「これだけの量、何に使うんだろ」

「それは麺に使うのだ！ 後はパンとか他の料理に……でも私は麺がいい！」
その話を聞くからにはよっぽど麺が好きなようだ。

二人でちよつとずつ。

抱え込める位の量をリアカーに積んでいると、笹のつぶやき声が聞こえてきた。

「はあ、いつもなら百合と鈴蘭が手伝ってくれて、楽なんだが」

「？ 百合？ 鈴蘭？」

聞きなれない名前だ。でも両方とも花の名前。

笹と葵ちゃんとはともかく、椿さんや牡丹さん、杏ちゃんは花の名前だから、なんとなく包丁さんの名前のような気がした。

「む！ 盗み聞きとは失礼な！」

「ああごめんごめん、聞こえてきたからさ。嫌なら答えなくてもいいよ」

「いや、嫌じゃないが」

「なら答えて」

「むぐぐ、なんでそうも偉そうなんだ！」

「僕が年上だからかな」

弟が出来たみたいで楽しい。厳密には妹なんだけど。

でも別にそこまで意地悪しているつもりはない。面白いからじゃない。ただ単にいじってる感じだ。

「むう……」

「ごめんごめん、教えてくださいお願いします」

頭を撫でて謝る。そこまで嫌じゃなかったのか、少し恥ずかしそうに頬を赤くしながらされるがままになる笹。

「仕方ない、してやろう。ただし一回だけだからな！」

「うん」

「百合は金色の髪をしてる私達でも不思議な包丁さんなんだ。鈴蘭はそうだ、私達に姿こそ似せないが中身がそっくりになる」

「二人とも小麦はよく使うから、向こうなら手伝ってくれるんだ」

「ちようど今頃ぐらいなら収穫も終わってるだろう」

Outside

「クシユン！」

ここは場所が変わって包丁さん達の世界。

まだ呼ばれていない者達が静かに暮らしている。

そんな世界の一角で可愛らしい二つのくしゃみが響く。

「うう、誰か私達の噂でもしているのかしら……？」

「私もです。珍しいものですね、二人で一緒にくしゃみだなんて」

「そうですわね。さて、これでおしまい」

麦を運び終えて二人、百合と鈴蘭は縁側に座ろうかと移動する。

丁度そこでは残された年少組の二人、薄雪と柊が仲良く日向ぼっこをしていた。

「隣はよろしくて？」

「うん……問題ない……」

「大丈夫、空いてるから」

少しだけ間を開ける二人。その右隣に彼女らは座る。

さんさんと照りつける太陽。もうすぐ昼だから日の光が一層まぶしく感じる。

「薄雪さんと柊さんはいつもこちらに？」

「うん……」

「葵が居なくなつて少し寂しいけど、もうすぐ私達も呼ばれるから」

桔梗がお願いしたんだという話は皆聞き及んでいた。

年少組から先に、と。

年中組や年長組は色々と割り切れてしまうから、後でも構わないと思ったのだろう。でも牡丹と椿が呼ばれたのは彼女としても誤算だったであろう。

それが何故かは先日の夜椿が直々に教えてくれた。

「鈴蘭……」

「はい？　どうかしましたか？」

「足……」

薄雪が心配して声をかける。

鈴蘭は包丁が特殊な形だと様々な障害が出てしまう。

今は小型のパン切り包丁の形をとっているため、そののこぎりのような刃が裏目に出て足が少し不自由なのだ。

だから薄雪はそれが心配で声をかけた。

「大丈夫ですよ。歩くだけなら問題ありませんから」

「そういいつつ、畑で何回も転びそうになっていたのはどこのどなたかしら」

「リリー、それは秘密と」

「今でこそ、私に合わせるためにティアはその包丁で居るじゃない。そんなに自分に無理をせずに」

「無理はしてませんよ。ただ私がそうしたいからそうしているだけなのです」

そんな会話を聞いて何か思ったのか、薄雪が鈴蘭に寄り添い膝の上に頭を置いて太ももを手で撫でる。

ひんやりとした温度と髪感触、触られた感触に彼女は頬を赤らめ驚く。

「ちよ、ちよつと薄雪!」

「ふふふ、無口な薄雪さんもティアには懐いてるわね」

「私も、一緒に寝たい」

とてとてと近づくと、柵は百合の膝の上に頭を置いた。

それを難なく受け入れて頭を撫でる。

二人の日向ぼっこはまだ終わりそうになかった。

「おお、二人とも戻ってきてくれたんだ」

後ろから威勢のいい声が聞こえて二人が振り返ると、甘藻が立っていた。

「甘藻さん、帰りました」

「はいお帰り」

彼女は軽い身のこなしで縁側に座ると、晴れた空の向こうを見ていた。

「そういうえば甘藻さん、今日は釣りに行くはずだったのではありませんこと?」

「そうなんだけどさ、なんとなく興がそがれちゃってさ」

「それはまた……どうしてですか?」

「どうしてつて……まあいいか。現世の事を考えてたらさ、少しね」

最年長とはいかないが、実質最年長である甘藻には少し心配事があった。

現世に行つていいものか。こうして命令を待つまでずっとここに居ると何ら変わりない。

ただ違うのは、現世では呼ばれることがないということだ。それで人を切るという目的で呼ばれることはない。

それどころか、自分達が今までやってきた病を切るといふ命令をまた果たすことが出来るらしい。

何れ、私もそんな空間に居られるのだろう。でも。

「静かになつたよな。ここ」

庭を見ればいつもなら楽しそうに走り回っていた杏はいない。

暇そうに外を見つめながら、自分も我慢できなくなつて飛び出す筈もない。

居間ではいいいやながらも服を着せられていた葵も、それを着せようとする牡丹もない。

こんなしんみりしていれば、後ろから声をかけてくれるはずの椿もない。

今までそこにあつて当たり前前の物が、ない。

「私達は一応割り切れるけどさ、でもこつとも静かだと」

「いずれ向こうに行けばまた賑やかになりますよ」

鈴蘭がさりと口から言葉を漏らした。

「そうだな。どちらにせよ私達は流されるままに進んでいくんだ」

そういつて後ろから現れたのは稲。

「考えていても仕方ないさ。それに向こうはこことほとんど変わらない上に私達に縁のある場所だそうじゃないか」

「へ？」

甘藻はそこまでは聞き及んでいなかった。それ故に抜けた声が漏れる。

「確か椿が来た時にさりとそんなことを漏らしてましたね。稲さんにしか話している様子でしたが」

「ちよ、ちよつと待てじゃあなんで鈴蘭が知ってんだ?！」

「鈴蘭ちゃんはその時近くにいたから聞こえていたんだろう。いつもずっと起きているからね」

「ティア、貴女はまだ小さいんだから早く寝ないといけませんわよ」

「わ、私は……ひゃあ！」

その会話を聞いていたのか、また薄雪が心配して鈴蘭を撫でる。

「鈴蘭……一緒に……寝よ？」

「あの薄雪、私は別に……」

そういういつも鈴蘭は大きなあくびを一つ。

「ほらティア。薄雪さんが誘ってるんだから。今から寝ても夜寝られないということはないのだから」

「そうだと鈴蘭。よく寝ないと体に悪いし」

年上の二人から言われてしまえばもう反論できない。

言われるまま、鈴蘭は薄雪の頭を撫でてお礼を言つてから、横になる。

「ありがとう薄雪」

そうして、一人の少女は眠りにつくのであった。

S i d e 鏡音レン

リアカーに小麦を乗せてきた道に戻る。

途中で葵ちゃんとお姉ちゃんが居たけど、何か緊張した雰囲気だったから、声はかけないようにした。

笹も同じように声を掛けなかった。多分葵ちゃんの表情を見て何か思ったんだろう。

「そっさいえば笹」

「? なんだ?」

「笹達が居た世界って、どんな感じなの?」

「私達の……どうしてそんなこと聞くんだ?」

「いや、カミサマ達の世界ってどんなのかな、って。麦畑でも言ってたからさ」
「……………」

笹は何も答えない。考えているのか、何も言いたくないのか。

「言いたくなかったら言わなくてもいいけど」

「まあ、ここほとんど同じ場所だって思ってくれたらいい。そもそもここは環境も、雰囲気も、何もかもが似ている。だから私達は人の姿でずっと居られるんだ」

「って椿も言ってた気がするが……」

「いや、聞いてないけど……」

「そうか」

それだけ、この場所が包丁さん達にとって暮らしやすい場所なのだろうか。

それだけ、この場所が似ているんだろう。

O u t s i d e

レンの後ろから押しているはずの笹は、少し疲れたのかりアカーの荷台に座り込んでいた。

「もしかしたら、こんな所に夏奈子さんのおじいちゃんの家があるのは、ここに何かあるからかもしれないね」

「それは言えているな。そもそも地脈やその手の物が密接に関係してないとここに神社なんて」

そう言いかけた笹が慌てて口を押さえる。

そもそもここに神社があったことはリンやレン、ミクには秘密なのだ。

何故か……それは言ってもらえなかったが、夏奈子からそう言われたからそうしているまでで。

「？ 神社？」

「いや！ なんでもない！ それより早く家に戻るぞ！」

誤魔化すようにリアカーから飛び降りて押し始める笹。

当然速度も上がるので、レンは驚いて前に押し出される。

「わわわっ！ 笹！ 何もそこまで」

「うるさい！ まだ積み込めて無い分もあるんだ！ 日が落ちるまでに早く済ませるんだ！」

自分の失言をひたすら誤魔化すために、必死になって後ろから押すのであった。

第20話 似て非なる『物』

Side 初音ミク

朝ご飯を食べ終えてのゆったりとした時間。

リンちゃんもレン君もまだまだ子供なのかなと思いつつも、私も田舎の空気を堪能するために、外に駆り出した。

田舎らしい砂利でできた道を進む。初めての感触だ。

私達が住んでいる場所でも、たまに他の人の家で砂利が敷かれた所を見る事はあったけど、赤の他人の家に入ることが出来ない上に、別に踏みたいとも思わず、そんなにも興味を向けなかった。

でも、今は違う。

アスファルトで整備された道など一つもなく、あぜ道のように土が丸出しの道もあれば、今歩いている道のようにその上から大粒の砂利が敷かれた道もある。

夏奈子さんが言うように、ここは度がつくほどの田舎だった。

私も、多分リンちゃんもレン君も、こんな自然に囲まれた場所は初めてだろう。

それに、ここは人の出入りが少ない。だから、何も怖い物は無い。

いうなら、夜が怖いぐらいか。周りが見えず、動物に物理的に襲われる可能性がある。私は彼女達と違って「作り物」だから、壊れてしまえば再構成なんていう神業は使えない。

そもそも、優希さんは怪我をしても心配する様な人だ。家族は心の底から大切にする人だ。

そんなことを考えながら歩いていると、小川が見えてきた。サラサラと水のせせらぎが心地いい。

水道水とはまったく違う、自然に濾過された綺麗な水は見たことがない。

その証拠に結構の深さなはずなのに、底が顔を出していた。

やっぱり、田舎は不思議な感じ。

バシヤツ……

水から何か揚がる音。なんだろう、誰かが水遊びでもしてるのかな？

音のした方を見ても何もなかったので、おそらくこのあたりじゃないだろう。

私達の耳は元々音楽の為にあるから、聴力にも自信がある。

だからそれなりに遠くの音も拾う。

私は音のした方へと歩みを進めるのだった。

暫く歩みを進めていると、黒い髪でツインテールの女の子が竹竿で釣りをしているのが見えた。

今は水面に立っている浮きをじつと見ている。

話しかけることなく、私は遠くから見守ることにした。

風と鳥のささやき。水のせせらぎ。木々の葉や草が風になびき擦れる音。

ゆったりとした時の流れ。癒しの時。

音を立てて浮きが勢いよく沈む。

彼女はそれを見計らったように竿を勢いよくあげた。

その糸の先には、日の光に照らされて銀に輝く鮎が。

手際よく針を外して、近くに置いてあつた大き目のバケツに入れる。

あれほどの大きさのものを、どうやって持ってきたかは私にも解らない。

そして手を合わせて、目を瞑る。

「いめんね」

彼女は謝っていた。

本当に優しい子だな。そう思いながら、私も手を合わせる。

「ごめんなさい。そして、ありがとうございます」

「！」

そう。彼女とは葵ちゃんのこと。

意図的に葵ちゃんと会いに行つたわけではないのだが、私からすると一番お話ししたい包丁さんだった。

そんな気持ち私が私をこういう結果に導いたのだろう。

「調子はどう？」

「好調です。やっぱりお魚は自分で釣るって食べるのが一番です」

「そっか。私はやったことないからよく解ないけどね」

「そういえば、ミクさんは……機械、なんですよね？」

「そうだよ。高性能なロボット。ってロボットって解る？」

「大丈夫です。人の代わりに何らかの作業を行う装置か、人や動物みたいな外見と内面を持った機械ですよね？」

「よく知ってるね。その通り。その中でも、人に似せて作られた物を、人造人間からもしつたアンドロイドっていう言葉が使われるの」

「でも、どうしてそんなこと聞いたの？」

「あ、えつと……失礼ですけど、なんだか機械に思えなくて」

「だよ。葵ちゃん以外にも少なからずそう思ってる子はいらと思うよ。でも私は機械であつてそれ以上でもそれ以下でもない。VOCALOIDだけど歌えない」

「え？」

あ、そこまでは確か説明してなかったっけ？

私ははつとして改めて説明することにした。

「こつちだと、そんなひどいこともあるのですか」

「まあ、本能としては当たり前なんだけど、それを理性で抑え込めない人はそういう道に走っちゃう人もいるわけ。無論犯罪行為なんだけど」

葵ちゃんは説明している間、竿を置いて真剣に私の話を聞いてくれた。

その分少し嬉しくて話し過ぎたという体感があるが、気にしないことにする。
「さつき、ミクさんは釣りをしたことがなかったって言ってたですね」

「あ、うん。そうだけ……」

急に話題を転換してくる彼女。

そういうと、葵ちゃんはおもむろに針に小さなおにぎりのような物をつけて、竹竿を

差し出した。

「何事も経験なのです。一緒に釣ろうです！」

私はそれに誘われるままにその場に三角座りをして、釣り糸を垂らす。

うまく川の真ん中に落ちたから、後は食いつくのを待つだけだろう。

でも、彼女がこれでは釣ることができない。

何せ竹竿は一本しかないのだから。

すると器用に私の腕の中に入り込んでくる葵ちゃん。

「これで一緒に釣れるのですよ」

私の持つっている竿の上を持つ。心なしか嬉しそうな彼女を見てみると、私も笑顔がこぼれる。

何の断りもなしに入ってきたことは少し抵抗を覚えたけれど、やっぱりいい子だから許せてしまった。

またゆつたりとした時間が流れる。

葵ちゃんも完全に私に身を預け、彼女もまたゆつたりとした時間を堪能していた。

少しだけ冷えた体が心地いい。その点でも、やっぱり人間じゃないんだということを実感する。

ただ、三角座りはちよつと間違えたかもしれない。いや、他の座り方が思いつかな

かっただけだけど。

それは、少し……いや、大分恥ずかしい格好だからだ。

服はいつも通りの格好だ。服は問題ない。いつも着慣れているから。

でも、このミニスカートだけはどうしようもない。布が少ないことを今はじめて実感する。

丁度正面には葵ちゃんが座っているからうまく視界を遮っている。

鉄壁スカートなんていう言葉があるけれど、それはアニメやゲームの世界でしかない。

3Dモデルを利用したゲームだって、カメラワークを抑えたりすれば簡単にそういうのは防ぐことが出来る。

話を戻して。葵ちゃんがいるから大丈夫なのだが、彼女がいるからこそ困った問題も発生しているわけで。

そう。『当たっているのだ』

どことは言わないけど、当たっている。体を完全に預けているから当たっているのだ。

「……………」

一度気にし始めたせい、あんまり釣りに集中できなかつた。

冷たい感触。動くことはなかったけれど……まあ、その、そこから移動してほしいと、言いづらいわけで。

ある程度仕方ないかと割り切った私は再び浮きに意識を向けた。

と、途端に浮きが沈み竹竿がしなる。手にかかる力も大きい。大物だ。

「葵ちゃん！」

「はいです！」

二人で力を合わせて引つ張る。この際当たつてるとかそんなことどうでもよかった。

この釣り独特の引つ張られる感触、二人で一緒に引つ張る動作。

それが楽しかった。

でもすごく重い。少しでも力を抜けばそのまま持つていかれそうな感じだ。

私はアンドロイドだけけれど、人間に似せて作られたから力は強くない。

また、リミッターみたいなものは存在しない。旧式故に、ロボット三原則に沿ったそれで作られたのだろう。

それで、必要以上のものは全て外されたのだろう。

「うーん！」

どうも本当に大物らしい。

「葵ちゃん！ カミサマで何とかならない?！」

「何とかなるですが、でも梗さんみたいに力持ちじゃないです!」

「そ、それでもいいから! 早くしないと川に落ちちゃうよ!」

確かに、確実に引きずり込まれている。このままじゃ本当に落ちてしまう。

座っているから、もつと危ない。立とうにも立てない状況でもある。

次の瞬間、思いつき引つ張られて私も葵ちゃんも体が前のめりになる。

「あ」

世界が反転して突然息が出来なくなる。

全身が濡れている感覚。浮いているような、沈んでいるような、上を向いているのか、下を向いているのか。

明るいはずなのに暗い世界。暴れてももがいても何も変わらない。

アンドロイドで防水加工がされているとはいっても、大量の水が穴という穴から浸入すれば流石に危ない。

それなりのパーツで対策は出来るけど、そんなことを今しているわけがなく、少し諦めかけたところで、結構な力で引つ張られた。

気が付けば私は岸に上がっていた。

さんさんと真上から照り付ける太陽がまぶしい。

その日光で温められた岩で背中が温かい。

私の自慢の長いツインテールも形が崩れてしまい、潰れている。

当然全身びしょ濡れで、濡れていない場所なんてない。

無論ブーツも下着も何もかも。

いきなり息苦しくなって咳き込むと水が吐き出される。ついでに耳の穴からや鼻からも水が出る。

随分と多くの水が入り込んでしまったようだ。

「大丈夫ですか、ミクさん」

「あ、葵ちゃん……大丈夫だった？」

「大丈夫です。元々泳げるですから」

声をかけられその方を向けば、平然とした葵ちゃんの姿があった。

その手にはしつかりとバケツを持っていたが、当然彼女も全身びしょ濡れだ。

「あの魚、一体なんだったんだろうね」

「解らないですけど、ずいぶん大きかったです。私の身長くらいは……」

「とりあえず、風邪を引くと大変ですから戻りましょうです」

私達は大人しく、夏奈子さんのお爺さんの家に戻ることにした。

戻るといきなり夏奈子さんが出迎えてくれた。

びしょびしょになった私達を見て、彼女は朝風呂の為に沸かしておいたというお風呂に入ることを勧めてくれた。

体が冷えると大変だから、とか、川の水はきれいに覚えてやっぱりそれなりに汚いから、とか、服は私達が洗濯するから、とか。

そして今は葵ちゃんと一緒にお風呂に入っている。

あの一件があつてから、お風呂に入るときは必ずコアの設定温度を下げている。

これ以上、同じことを二度と起こさないためにも。多くの人に心配させて迷惑をかけるないためにも。

ちなみに、葵ちゃんの取つていた魚は全部生簀に入れられて、今は元気に泳いでいる。ここで、少し気になった部分がある。

何故か葵ちゃんは髪をほどこいていない。

私はもちろん解いているのだけれど、普通にリボンで結んでいるのだから、お風呂の時ぐらいいは解けばいいのに、と。

「どうして葵ちゃん髪を解かないの？」

「あ……これは、ただ単に髪をほどくのが、嫌いなだけ、です」

「そっか」

あんまり突っ込まないでおこう。

お風呂でも解かないとなると、何か特別な理由があるか、本当に嫌いなのか、どちらかだ。

浴槽、それも五右衛門風呂と呼ばれる物に浸かる。

「逆に、ミクさんはどうしていつもツインテールなんです？」

「私？ 私はそれが一番私らしい髪型だから、かな。こんなに長くて、手入れをするのも大変だけど、それでもお気に入りだから」

「そうなのですか……」

私らしい髪型……それは『初音ミク』としての私の髪型だ。

本当に私らしい『私』とはいったい何なのだろうか。髪型でなくても、在り方として。今のままであり続けること？ この幸せな時間を過ごすこと？

歌が歌えなくても、ずっと優希さんの傍にいたいこと？

VOCAL ANDROIDとして世に送り出されようとした私が、歌えなくても。

彼と一緒にいることで私らしい私になれるのだろうか。

「どうしたら、私は私で居られるのかな」

呟いたそれが耳に届いたのか手を止める葵ちゃん。

「あんまり、深く考えすぎない方が楽です。あんまり私達が言えることじゃないですけど」

包丁さん達は人を殺して生きてきたからこそ、精神を保つためにそのことを出来る限り見つめないでいたのだろう。

現実には押しつぶされそうになったから。

そもそも人の命を救う存在が、人の命を殺める存在になってしまったなら、なおさらだ。

どのようにしてそんな世界を切り抜いて生き抜いてきたのか。

それに何かヒントがもらえるかもしれない。でも、これはいわゆる『地雷』だということとは解り切っていた。

だから聞くことが出来なかった。

思い返す。あまり深く考えすぎない方が楽と。

今の幸せな時間を過ごすことが出来ればそれでいいのだと。

その場のしぎにしては最上の策だと思う。

だけど見つめなければいけないなくなった時。その時はこの策は使えない。

「自分は自分であることに自信を持ちなさい。自分が存在している事に喜びを持ちなさい。今ある些細なことでもいいから幸せを見つけなさい」

「えっ……」

「私の、尊敬する人から教えてもらった言葉。そうだよ、葵ちゃん」

「……………」

彼女は答えてくれなかった。

考えるために目を閉じると、お風呂に入っているからか、あの時の事を思い出す。

『…マスターには優希さんを見習って欲しいです。あの人は…そうですね、まとめて言えば、意地悪でスケベで意地悪で…意地悪で、えつと…いい、意地悪な人です。あとスケベです』

『妬い…っ!?!ち、違いますっつてば!だ、大体、何で私がマスターなんかには妬く必要があるんですか!?!』

『うう…そ、それは確かに、たまには優しくかったりしますけど…で、でも、圧倒的に意地悪なことが多いんです!そんな人を好きになつたりしませんよ私!』

人は恋をすれば本当の自分が見えてくるとい話を、どこかで聞いたことがある。

彼女のように、自分のマスターを心から好きになれたなら。

マスターとVOCALOIDという関係を超えて、繋がる事が出来るほどの力な

ら。

どれだけ私は私らしく変われるだろうか。

それが楽しみでも、興味のあることでもなかった。

自分を見つげるための道具として恋愛という物を使いたくなかったから。

恋愛は、恋愛だからこそ素敵な物だと思っている。少しぐらい夢を見てもいい気がする。

「包丁さんは、人を好きになつたりするのかな」

私が話しかけなかったからか、体を相変わらず洗っていた葵ちゃんの動きがびたりと止まる。

すると、絞り出したかのように声が聞こえてきた。

「私達は……そういうこと……しちやいけななんです。あくまで、カミサマですから」

「っ！ ……ごめんね」

その反応に私はしまったと思い、ただ謝ることしかできなかった。

第20話 外伝 ある春の出来事

Side 初音ミク

春。

桜の舞う季節。

それは私達の住まう町でも例外ではなく、町を彩らせるために点々と立っている桜が命を芽吹かせていた。

「優希さん。桜は好きですか？」

「どうしたいきなり。何かあったのか？」

「いえ、桜が綺麗だなんて」

私が窓の外を見つめると、風で運ばれてきた桜の花びらが庭に降っていた。

因みにここは優希さんの部屋だから、リンちゃんとレン君は一階に居る。

もちろんマキさんもゆかりさんも一階だ。

「桜、か」

何か思い当たる節があるのか、少しだけ考えて彼は口を開いた。

「桜は好きだが、儂い存在ではあるな」

「儂い、ですか」

「そう。他の花のようにその花を留まらせることは少ない。そういう意味で儂き物の比喩としてはよく使われる」

「なるほど。ありがとうございます」

「いや、例を言われるほどのことは言っていないさ」

再び外に視線を戻す。また風が桜の花びらを運んできた。

「皆に聞いて回ったらどうだ？ 何かいい答えがもらえるかもしれないぞ」

「……そうですね。皆さんの意見も、聞いてみたいです」

私のお話は、こんな些細な会話から始まったのだ。

「リンちゃん、桜は好き？」

「うん！ なんていうんだろ、春が来たー♪ って感じがして好き！」

一階に降りるとリンちゃんと出会ったので早速聞いてみる。

たしかに、桜は俳句でも春の季語だったり、春の風物詩として有名だ。

どこかに向かうのか、リンちゃんはその答えだけを置いて二階へ行ってしまった。

「リン！ あ、お姉ちゃん。リン見なかった？」

「え？ うん。さつき二階の方に……」

「よしそれなら！」

「あ、待って！」

リビングから飛び出してきたレン君。どうやらリンちゃんを追いかけてるみたいだ。

元気で微笑ましいんだけど、私には聞かなきゃいけない事があったから呼び止める。

「ん？ どうしたの？」

「レン君は、桜好き？」

「桜……好きだけど、やっぱり女の子、つて感じがするかな。桜って女の子の名前で多いし。」

そう言い残してレン君は二階へ駆け上がっていった。

女の子の名前……確かに、アニメとか漫画のキャラクターでは、名前が桜と付くのが多い。漢字でも、ひらがなでもしかり。

レン君は意外と女の子寄りなのかな、と思いつながらリビングに入る。

「あ、ミクちゃん降りてきた」

「マキさん」

マキさんはテレビでバンドのライブ放送を見ていた。

もちろん歌っているのも演奏しているのも、人のバンドだ。

「マキさん、桜は好きですか？」

「桜？　桜は好きだよ？　お花見出来るし！」

「お花見、ですか」

なんだか夏奈子さんみたいな答えが返ってきたなあ、と思いつつ考える。

確かに、日本でもお花見シーズンとして桜の咲き具合で混み具合も変わってくる。

「私としての桜は、日本の象徴ですね」

「あ、ゆかりさん」

後ろから不意に声をかけられ振り返ると、ゆかりさんが手を拭きながらリビングに出
てきた。

日本の象徴……日本の花として輸出された桜は外国でも非常に人気と聞く。

「何かいい答えは得られましたか？」

「いえ、もう少し聞きまわってみます。……と言っても、誰か居るでしょうか」

「それならWonder Cafeがおすすすめだよ」

「Wonder Cafe？」

不思議なカフェ……?」

名前からして驚きのカフェともいえるのだけれど。

「確かにあそこなら……ミクさんは行ったことはありませんね。その顔から察するに」

「はい。どういったところなのでしょうか」

「どういったところって言うのはまず行ってみてから」

「場所は商店街です。一件だけログハウス風のお店がありますから、そこですよ」

「……っ!」

商店街。私が犯され、捨てられた場所。

商店街の道の真ん中で見せ物にされたわけではないけれど、それでも私のトラウマの場所だ。

「大丈夫だよミクちゃん。あれから強くなったんだよね」

マキさんがそつと耳打ちしてくる。

それに驚き、慌てて返す。

「ど、どうしてマキさんが知ってるんですか?!」

「美希さんからある程度聞いてるからね。優斗さんはあんまりその手の事知らないから、ゆかりちゃんは知らないけど」

なるほど。優希さんから優希さんのお母さんへと伝達されていって、今に至ると。

「ミクちゃんは何も悪いことしてないんだからさ。胸張って歩いていればやましいこと考えてる人なんて近づいてこないって！」

私はマキさんの言葉に後押しされるように家を出た。

そうだ。私は胸を張って生きていけるといふ自信を先の旅行で学んだんだ。

それを糧に、私は商店街に駆り出した。

目的のお店はすぐに見つかった。

商店街をキョロキョロと見渡しながら歩いていると、一件だけ異彩を放つログハウス風の建物があつたからだ。

名前は『Wonder Cafe』。うん、ここで合ってる。

カランカラン、と音を立てて扉が開く。

ログハウス独特の木の匂いに、ケーキのような甘い匂いと、コーヒーの苦い匂い。

ほんのりとした紅茶の香りも交じって、喫茶店の雰囲気が出ていた。

「いらつしやいませー。あつっ？」

「あ、こんにちはわ……」

私はぎこちなくカウンターに立っている店員さんに返事を返すと、適当なカウンター席に座る。

他のお客さんはいないのだが、そのせいで店員さんの視線が集中する。

「もしかして、優希さんの所のミクさんですか？」

「え！ どうしてそれを!？」

さつきも同じようなやり取りをマキさんとした気がする。

でも今度は大声をあげてしまった。

慌てて口を塞ぎ、周りを見る。お客さんは相変わらずいない。助かった。

「ふふふ。もしかしてと思って鎌をかけてみました、当たりだったみたいですね」

「あの、それは鎌をかけるというより、ストレート過ぎませんか？」

「そうですね。優希さんがミクさんを自分のVOCALOIDにしたなら、こんな

おしとやかな子になると思ってたんです」

「おしとやか、ですか」

「そうですね。VOCALOIDには少し不思議なものがありまして。それが何とは言いません。主に似た……いえ、主の望んだ姿を取る傾向にあるんですよ」

「主の……マスターの望んだ姿」

「だから優希さんはリンちゃんやレン君には元気で居てほしいという思いがあつて、二

人はあの元気な姿をしている。それも無意識下で」

「では、私は？ 私は一体」

「ミクさんは16歳ですよね？」

「はい。公式ではそうなっています」

「だからですよ。ほぼ同じ歳だからこそ、そういう近しい女性にはそういった人であつてほしいと優希さんは思っているんです」

「でも、優希さんには夏奈子さんがいるじゃないですか」

「それなら尚更ですね。明るく元気で活発な同世代の子はいる。だからもう一つの『可能性』を無意識に求めているのではないのでしょうか」

「無意識下で……私がおしとやかで。そうあつてほしいと。でもどうしてそんなことが言えるんですか？」

「優希さんはよくここを利用しますからね。その様子では、リンちゃんやレン君も……ああすみません。ご注文は何がよろしいですか？」

それに私も気づいたように、カウンターに立ててあるメニューを見つめる。

価格設定はスイーツやアイスクリーム、紅茶が安い。ジュースやコーヒーは比較的值が張っているようだ。

普通、喫茶店なのだから飲み物を安くしたらいいのにといいながらも、シフォンケー

キと紅茶をお願いする。

「少しだけ待っていてくださいいね。特別なお客様には、最高の物をお出ししたいので」
彼女は微笑むと店の奥に消えて行ってしまった。

どうやらこのお店は彼女が店主らしく、他に店員も見当たらない。それにそんなに広くない。

「私が、特別なお客様？」

そんなことを考えながらも一度店内をぐるりと見渡していると、一つの物が目に入った。

小さな木箱がたくさん並んでいる。値札が付いているところを見ると、売り物の様だ。

思わず席を立って歩み寄る。

『ご自由にお聞きください』

蓋を開けると、音楽が流れます。その小箱はオルゴールだった。

作り込んでいるが手作り。中の本体は解らないけど、小箱は確実に手作りだという事が解る。

「いい音色……あれ？」

オルゴールの音色に聞き惚れていると、どこかで聞いたことがあるメロディーだとい

う事が解った。

そのメロディーを追う。そして一つの答えにたどり着いた。

「これ、私の曲。私じゃないけど、私の曲だ」

そう。初音ミクが歌っている曲だ。それも有名どころ。

こんなオルゴール私は知らない。色々と社会も知らないからかもしれないけど。

でも、何故かあるはずがないと思った。

「ごめんね、お客を一人にするなんてマスターも……つてあら？」

「え？ あ」

店の奥から出てきたのは店員さんではなく、私のよく知っている顔だった。

「MEIKO姉さん」

「ミクじゃない。なるほど、マスターが変に上機嫌だったのはそれだったのね」

「あの、いつも優希さんがお世話になっていきます」

「あらあのマスターの所の。ますます納得ね、ちよつと待つてて」

注文は紅茶でよかったかしら？　と言われて私は首を縦に振った。

非常にテキパキ手際よく用意して、カップに湯気を立てながら紅茶が注がれる。

私はすぐに出るだろうと思ってカウンターに再び腰を掛けた。

「砂糖はどうする？」

「多めでお願いします」

「ミルクとレモンは？」

「あ、ミルクを中くらいで、レモンは大丈夫です」

「はいどうぞ。熱いから気を付けるのよ」

目の前に出された紅茶は湯気を立てていて、いかにも淹れ立てで熱いのは火を見るよりも明らかだった。

小さなスプーンですくって冷まし、少し飲む。最初に来たのは砂糖の甘さ。

そしてミルクでまろやかになった紅茶の味。

うん。おいしい。

「知ってる？ ミルクティーってミルクを先に入れておくとおいしいのよ」

「え、そうなんですか？」

「ほら、外国だと紅茶が重要視されてる国だってあるじゃない？ その国の最も権威があるところが判断を下すまでに至ったのよ」

「そうなんですか……大変ですね」

「まあ、嘘っぽい本当の話は話のタネになっていいわ。それにこういう事もやっていると、自然と自分でも詳しくなる物よ」

やれやれと仕草をして、私の隣に移動してくるMEIKO姉さん。

「思ったんだけど、そんな甘いの大丈夫なの？」

「はい。家だとしても遠慮してしまうんです」

「遠慮しなくても、あんたのマスターならそう制限かけないでしょ」

「でも、なんだか浮いてしまう気がして」

「結構心配性なのね。あんたはいい子だから、もつと自信を持ちなさいよ」

「なんだか、不思議ですね」

「？ 何が？」

「いえ。私は今日初めてここに来て、今日初めてMEIKOさんや町谷さんと会ったのにまるで最初から知り合いだったみたいなの……」

そう。MEIKO姉さんのフレンドリーな口調ですっかり彼女の波にのまれていたが、私と彼女らは初対面なのだ。

相手がいくら優希さんやリンちゃんやレン君を知っていたとしても、私の事はあんまり知っていないしから。

「ああ、それはあんたのマスターが結構話してくれたのよ」

「優希さんが？」

「歌えない事とか、アンドロイドとか、ね」

「――」

優希さんが私の知らないところで私の話題を話してるとは。

「マスターから聞いたと思うけど、結構な回数一人で来てるのよね」

「優希さんが、ですか？」

「そうそう。それでマスターがちよつとした軽いカウンセリングしてるの。まあ簡単に言うとならぬ相手ね」

「それで私の話題が出ていた、と」

「その様子だと、あのマスターこっちに来て相談してるってこと言ってるさそうね。ま、マスターとしての威厳もあるんだから仕方ないっちゃ仕方ないんだけど」

私が紅茶に視線を落としていても、まだMEIKOさんの一人語りは続く。

「言っても、『マスター』は『人間』なのよ。私達に『VOCALOID』としての悩み」があれば、『マスター』としての悩み」もあるのよ」

「だから、マスター同士である町谷さんに相談を」

「そういう事。私達はあんた達と違ってもう大人だから、細かいところの悩みは違うんだけど」

「私もまだまだ子供ですか……？」

「子供よ子供！ 年齢なんて所詮私達にとってキャラクターとしての位置をある程度格付けるための設定に過ぎないだから」

「……そうなんですか」

「要は中身よ。心、精神、魂。『Ghost in the Machine』」

「ここぞとばかり、顔を近づけてくるMEIKO姉さん。」

「それに威圧され、思わず下がってしまう。」

「でも、私達からしたら、一番人間らしいのはミクかもしれないわ」

「え……」

くすりと笑って、彼女は視線を前に戻し、いつの間にか置いてあつた麦茶を飲んでい
た。

でも麦茶の割には氷が大きく、グラスも少し見たことのないもの。

それを躊躇なく少しだけ飲んで、また向き直る。

「あんた十中八九V.A.W.Cで働いたことないでしょ?」

「はい。話だけなら聞いたことがあります。リンちゃんもレン君も、時々出てますから」

「そこでは誰が働いてるか知ってる?」

「誰って、VOCALOIDじゃないんじゃないですか?」

「そう。VOCALOID。それもおびただしい数のね。さて問題。このVOCALOID

IDの中で一番数の多いVOCALOIDは誰でしょう?」

「えっと……私、ですか?」

「正解！　じゃあ逆に数の少ないのは誰か解る？」

「えっと、MEIKO姉さん？」

それを聞いて、やれやれと首を横に振る彼女。

私はその行動の意味を後で理解することになる。

「不正解。正解はKAITOよ」

「あ……でも、最近世に出回ったVOCALOIDはどうなんですか？」

こんな事例が起きていても、価格が高騰してても、やはりVOCALOIDの開発は止まらない。

そう。こういったものを作れば売れるという、世間の流れに変わりつつあるから。

悲しいけど、でも、そういうものだ。

「あー、そのことだけ。発売当初はいつもと変わらない値段で売り出されてるのよ。それからしばらく様子を見て、価格を引き上げてるらしいわ」

「確かに、新しい物と言っても売れないと意味がありませんもんね」

「そうそう、って話が脱線しちゃったわね。で、一番数の多いミクはミクで、一番数の少ないKAITOはKAITOで、みんな同じ性格だと思っ？」

「いえ、そうは思いません」

町谷さんからさつき聞いたからだ。

VOCALOIDはマスターの望む望んだ姿を取る傾向にある、と。

「ならもう解ってるんじゃない」

「えっ……何が、ですか？」

「自分は自分であることに自信を持ちなさい。自分が存在している事に喜びを持ちなさい。今ある些細なことでもいいから幸せを見つけなさい」

MEIKO姉さんの言葉。

忘れて挫けそうになったら、またこの言葉を思い出そう。

答えが見えなくなったら、またこの言葉を思い出そう。

私は、その言葉を深く胸の奥に刻み込んだ。

第21話 包丁さんの受難

Outside

所変わり、ここは包丁さん達の世界。

今は夏奈子の影響で杏・笹・葵・牡丹・椿の5人の包丁さんが欠けた状態である。

今は皆からもっとも信頼を受けている桔梗が仮のリーダーとして存在し、そのフォローとして甘藻がサポートに回っていた。

少しばかり静かになったこの世界で、残された包丁さん達は今日を生きる。

「ふわあ……」

黒の少女が、あくびを漏らす。彼女の朝は遅い。

彼女の名前は鈴蘭。特殊な包丁が媒体となった包丁さんだ。

なので他の包丁さんとはまた違った能力を持っている。

元から左手に握っていた包丁を確かに握りしめ、彼女は母屋に向かう。

太陽がもうすぐ真上を向こうとしているからか、温められた地面からの放射熱の影響か、暑い。

どうという事ではないのだが、黒い服を着ているからかその影響で余計に日光から受ける熱を吸収してしまう。

そんなことを鈴蘭は考えながらも、母屋に近づいてきた時不思議な音を聞いた。

「うー！」

「あ、瓶子！ やったな！」

バシャバシャと、水が跳ねる音と、楽しげに聞こえる二人の声。

確かに母屋には井戸があり、水の音がするのは何らおかしくはない。

でも何故川で釣りをしているわけでもないのに、何故こんな音が聞こえるのか。

そして、楽しげに聞こえてくるこの声はおそらく瓶子と千鳥の物だろう。

楽しげな様子に惹かれた彼女は、裏庭の方から入ってみる。

元から、鈴蘭の家は母屋から見れば裏にあるから、そちらの方が早く母屋に入ることが出来るのだが。

「あ」

途端、全身に冷たい物がかかる。

「少し火照った体を冷やすにはいいのですが……あまり良いことではありませんね」

「すずー！」

バシヤ！

「……………」

二度目。一度目はおそらく千鳥による物だろう。今度は瓶子だ。

鈴蘭が二人の方を見ると、二人も二人で全身が濡れている。

その手には柄杓と桶があった。

多分、打ち水から水の掛け合いっこでも派生していたのだろう。

千鳥のは完全に事故だが、瓶子は意図的だ。それでも彼女は怒らない。

そもそも瓶子を解っているからだ。

千鳥に水をかけられたのを見て、掛け合いっこの参加者が増えたと思ひ込んでしまったのだろう。瓶子とは、そういう者だ。

しかも鈴蘭は瓶子からかなり好かれていられるらしく、それが思い込みに拍車をかけたのだろう。

短い時間で鈴蘭はそう憶測する。

「ごめんよ、大丈夫かい？」

心配して千鳥が駆け寄ってくる。

「大丈夫ですよ。あまり気にもしてませんから」

「んー…もうちよつとき、鈴蘭もパーつとしない？ そんなんじや面白くないよ」
「どうでしょうかね。でもこの私が最近は普通になつてきましたし。あまり活発なもの
どうかと思つてこういつた『形』をとつてるわけです」
「本人が言うならある程度仕方ないけどさ、あたしからすればもつと楽に居られるあん
たもあると思うんだけどね」

鈴蘭は包丁の形を変えられる異例の包丁さん。その形によつて性格も大きく変化す
るのだ。

それも、媒体となつた包丁の影響だが。

今は小型の出刃包丁の形をとっている。

普段はパン切り包丁なのだがあののこぎりのような刃は、鈴蘭の肉体に影響を及ぼ
す。

なので、自宅から母屋に移動する時は特に理由がない場合この形をとっている。

彼女が先ほと言つたように、千鳥や甘藻、杏や笹といった明るく活発な包丁さん達よ
り、桔梗や竜胆、稲や月桃のように落ち着いた者の方が、自分らしいと思つているのだ。
ただ、それを見ると暗く見えてしまう千鳥からすれば、もつと自分のように活発な少
女の方が鈴蘭らしいのではないか、と思つている。

無論、それは千鳥だけがそう思っているわけではないのだが。

「クシユーン！」

体が火照っていたとはいえ、水をかけられれば体温は下がる。

いままで騒いでいた二人が大人しくなったのと、くしやみに違和感を覚えたのか、奥から母屋の桔梗が出てくる。

「鈴蘭さん、いらしてたんですね。つてどうしたんですかそんなにずぶ濡れで……」

「あ、桔梗実は……」

千鳥が一部始終を話すと納得したように桔梗は縦に首を振った。

「鈴蘭さんは体を冷やすといけませんから、お風呂に行つて来て下さい。服は乾かしておきますから」

「へーが乾かす！」

「では服は瓶子さんにお願ひして。千鳥、貴女には少し話があります」

「あ、あたしはちよつとこの後狩りに……」

「狩りならついでこの間皆さんと行きましたよ？ それに貯えも十分ですから、必要はありません。今回は不可抗力という事で軽くですから、そんなに怯えなくても大丈夫ですよ」

「な、なんだあ……」

洗濯好きな瓶子は自ら名乗りを上げる。流石に無理やり脱がそうとはしなかったが、

鈴蘭の方をじつと見ていた。

変わらない笑顔で割と残酷なことをいう桔梗であったが、そこまで怒っている様子はないことを理解した千鳥は胸を撫で下ろす。

そして鈴蘭は言われたように風呂場に向かい、瓶子が後からついてきた。

風呂場の脱衣所の籠には既に誰かの着物が入っており、風呂場からも水音がする。

おそらく誰かが入っているのだろう。

しかし鈴蘭は基本的にそういうことは気にしないタチなので、着物をよく見ることもなく脱いだ服を瓶子に渡し、風呂場に入る。

瓶子は受け取ると嬉しそうに洗濯道具を持って裏庭へと走っていた。

「お、鈴蘭ちゃんじゃないか。こんな時間に珍しい」

先客は稲だった。

もう彼女は体を洗い終えたのか、湯船に浸かっていた。

「いえ、打ち水に巻き込まれてしまつて、服が濡れてしまいましたから」

「なるほど。私は普通に入つてるだけさ。この時期は暑くなってきたからね」

「なるほど、それで」

不思議と稲は鈴蘭が入ってきて嬉しい様子。

何か考え事をしていたわけでもなく、ただ単に温まっていた彼女にとって、自分の仲の良い者が入ってきてくれたことが嬉しいのだろう。

「足の方は大丈夫みたいだね」

「あ……」

「ここではつとした。」

まだ自分の包丁が出刃包丁だったと。

母屋に来てから少し特殊なことがあったからか、それを戻すのを忘れていた。

「すみません少し待っていてください」

「そうしてまた自分を傷つけるのかい？」

「……あんまり、昔のことは思い出させないくださいませんか？」

「そのまま自分を殻の中に押し込んで。またあれだったら相談に乗るけど」

「その時はお願いします」

鈴蘭は生前、荒れていた頃に巫女である稲から簡単なカウンセリングを受けていた。

それは稲の好意なのだ。

故に稲は本来の鈴蘭を知っている唯一の包丁さんなのだ。ただし、稲が他の者に鈴蘭

について話していなければ、だが。

「で、どうするんだい？」

「このままで構いません。どのみち、私は稲さんには勝つことは不可能ですからね」
「例え野蠻で血に飢えた私になろうとも」

「鈴蘭ちゃん、そういう事は嘘でも言うもんじゃない」

桶を持つて体を洗う鈴蘭に、稲が少し怒った口調でそんなことを口にした。

「言霊というのを覚えてるか？」

「確か、言葉に魂が宿るってお話ですね。詳しいところまではその時の私では聞く耳も持たなかったですが」

「それか。それならまた説明しようか」

稲は言霊について説明し始めた。

言葉には魂が宿る。それが発言したことを本当にしてしまうという話だ。

厳密には違うのだが、稲は解りやすい様に噛み砕いた上にある程度省略して伝えた。
「なるほど。それなら……」

「口にするならいいことを口にするってこと。それがコツさ」

それなら、意識してみようかと鈴蘭が思ったところで。

稲の視線が鈴蘭のある一部分に向けられていることに気付いた。

「……稲さん?」

「ああいや、何でもないよ」

そう言いつつも、稲の視線は鈴蘭の一部分……胸に向けられている。

「何でもない訳ないじゃないですか。何か思うことがあるなら口に出して言うてみてください」

「……なら言ってもいいのかい?」

「私の話を聞いていただいた、昔の仲じゃありませんか」

この発言により鈴蘭が後悔するまで後5秒。

「なんでそんなにも鈴蘭ちゃんは胸が大きいんだ! 私達となら……いや、もつと食には困ってたはずだろう?!」

「……へ?」

あまりにも突然でわけのわからないような稲の発言に、流石の冷静な彼女も驚き素っ頓狂な声が出る。

「年も私の方が年上で、背も体もあまり変わらないが私達の方が大きい。でも何故それなのに、私達を簡単に超えるほどあるんだって聞いてるんだ!」

「あの、そんな事を急に言われても私には……」

「私達と同世代ぐらいででスタイルのいいのは百合ちゃんぐらい……でもそれに比べて

もまだ3歳も幼いというのに……」

「……………」

至つて冷静で、つい今まで言霊について喋っていた本人がこんなにも変われるものだろうか。

しかも、胸の大小の問題で。

「もしかして好きな人が居てもう既に揉まれ「それは流石にありません」……ではなんだ。天性的なものというのか？」

「かもしれないね。あまり私はこの話題は皆さんとしたくありません。過去に「この件でひどいこと」もありましたし」

【この件でひどいこと】。

それはある時、といつても夏奈子が包丁さんについて知る前の出来事だが。

桔梗が現世に呼ばれた時、外からの土産としてその時代の雑誌を持って帰ってきたことがあつて。

その雑誌に胸を大きくさせる方法が載っていたらしく、皆がバストアップ体操というものを実践しているところを偶然、散歩中の鈴蘭と瓶子が通り過ぎたのだった。

以下、回想。

Side 鈴蘭

皆が胸の方に手をやって、マッサージしているように見える。

まるでそれが寄せているようで、私からするとあまりその奇妙な行動は理解しがたい物であった。

それでも、皆が朗らかな顔をしているのと、自分が皆と違うのが相乗して、時分でもやってみようかと思つたところで。

「うー?」

隣にいた瓶子が何をやっているのかわからずに、態々しやがんでまでして私の顔を覗き込んでくる。

私と瓶子ではかなり身長差があるからだ。

そのせいかどうか知らないけれど、膝で挟まれた胸が余計に大きく見えて、やはり色っぽく見える。

「皆さんが何をやっているのかは解りませんが、とりあえず真似てみるのもいいかもしれませんね」

「おー! へーもやるー!」

瓶子は順応が早く、さっそく胸のマッサージ? を始めてしまう。

やはり裏がなく、ただ単に素直な彼女を羨ましく思いながらも、私も胸に手を当て。「何で瓶子と鈴蘭がいるんだよ」

甘藻さんに言われてしまった。

私達がこの場にいることはあまりおかしいことではない。ただ単に散歩から帰ってきただけに過ぎないのだ。

その発言で皆の視線がこちらに集中する。

「あの、私達はお邪魔でしたでしょうか……？」

「あーうー？」

「あ、いえ、そんなことはないね？」

「鈴蘭ちゃんはさておき、瓶子ちゃんはきつとみんなで何かしてるのが楽しそうと思ってきましたんだよ」

「あー、うん！」

「あ、そういえば確か瓶子さんと鈴蘭ちゃんは散歩に行つてたんだよね」

牡丹さん、稲さん、芒さんが答えてくれる。

そもそも、何をやっているのか解らない私からすれば参加する権利が有る無しが解らない上に、そんな物が存在するかも解らないので、甘藻さんの言っていることの意味が解らない。

でも、牡丹さんの発言からすればそういったものはなさそうなので、少しばかり胸を撫で下ろす。

といつても、自分の手は未だに胸の上にあるのだが。



なんでもこれはバストアップ、すなわち胸を大きくするためのマッサージらしく。

暫く続けていたのだが私は椿と稲さんの視線が痛かったので、途中でその輪から抜けることにして。

無論その間は暇だったので、丁度そこにあつた現世の雑誌を読んでいた。

「なるほど、一番効果的なのが好意を持った男性による、胸部の按摩（あんま）ですか」かなり遠まわしな言葉を使った理由は言わずもがな、他の今やっているであろう皆に解りづらくするため。

こんな言葉を覚えたのも、この場にはいないこの雑誌を齎した、桔梗さんの影響なのだが。

そして、皆もマッサージをやめて雑誌の元に集まり、別の方法に移ろうとしていた。

私は読むことをやめ、必要としている皆に渡す。

そして一つ得られた結論。

「とりあえず揉めつてことなんですね。なるほどなるほど！ 確かに殿方に揉まれて一番効果を発揮すると言えど、揉むだけで効果はあるみたいですからねえ」

芒さんの声でどの項を読んでいるのかを教えてくださいました。

他人同士で、異性でなくとも良いから、揉みあえといことだ。

そのようなことで胸が大きくなるのだろうか。そもそも私達は成長しないし、例えそれで大きくなったとしても、死亡して復活すればまたその努力も無に帰す。

そんなことを言っているにも、藁をもすがる思いでやっているのであればその者を否定することはしない。

「私たちの間で揉めつてか？」

「結論からするにそうですね」

甘藻さんが口にする。それで皆は戸惑うように顔を合わせたりしていた。
……ただ純真無垢な一人を除いて。

「うー！」

「え」

そう、瓶子だ。彼女以外いないのだけれど。

そもそも、今まで遊びと勘違いしてやっているのだから、このこと自体にもそう思つて取り掛かるわけで。

となると、彼女は全力で。

「へーももむー!」

「きや…ああああああああ!!」

最初に悲鳴を上げたのは椿。

彼女は前からも相当胸の事を気にしていた。

それが増えるのなら万々歳なのかもしれないが、あくまでそう思えるのも自分が被害に遭つていないからだらう。

「ちよつ……やめ……やめなさい瓶子!!」

顔を本当の椿の花の如く真っ赤に染め上げ、瓶子を引き剥がそうとするも、体格の差か力の差か、それとも敏感な部分を集中的に押さえられているからか。

上手く引き剥がすことが出来ず、かつそれをしり目に胸を揉む瓶子。

「はは! いいじゃん椿、胸大きくしたかったんだろ?」

甘藻さんがその様子を見て大笑いするが、私にはあまりにもその発言と行動が地雷にしか思えなかった。

そもそもこういういった悩みは他者にいかに気づかれず、それに羞恥も伴う物であれば尚

更。

それを見世物にされお笑い草にされれば、何かが起こるといふ事を空気で感じた。

この場合、この表現は本当に正しかったと後から思う。何せ、二重の意味でもそうだったのだから。

「く……こうなりや死なば諸共よ！ 皆被害にあえばいいー!!」

「届け奇跡の力よ！ 今回ばかりは邪道でも邪悪でもかまわない！ あいつらの胸をは
じけさせろ！」

生前。神子として有名だった彼女は、包丁さんとしての力以外にも、能力がある。

そもそもそんなものはある意味誰にでもあるわけではない。

それは、奇跡を起こすというものだ。大きな奇跡は私は見たことがないが、小さな奇跡は見たことがある。

そして……その発言が本当に起こるのは、事実。

「……う？」

でも、何故か起きなかった。

どうしてだろう。

「あれ?! どうして!?!」

当の奇跡を行使した本人すら驚いているという事は、不発というわけではなさそう

だ。

では、どうして……。

プチンッ。

「え」

そんな音を立てて私の来ていた服、しかも胸の部分が激しくはだけた。

ボタンで留めてあるから、着物のようなはだけ方はしないのだが、それでもはだける物のはだけるわけで。

「！」

となれば無理やり服を戻して胸元を隠すのが先決。

……その判断が遅れて皆にまじまじと見られてしまったが。

正直、泣きたい、です。

「でもどうしてティアの服だけ？」

「あ、そうか」

百合さんの問いに稲さんが思い出したように声を出した。

「鈴蘭ちゃん的能力だよ。皆が鈴蘭ちゃんに近くにいるから、私達に幸福として胸がはだけなかつたんだ」

「なるほど！ 今回もまた鈴蘭ちゃんに助けられた、という事ですね！」

「でも椿ねえの能力を破るなんて……すごい、です」

皆が賞賛の声をくれるけれど、私には関係ない。

せめて、現状をどうにかしないと。

「なら、その幸福を何故私に向けなかったあああああああ!!!」

それに、そこで激怒してこちらに襲い掛かってきている椿もどうにかしなければ。

「……………」

とりあえず、考えるのをやめて椿をどうにかしよう。

今の包丁では勝ち目もない。

なら作ればいい。私の包丁さんとしての能力で。

金属音が鳴り響く。

私の前には大きな大剣のような包丁が地面に突き刺さり、壁の如くそびえる。

そして、それは紛れもなく私の包丁だ。

立ち上がり、柄を持ち引き抜く。

普通の包丁とは比にならないほどの重量感が私の腕にかかる。

それを片手で扱う。

「刃の大きさ、最高。刃の形、反り型。刃の状態、良好。用途、大型魚類、哺乳類の切断。値段、高級品」

これから構成される私は……

「というわけで、向かってくるならば手加減不用ですわね。さあそちらもかかってきなさいな。私が叩き潰してあげますわ!!」

「ちよ、それ包丁じゃな……い」

「過去でのある国では大型の哺乳類を、そう、鯨を捕え食していたのですわ。そして、そのためにこういった包丁が作られたことも確かにあるということ」

「というわけであまり他の方々にも迷惑はかけられませんわ! いくら私の他者に被害を与えない能力があると言えど、一瞬で決めさせていただきましようかねえ!」

「あ、これは完全に鈴蘭も暴走してる」

「うわあ、私の包丁より大きなああれ」

「私ほど……いや、あれほど太くはないな」

周りにいる包丁さんが何か言ってる気がするけど、私には関係のないこと。

早く決着をつけて戻してもらいましようかね!

自分の発言で先ほど切りつけていた椿に逆に切りかかる。

彼女ほどなら動いてかわすと思っただが、動かない。

それに違和感の一つも覚えず私はその刃を振り下ろした。

結果は私の勝利で終わった。流石に椿が包丁を咄嗟に守りに使ったというのに、それをバターの様に切り裂き肉体も真つ二つにしてしまったのだが。

それからというものの、私は今まで通りの包丁の形に戻して落ち着いたところを瓶子に胸を激しく揉まれ、肉体的に疲労した状態で桔梗さんの説教を受けるといわけのわからない拷問を受け。

椿が6歳も下の私に暫く怯えたりとある意味散々だったのだ。

ということ、私からすれば大変な羞恥を全員にさらし、肉体と精神を多大に浪費してしまつた事件であつたため、最も忘れたい出来事である。

あれから原因となる胸の話題やそういった話題が載つた雑誌は全く読まなくなった。

「ああ、あれは散々だったね」

稲さんが遠い目をしながら私に哀れみの視線を送つた。

「でもさ」

「？」

「こーうやつてお風呂場で裸の付き合ひしてるのに、なんで外だと恥ずかしいんだらうね」
「それを経験してない稲さんがいいですか……」

もう、どうにでもなればいいかな……

第22話 包丁さんの平凡

Side 鈴蘭

風呂場から出たはいいものの、一つの問題に突き当たった。

「そういえば、私の着る服がありませんね……」

理由は濡れたから洗濯ついでに、瓶子さんが持つて行ってしまったからで。

リボンは髪留めの代わりにも使っているから、必ず持ち歩いているのだけだ。

とりあえず言われるままに行動するといけない場合もある、と思いながら打開策を考える。

ちなみに稲はあの後先に上がってしまったっており、伝言として使う事さえ今では後の祭り。

ならばどうしようか。大声で呼べば多分昼寝をしているであろう、薄雪と柊を起こしかねない。

この姿のまま居間に行ってもはしたない。バスタオルの様な物は無く、普通の体を拭くためのサイズ程度のタオルしか無い。

本格的に悩んでいるとき、一人の気配を感じた。

「あら？ ティアじゃない。こっちに來てたのね」

「あ、リリイ」

「どうしたの？ 見たところ衣服がないみたいだけれど？」

丁度通りかかったリリイが私に気づいてくれた。

異変にもすぐに気づいてくれた事に感謝しながらも、私は事情を説明する。

彼女はなるほどと相づちをうつと、待っててと言いつつその場を立ち去った。

しばらくして、リリイがやってきた。

「ごめんなさい、こんな服しか無くて」

彼女が持ってきたのは、彼女がいつも着ている赤紫色のワンピース。

話によれば、泥などで汚れたときのための替えの服だそう。

実際、いろいろな服を持っているのは服作りが趣味の牡丹さんだけ。

私も自宅まで行けばとりあえず替えの服がある。

そこまでこの服は貸してもらおう、そう思つて着てみると。

「……………」

予想以上に肩幅が広く、片方ずればそのままストンと落ちてしまいそう。胸元の襟の部分が張っておらず、少し下がったそこからは谷間が見えてしまいそうな程。

袖も長く、親指以外の指を出すのがやつとだ。

「やっぱりティアには大きかったかしら？」

「いえ、何とかなりそうですが……」

「無理しなくても……あ、竜胆さん」

「はい、なんですか？」

また、丁度通りかかった竜胆を今度は百合が引き止める。

私が事情を説明する前にあらかじめの説明と、私の姿を見てある程度察してくれたのか、首を縦に振ると彼女もまた持ち前の足でどこかに言ってしまった。

「やっぱり竜胆さんは足が早いですわね。少しは見習わないといけないかしら」

「リリイはそのままが一番ですよ。私のように、コロコロと何もかもがかわってしまう訳ではないですから」

「逆にティアは変わりすぎよ。それにあんまり元気が無いように見えるから、もう少しだけ元気になってくれれば私達にとってもありがたいの」

「元気に、ですか」

「そう。あなたもまだ幼いんだから、杏さんや笹さんの用に外で無邪気に遊んでいた方が、幾分かそれらしくてよ」

「……………」

今日千鳥さんにも同じ事を言われた事を思い出す。

私はその事の真意が解らない。どうして私はもつと無邪気で元気でいるべきなのだろうか。

今の私が悪いと皆が言っている訳ではないが、今日になって二人に言われてしまった。

それも、そのうちの一人はリリイから。

「持ってききましたよ」

深い部分まで考えようとしたところで、竜胆さんが戻ってくる。

思考を閉じて、今は今の問題を解決しよう。そう思って竜胆さんの持ってきてくれた服を着る事に専念するのだった。

服のサイズはほぼぴったり。少し余裕があるくらいか。

服についているリボンは、先に乾いていた私のリボンと付け替えておいた。

「そうだ鈴蘭さん、桔梗さんが呼んでいましたよ」

今すぐ自分の服を取りに行こうと思っただが、そんな中竜胆さんに呼び止められる。

「? 何かありましたか?」

「朝ごはんを食べていないそうですね。そのことと、お昼ごはんを作るのを手伝ってもらいたいんだそうです」

「解りました」

自分の服とは違うため、少し勝手が違うことに戸惑いながらも、包丁を動かす音が聞こえる台所へ向かう。

と、後ろから竜胆さんが付いてきた。

「竜胆さん? こっちは台所ですよ」

「私も頼まりましたので」

なるほど。それならば納得だ。

それにしても、竜胆さんと桔梗さんが作るのならまず肉料理はありえないだろう。

ちなみに『今の』私は野菜派だから何ら問題はない。むしろ願ったりだ。

という事は今日の晩御飯はお肉でしょうか……?」

献立を考えるという事をしないが、現在はこういった人達に似せて包丁の形をとっているのだから、自然とそんなことが頭をよぎる。

台所に着くと、後姿の桔梗さんがキャベツを切っていた。

「桔梗さん、連れてきました」

「ご苦勞様です。竜胆さん、申し訳ありませんが変わって頂けますか？」

「はい」

入れ替わるように持ち場を離れる桔梗さんは、私の顔をしっかりと見つめていた。

その吸い込まれそうな紫色の瞳に魅了されたように、私の体は動かなくなる。

桔梗さんは特殊な能力を持つてはいない。強いて言うなら自分の媒体の特性上、とても力持ちであることぐらいだ。

何を言われるのだろうか。怒られるのだろうか。

「鈴蘭さん、今日はいつにも増して随分と遅かったですね。どうかされましたか？」

「いえ……何もありません。起きるのが遅かっただけです。寄り道はしてませんので、ただ単に」

「嘘はついてないようですね。ここ最近、貴女は起きるのが遅いような気がします、何か訳でもあるのですか？」

「……ありません」

「嘘ですね」

目を逸らした時点でそういわれてしまう。それだけではない。桔梗さんの後ろで野菜を切っていた竜胆さんにも言われてしまった。

「本来なら、嘘を吐くようなことはしない貴女が嘘をついても、すぐに解るものですよ。特に仕草で、です」

「それはともかく、何故竜胆さんが解ったのですか？」

「話を逸らすとは、感心しませんね」

「……………」

「それは私の家が鈴蘭さんの家と近いからです。ここ最近、夜遅くまで灯りがついてるのが見えますから」

二人からの猛攻。それにあえなく私はぼきりと折れてしまった。

「すみません。夜、寝付けないのです」

「寝付けない？」

「はい。こういうと少しおかしいのですが……一人が寂しいのです」

「……………」

「昼はここに来れば皆さんと会うことが出来る。交わることが出来る。たとえそれが叶わなくても、様々な音や日の光で照らされ遠くまで見渡し探すことが出来る。」

でも夜になると、辺りが暗くなり見渡すことが叶わなくなり、音も直静かになり、孤独になってしまふのです。

早く寝ることが出来れば、また日が昇り、明日がやってきます。でも、明日など不確定な物。いつ何時、何が起こってもおかしくはありません。未来ですから。

今でも思います。今のような幸せな日々が、もし夢で、『その日』が訪れれば、今まで存在したものが無くて。それが、私にとっては怖いのです」

そうなれば、もう私を見てくれる『ヒト』はもういない。

そうなれば、私はもう私で居られなくなる。自分を隠しているこの私でさえも。

そうなれば、私は完全に『カミサマ』になってしまふのだろう。

「鈴蘭さん」

「……はい」

「今日は私と一緒に寝ましょうか」

「……え？」

「それがいいですね」

まるで名案だと言わんばかりに竜胆さんも賛同する。

私は突然の提案に戸惑いながらも、思わず首を縦に振ってしまった。

「それでは決まりですね。今夜、遅くならない内に……いえ、私が帰る時に一緒に帰りま

しよう」

そういうと桔梗さんは私の頭に手を置いて、優しく髪を解くように撫でてくれた。温かいその感触は今にも縋り付きたいものだったが、理性でそれを抑え込み竜胆さんの手伝いをするのだった。

朝の分も食べないとな！ とたくさんご飯を盛ってくれた千鳥さんと甘藻さんに戸惑いながら、なんとかお昼を終えて居間で膨らんだお腹を熟しながらゆったりする。

「食べてすぐに寝ると牛になりますよ」

竜胆さんがしつこく言ってくるが、私は正直もう動きたくないほど食べたので、どうしようもない。

「仕方ないさ。あれだけ食べたんだから動けないのも解つてあげなよ」

「といつても、起きていないと結果的に消化に悪いですし」

遠くの方から味方をしてくれる稲さんだったが、竜胆さんの言葉に私は体を起こし、縁側に座る。

消化が悪かったらいつまでたつても熟すことは出来ない。

そうとなれば、夕食を食べることが出来なくなり結果的にリズムバランスも栄養バランスも崩れてしまう。

折角桔梗さんが考えてくれているのにそれは申し訳ないという気持ちだが、そうさせたのだ。

「今日の晩御飯は……流石にリリイに相談してパンにしてもらいましょうか。お米は当分口にできそうにありません」

「……………」

そんな事を考えていると、白い影が私の近くに現れた。
今にも消えてしまいそうな儂い雰囲気醸し出しているのは、薄雪。

「どうかしましたか？ 薄雪」

「……………眠い」

そういうと、何の断りもなしに私の膝の上に頭を置き、寝転がる薄雪。
顔は上を向いており、下を向いている私と視線が合う。

「薄雪も今日は少し多めに食べていましたからね、眠いんでしょう？」

「うん……………ふあ……………」

小さなあくびをして、瞼を下す彼女。

寝る子は育つというのが包丁さんであり『カミサマ』である私達には一切関係ないこと。

いい様に言えば、『老いることがない』のだ。成長とは、一種の老いである。
「(ゆつくりお休みなさい。薄雪)」

私は静かに彼女の頭を撫でて、心の中で語りかけた。

「隣いいですか？」

と、意外な人が現れる。

芒さんだ。

「はい。構いませんよ」

確かに芒さんとは仲がいいのだが、何故か会うことが少ない。

現に彼女は様々なことが出来る上に、どちらかというと言葉が活発な人だから、同じ場所に留まるというのは性に合わないのだろうと推測する。

「久しぶりですね。芒さんとお話しするのは」

「いつもご飯の時に一緒に会ってるじゃないですかー」

「いえ、会っていると云っても顔を合わせているというだけですから」

「そういえばそうですね、何故でしょうか？」

まあ、だからこそそうやって会っている時は比較的長い時間話しているので、平均化すれば皆さんと変わらない程出会って、話しているのだろう。

「そういえば、今日立派なウナギが釣れたんですよ！今日の晩御飯はスタミナを付け

るためにも鰻丼で決定ですね！」

「芒さん。気持ち解りますがそんなに大声を出すと、薄雪が起きてしまいます」

でも鰻丼とはいいいことを聞いた。土用の丑にはまだまだ早いのが、一番調理が得意でそれが好物である彼女が言っているんだ。ほぼ夕食はそれで確定だろう。

「鰻……？」

「あ、起こしてしまいましたね。すみません薄雪、五月蠅くしてしまいました」

「いい……鈴蘭……あつたかいから……」

「日差しは眩しくありませんか？」

「大丈夫……」

「薄雪ちゃん、ごめんなさい。ちよつとはしやぎすぎちやつてたね」

「ううん……芒……悪くない」

「やあ。」

突然の妙な音に私はピクリと体を震わす。

それが原因で薄雪を驚かせてしまい、私は謝罪の言葉を述べる。

一方の芒さんはその音に反応して辺りを見渡した。

「あ、いたいた！ ほらほら、こっちにおいでー」

母屋の裏庭の入口。そこには一匹の猫がこちらの様子を伺っていた。

薄雪もそれに興味を示したのか、目を擦りながらも起き上がる。

「あの子は、芒さんのところの」

「うんそうだよー」

猫も少し警戒していたようだけれど、芒さんの姿を見つけたからか、ゆっくり近づいてきて芒さんの膝の上に飛び乗った。

日差しが気持ちいいのか、丸まってそのまま目を閉じてしまった。

「えへへ、やっぱり可愛い」

ご機嫌な芒さんはそんなことお構いなしで、頭や背を撫でる。

それが彼女にとって気持ちいいのかよくは解らなかったが、少しばかり私も興味がそそられる。

「鈴蘭ちゃんも触ってみる？ 気持ちいいよー」

「で、ではお言葉に甘えて」

ふんわりとした毛並の感触と動物の温もりが、私の掌に返ってくる。

するとどうしたことか、ゴロゴロと喉を鳴らし始めて、私は驚き手をひっこめた。

それと入れ替わるように、ゆっくりと伸びてきた薄雪の手が猫に触れ、ゆっくり撫で始める。

「あはは、鈴蘭ちゃんは動物に慣れてないんだね」

「はい、申し訳ありません」

「謝る事じゃないよ。それにこの子も、気持ちいいって言ってくれてるんだから！」

「えっ、芒さんは猫の言葉が解るんですか？」

「ううん？ でも雑誌で読んだことがあるんだよー。猫が喉を鳴らしたら、気持ちいいって言うてるんだって」

「そうなのですか」

そう考えると、先ほど手をひっこめてしまったのも猫に対して申し訳ない気がする。

でも今は薄雪が堪能しているからやめておこう。

互いに年少と言っても私が姉なのだから。

第23話 包丁さんの思い

Side 鈴蘭

私は薄雪、柎とで縁側に座っていたのもあつて少しうとうとしている。

因みに私の包丁は既にパン切り包丁の形に戻してある。もう出刃包丁ではない。

「おやつですよー」

桔梗さんの声が後ろから聞こえてきた。

そうか、もうそんな時間なのかと首を横に振り無理やり眠気を覚まして立ち上がろうとすると、薄雪を膝枕していたことを思い出して慌てて座りなおす。

それでも、早く行かないと大きい物は杏や笹に取り残されてしまう。

しかし薄雪と柎を置いてこの場を離れるのも可哀想だ。

「……そういえば杏や笹は既に呼ばれていましたね」

今この世界にいる包丁さんとしての幼子は私を含めて3人。

次によばれるのは誰だろうか。

そんなことを考えていると、眠っていた薄雪が目を覚ました。

「薄雪、おはようございます」

「うん……おはよう……」

すると自分の包丁を持って外に出ていく彼女。

「呼ばれたのですか？」

「……うん」

それだけ残して薄雪は消えた。

さて……これで後2人、ですか。

とりあえず柎を起こしておやつを貰おう。

よく日向ぼっこをしている彼女でも、さすがにここまで寝ていると夜に響くだろう。

「柎、起きてください」

「……？ 薄雪は？」

「彼女ならもう行ってしまいました」

「そう」

「それより、おやつの時間ですよ。今日はなんででしょうかね」

「寂しい？」

不意の彼女の発言に戸惑う。

普段ならそういうことを言わないと思つて居た頃も幸いしたのだ。

寂しい……寂しいですか。

「そうですね、寂しいですよ。そういう柗は寂しくありませんか？」

「寂しい……けど、まだ皆いる」

「柗は強いんですね」

「ここでおやつを思い出して二人で食卓に移動する。」

「桔梗さん今日のおやつは——」

ドゴオン！

「！」「っ！」

その轟音に驚いて柗が私の方に飛びつき、それによって掛かった体重でうまくバランスが取れなくなり仰向けに倒れる。

足が不自由だところという事もあり得るのだ。

「柗、大丈夫ですか」

「うん、大丈夫」

運よく柗のいる反対側に倒れることが出来、倒れた衝撃で彼女が投げ出されることもなく、私の胸の中にすっぽりを収まっていた。

心地いいのか、少しばかりすりすり顔と顔を擦りつける柗。

それが可愛らしくて、頭を撫でる。

「……で、何か言い分はありますか？」

「……ない！」

「そうですか」

どうやら桔梗さんと千鳥さんが揉めているようだ。

何が原因で揉めているのか……いや、もう既に結果は出ていた。

既に桔梗さんの鉄拳が千鳥さんに振り下ろされようとしていたから。

「いけません！」

するとどこからか声がかして、大きな影が二人を阻む。

桔梗さんはそれを寸のところまで止めて、溜息一つ。

「『篝火』さん、貴女は優しすぎます。時にはお灸を据えなければいけません」

「いくら千鳥さんの悪行が過ぎたと言え、あまり体罰はよろしくありませんよ」

「ですが……！」

「今回の件は、私が鈴蘭さんの分を補えば済む話です。そして何も教えなければいい。嘘も方便と言うではありませんか」

間に入った大きな影は、『篝火』さんだった。

そもそもが年長組だけあって身長は桔梗さんや千鳥さんよりも高い上に、その身に纏っているマントが体をより大きく見せる。

彼女はほとんど母屋におらず、自分達から会いにいかなければ会えない。

でも母屋で何かがあった時は必ずと言っていいほど現れる。不思議な人だ。

それに、私の分とは一体……？

「あの、どうされたんですか？」

「あ、鈴蘭ちゃん」

稲さんが私達に気付き、私に対して視線が集中する。

と言つても、ここに居るのは椿、牡丹さん、葵、杏、笹、薄雪以外なのだが。

「鈴蘭さん、すみません。千鳥さんが貴女の分を食べてしまったのですよ」

「ごめんよ、それが鈴蘭の分とは知らずに……」

「あの、そのおやつとは一体」

「いきなり団子です」

たった今口の中の物をのみ込んだ様子の竜胆さんが答えてくれた。

なるほど。配分は一人一個の様ですが、私の分は何が違ったのでしょうか。

「リリイは来るのが遅かったものね。一回り大きかったのよ」

「それを間違つて千鳥ねえが食べて、日々の行い等々目に余っていたからか桔梗がどう

とう怒つた、というわけだ」

「全く、千鳥ももう少し鈴蘭みたいに落ち着いてればねえ」

「甘藻には言われたくない！」

確かに甘藻さんと千鳥さんは活発で元気な人達だ。

しかし、私から見ても甘藻さんの方が少し制御が効いているというか、理性があるというか、姉らしさを持っていると思う。

「何はともあれ、これにてこの件は終わりです」

ぽんと手を叩く篝火さんは自分のいきなり団子を、自分の持っている包丁で半分に切り別のお皿に添えた。

「でも、篝火さんの分はどうするんですか？」

「私は少々お腹を下してしまってますね。消化の悪い物は控えているんですよ」

「いきなり団子には確かにさつまいもが付き物ですが……いいのですか？」

「私がいいと言っているのですから問題ありません。ところで、薄雪さんの姿が見えないようですが」

「薄雪は……さつき呼ばれていった」

「……そうですか」

残念そうな顔をする彼女と、安心した様子の桔梗さん。

本当にここ最近では呼ばれ方が廢れてきているのか、その言われている者にしか呼ばれない。

呼ばれたからと言って必ずその人が呼んだかは解らないのも事実なのだが。

でもこの流れで薄雪が呼ばれたのであれば、きつとその人だろうと桔梗さんは思つて居るのだろう。

「では一つ余つてしまいますねー。これはどうしましょうか」

「篝火、お腹下してるなんて嘘だろ。貰つたらどうだ？」

「甘藻、私は本当にいいのですよ。私としてはお二方に差し上げるのが一番と思います
が、他に誰か食べたい方はいらつしやいますか？」

その問いかけに皆何も言わない。

「では決定ですね」

また自分の包丁で器用に切り分けて、私達のお皿に置く。

しかし終の事も思つたのか、半分ではなく私の方が小さかった。

その程度で私も駄々は捏ねない。

「それにしても薄雪ちゃんと呼ばれたか。向こうは順調そうで何よりだ」

「その分、こつちの人数が減つていつてるけどな」

「それは前も言つたけど、仕方のないことだよ。それが私達にとっての最後の代償なの
かもしれないね」

代償ですか……人が捻じ曲げた、とはいえ私達もヒトゴロシをしているのには、変わ

りないという事ですね。

「今考えても仕方ありません。今は今を生きる。それが最も重要なことなのです」
「そうですね。どのみち誰が最後になるかも解らないのですから、未来の事を思つて居ても仕方ありません」

私は黙つていきなり団子を頬張る。

少しばかり、塩辛い味がしたような気がした。

Out Side

おやつ時間が終わり、皆も自分の用事の為に散り散りになっていく。

途中、鈴蘭が瓶子に捕まってどこかに連れていかれてしまったが、たぶん裏で陰干しされていた彼女の服の件だろう。

篝火もとりあえず自宅に戻ることしよう、と思つたところで。

「篝火！」

声をかけられる。この声はいつもと同じ、甘藻の声。

思いのほかその声が強く、怒っているようだ。

「はい、どうされました甘藻さん」

「どうしてもって、本当にあれでよかったのか？」

「そもそも、篝火ねえも関係ないことだっただろう。どうしてそこまでするんだ」

月桃も会話に参加する。彼女の様子を見ると自分の媒体の手入れの仕上げをしているようだった。

「そこまで、と言われましても。私は私なりの考えで動いているだけにすぎませんよ」
「篝火なりの考えって言ってもなあ」

「先ほども申し上げましたが、私があげる本人で、私がいいと言ったのですから問題ありません。貴女達には害もなかったはずですが」

「見てるこっちが苦しくなるんだ」

手入れを終えて、軽くそれを振る彼女。

その言葉に同意するように、甘藻も首を縦に振った。

「何故苦しいのですか？ 気に病むことはないのですよ？」

「篝火は何も解つちやいない。どうして毎度自分の身を削るんだ。お前に何の関係もない」
「い」

「この前の椿ねえと千鳥ねえの件もそう。どうしてそこまで……」

「それが私の本心ですから」

「この身を削いで守れるならば、守ってあげたいのです。たとえ四肢を投げ出しても、命

を投げ出しても、守れるのであれば」

「……………」

そこまで言われて答えなくなる二人。

この者は止められない。そう理解したのだろうか。

S i d e 篝火

月桃さんが語った話。それを少し振り返ろう。

そう。私が皆の争いまでも止めようと決心した、あの事件。

確かその頃は、皆さんがまだこの場所で楽しく暮らしていた頃の事だと思う。

私が自分の家で掃除をしている時、母屋から轟音が聞こえてきたのだ。

何かいけない予感がした私はそのまま即座にその場へと向かった。

その時、自分でも何故カミサマにならなかつたのだろうかと、後悔している。

母屋に息も絶え絶えで着いた時には、大変なことが起きていた。

庭には大きな穴が開き、いくつもの木が倒れていた。

その場に居る唯一の年長である甘藻さんと年中の百合さんは年少組の皆をあやすので精いっぱいだった。

年少組と言っても、鈴蘭だけがない。

そして、庭の方で影が3つ。

椿さんと、千鳥さんと、桔梗さんだ。

3人とも、カミサマ姿で戦っている。止まらないことは目に見えていた。

決着が付く以外では。

「隙あり！」

「……」

先ほどまで3人とも止まっているようであったが、千鳥さんが桔梗さんに襲い掛かる。

しかしそれを素直にやらせてもらえないのは私も知っている。

案の定千鳥さんは桔梗さんの腕で吹き飛ばされ、木に激突した。

「い、一体何があったんですか……これは……」

「あ、か、篝火！」「篝火!?!」

「甘藻さん、百合さん、これは何があったのですか！ 桔梗さんまでも……!」

「そ、それは椿が！」

「わかめが無くなったって千鳥さんに襲い掛かったからで……！」

私の問いかけは桔梗さんには届かなかったようで、彼女らはこちらを見向きもしない。

それどころか、椿さんが千鳥さんの方へ走り、千鳥さんが近くにいた桔梗さんに包丁を付き刺そうとしていた。

このままでは、相討ちは……いや、犠牲は……！

「っ！」

「篝火！」

カミサマ化して咄嗟に出る。後ろから止められたような気がしたが、もう止められない。

自分のマントを外し桔梗さんに包ませてそのままの勢いでタツクル。

後は二人の伸ばした刃を自分の包丁で止めれば……！！

ザクツ……

「「……え」」

貫く音が耳に届く。

私が目にしたのは椿さんの包丁が私の胸に付き刺さり、腹から伸びた鉄の角。

そして、地面に投げ出される桔梗さんの姿だった。

全身から力が抜ける。カランと自分の持っている包丁が落ちる。

膝から崩れ落ちる。

「ゴブツ……」

空気よりも液体を多く含んでいる何かが逆流してきて、口から吐き出される。

紅い紅い、私達にとってはとても馴染み深い色だ。

血。血液。

そうか、これが死という物か。

不老不死と言っても、死にはするののか。蘇生するだけで。再構成されるだけで。

命とは、一体。

なぜこうなったのか。その思考に至る前に私は力尽き、目を閉じた。

どうやら私は本当に死んでしまったらしい。

目を覚ますと自宅にいたので、今度はカミサマ化して母屋に走った。

母屋に着けば、椿さんと千鳥さんが必死に謝ってきたので、私はいたって普通に

返した。

話によれば、椿さんの干していたわかめが無くなったのが原因で、千鳥さんを疑い争いが始まり、それを止めるために桔梗さんが参戦、ここまで事が大きくなってしまうらしい。

そこに私が割り込み、桔梗さんを狙っていた二人の包丁が私の体を突き差して私に、熱が冷めて止まったそうぞうで。

そしてそのわかめは葵さんが天候を気にして、椿さんに言わずに移動させていたらしく、結局は椿さんの思い込みから始まったのであった。

そもそも私は関係ない争いごとと巻き込まれただけに過ぎない。

私は、ただ中に入っただけに過ぎないのだから。

でも、それでも私は皆さんを止められたのだから、不老不死なら、この命安いものだ。「そういえば、桔梗さんは大丈夫ですか?」

「私ならお蔭さまですよ」

声をかけられた方を向くと、片腕を失った桔梗さんの姿が。

「申し訳ありません桔梗さん。私がかう少し早く来ていては……」

「いえ、これで済んだのも篝火さんのお蔭です。しかし、貴女が体で庇うことはなかったのではないのですか?」

そもそも自分を盾にしようとは考えていない。

私の長い包丁があれば止められると思った。

だが、その前に桔梗さんをタックルでずらしたのは間違いだっかもしれない。

それで私が二人の間に踏み込み過ぎて、結果として私が犠牲になってしまったのか。

「これで私は自分で死ねないわけではありませんからね。あのままでは両腕を失いかねませんでしたし」

「……どのみち、死ななければいけないのですね」

「皆さんのお手を煩わせるわけではありませんから、罪悪感はないですよ。むしろ私達にとつてこの死に方こそが本来のあり方ですし」

そういつてその場から去つていく桔梗さん。

皆に死に際を見せたくないのだろう。

それでも私は、彼女達を争わせてしまった。

だから、次はこんなことが起きる前に皆の姉として、年長組として、争いに発展しないように最善を尽くそう。

その時、私の何かを犠牲にしなければいけないなら、それは喜んで犠牲にしよう。

それで、止まるのであれば。